
風のたもと ～エンドの剣～

日野 美冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のたもと　　＼エンドの剣＼

【Nコード】

N7251M

【作者名】

日野 美冬

【あらすじ】

街で平和に暮らしていた少年には、世界に隠した秘密があった。あるできごとをきっかけに、少年は戦争に身を投じ、その中で自らに秘められた真実をかいま見る。

風の前12年 緑雨 ジロン（前書き）

こんにちは。日野です。拙作に興味をお持ちいただきありがとうございます。

感想、ご指摘等いただけたら幸いです。

風の前12年 緑雨 ジロン

最低限の蝋燭しか灯していない、小さな部屋だ。しつとりと濡れたような表面を持つ黒い石で、壁も床も天井までも覆ってある。調度の類は、何もない。

唯一あるのは、床に赤い染料で描かれた、妖しげな模様を囲む円。いつかな規則性を持たない赤い曲線たちは、中心でもうひとつの小さな円を成して収束している。古い陣だ。古い、古い……降り止まぬ雨と同じ歴史を持つ呪いの陣だ。

黒い部屋には、縋れた金髪の女が座っている。女の揺り椅子の傍らには、椅子の影のような男が立っている。

ユーシアは、入ってきた扉のすぐ脇で足を止めたきりだった。

三人が共に見つめている先は、陣の中央。小円の中に立ち、瞑目しているひとりの少女である。

背中に届く長い髪は、おぼろ月の光。頬は氷雪、瞳は透徹した深い湖。細い顎から首にかけての白さと華奢さが、対照的な黒一色の衣装によりいっそう際立つ。そこにひと差し、真横に結ばれた唇の、雪原に散ったツバキの花びらめいた絶妙の色合い。無表情という最低の表情をもつてしても、彼女の美は揺るがない。そして彼女が深く集中すればするほど、その力の強大さに感服せざるを得ない。

この完全無欠の存在の隣で取るに足らぬ我が身を顧みて、ほぞを噛むのにももう慣れた。

ユリアとユーシアは、生まれた時から共にある。

「見つけた」

目を閉じたまま、ユリアが笑った。

椅子の影が無言のまま進みでて、室内の蝋燭をひとつひとつ消していく。真っ暗になった部屋の中で、円陣の赤だけが発光する。光は突然の闇に驚いたように、ぴかりぴかりと不規則に明滅した後で、ぼんやりとしたところに落ち着いた。

ユリアは、この上なく大切なものを抱くように、両手を胸の前で握り合わせた。

ユリアがみずからの意識の中へ果てしなく沈みこんでいく。そうすると、ユーシアの感覚もまた研ぎすまされる。普段はユリアにしか分からないその存在を、かすかに感じるができる。ユーシアはユリアにつながっている。そしてユリアは、その存在へとつながっている。

今そのつながりが、新たな関係に進もうとしていた。

さあ。

少女が歓喜の声で呼びかけるのが聞こえる。赤い光が、急激に増す。

来い、セントラ！

風の前12年 春 サナ 〔若い力〕

瞬間、体の芯から熱が流れ出た。抜けた、と自覚した時には、がくんと地に膝がつく。思わず知らず押さえた胸は、閉じているべきものが開ききっているような、おぼつかない感覚に苛まれる。

「イルっ？」

呼び声で、我に返る。噴水から迸る生き生きした水のような、美しい金髪の少女が立っている。肌は白磁、瞳は晴天の青。えも言われぬ均衡の輪郭と、首筋から肩にかけての筋肉のほどよい張り、そして腰から足の先に至る造作の妙。輝くばかりの乙女は、しかし無骨な軍服に身を包み、細身ながら使いこまれた剣を手にしている。上気し、若い熱気と興奮とに彩られたその姿は、はかない少女ではなく、雄々しい戦士だ。

彼女はこちらを見ているが、体はあちらを向いている。その向こうから、敵方の影が今しも襲いかかるうとしているのが見えた。

「なんでもない」鋭い声で、答える。「振れ！」

促しに、ひと声の気合いが返った。敵は、三人。いずれも紫色の制服を身につけ、錫杖を、斧を鞭を持った俊敏な男たち。少女は、彼らのしかける呪いの術式に眉ひとつ動かさず、剣を下げ、空を切り上げる。美しい弧を描いた剣戟は、敵の体に届かすにはほど遠い。だが、少女は間合いを見誤ったわけではない。剣の軌跡からしなるように生まれた波動が、振り切った勢いそのままに、見えない刃となって相手めがけて広がった。かまいたちでも起きたように、三人の武器が柄の許からすっぱり切り裂かれ、得物をなくした面々は、勢いあまってそのままつっこむ。少女がさっさと身を躲して誰もいなくなったその場所で、三人仲良く激突した。

周囲から、にわかに喝采が沸く。

「勝負あり！ アーテス、イルオール！」

審判の声が上がり、群衆の興奮が高まる。いつも剣を掲げてそれ

に応えていたはずの少女が、足早にこちらへ寄ってくる。

「勝った！」

膝をついたままの不安定な格好で、駆けつけ一番首っ玉にかじりつかれる。

「わっ」

「やったぞ、イル！ 勝ったんだ！ ははっ、ははは！」

「ばか！ 離れろっ」

彼女のおおらかな感情表現には慣れてはいたが、今ばかりは全力でつっぱねざるを得ない。

しかし時既に遅く、歓声は勝利の祝福から別のものへと変わっていた。

「やってくれたな」

前に行く老人が、奇妙に嬉しそうな笑いを込めて言う。少年少女は、そのぴったり三步後ろに並んで従っている。

「当然です」と、少女。「実力の差は歴然です。はっきり言って、他のやつら、弱っち」

「アーテス」横から、少年。「若輩と見て、情けをかけてくださったんでしょう」

「はっはは。お前にそう言われてはな。国中の術師たちの立つ瀬がない……：：：しかして、南方隊に呪術師でない者が入るとなれば、初めてのことだな。どうした訳でこのような妙齡ユミの令嬢を対に選ぶことになったのか、後々、とくと聞かせてもらおう」

「はあ、まあ……相変わらず楽しんでいやがりますね」

「イル」横から、今度は少女。「お前の方が態度ひどいぞ？」

エンド帝国皇宮、北の廊下。

磨き抜かれた白石の壁に、青を銀紗で縁取った上質の絨毯。簡素の中に品のよさを追求するエンドの皇族たちの性質は廊下の端にまで行き渡り、余計な装飾を一切除いた代わりに、一部の隙もなく整

えられている。右手に等間隔に開いた窓からは昼の日差しが降り注いで、空気まで清浄に輝いているようだ。

先導の老人は裾の長い紫色のローブを纏い、若者たちの言葉を背中で聞きながら、慣れた足取りで目的の場所へ進んでいく。少女アーテスも、戦いの間放り出していた上着までをきつちりと身につけて、今やすっかり皇帝に仕える剣士の姿。ひとり普段の町着でやってきた少年イルは、傍目には明らかに浮いていた。

しかし、すれ違う誰も、彼を怪しんだりはしなかった。宮仕えの老呪術師が率いているからではない。

少年にとって、ここは幼い頃を暮らした家のような場所だったし、何より……彼自身の心境は複雑なものだが……この帝都にいて彼を知らぬ者は、ひとりもないのである。

「おい、イル」

ふいに、アーテスが息のような声で呼んだ。イルは視線だけをそちらに寄越す。

「さっき」アーテスは一度だけ目を合わせ、すぐに前を向いた。「どうしたんだ？」

「さっき？」

「決勝戦の、最後」

「……ああ」

「転んだってわけじゃねえだろ？」

イルはちよつと眉をひそめた。

今も体に残る、何かが大きくずれたような違和感。初めてではなかったが、あれほどひどいことはかつてない。あまりの唐突な虚脱感に膝が折れたほどだ。

「分かんない。なんか、力抜けちゃってさ」

「あの状況で？」

話なかば、ひとつの巨大な扉の前で老人が止まったので、ふたりはぱっと口を噤み、三步の距離を保ったまま足を止めた。

黒檜に黒鉄を象嵌した重厚な扉は、おおらかに開け放してある。

老人は中の誰かに自らの姿を見せてから、右手を左肩に当てて敬礼を示した。

「陛下。決まりましたでございます」

「ああ」

中から、生真面目そうな声音が返ってくる。

「早かったな。入れ」

「は」

老人が中へ踏み入る。少年少女が同じ敬礼をしてそれに続く。

こざっぱりと片付いた、明るい部屋だった。

廊下と同じ落ち着いた青の絨毯の上に、皇帝の執務机がひとつ、左右にひとまわり小さい机がひとつずつ。皇帝が背にする壁には金の鳥のしるしを描いた紫色の帝国旗がかかり、その両脇の壁は、ほぼ全面、ガラス窓。扉と同様の材でできた窓枠に細かく区切られていて、絨毯にいくつもの四角い影を落としている。左右の壁の書棚には、続き物なのか、同じような色の背表紙ばかりがきちんと並べられており、いかにも生真面目だ。

そこでたったひとり、がっしりとして肩幅の広い中年の男が、正面の机に嵌りこむようにしてついていた。彼は広げた巻物の表に目を走らせていたが、入室者の足が止まったと見て顔を上げた。途端、意表を突かれて真顔を崩す。

目が合うと、予め教えられた礼儀に反し、イルは思わず目礼してしまった。記憶にあるよりずっと小さいと思った。歳をとったのだ。

エンド皇帝、ニレイである。

「これは久しい顔だ、イルオールだな！」ニレイはぴしりと刈り込んだ髭の下で、堪えきれないように笑む。「お前が出場していたとは。ラガシュ、隠したな」

「滅相もない」

若者たちを皇帝の前に押し上げて、自分は傍らに控えてしまった老人は、にやりと楽しげにやにさがる。

「私を覚えてるか」

皇帝は立ち上がり、ふたりに近寄った。

「こうして会うのはもう十年ぶりになるか。元気にやっていたのか？」

「はい。陛下も、お元気でしたか」

「元氣かだと？ 元氣だとも。私が元氣でなくなったら、誰がこの雑務の山をやっつけるのだ」

自分の執務机に乗った巻物と紙の書類と湯気の立たないティーカップとを睨み、ぼやいたかと思うと、それにしても、そこちらを振り返る。

「お前は五つの時とさっぱり変わらんなあ。面差しもそうだが、ひと目でお前と分かってしまった。そんなに痩せていて、ちゃんと仕事をしているのか。隣のお嬢さんと大差ないぞ」

「今一瞬にしてふたりとも敵に回しましたよ陛下」

イルはぼろつと本音をこぼした。ラガシュは視線でちらりと非難したが、アーテスは何も言わない。まったく同感であるらしい。

「おお、剣士アーテス、そなたも久しいな。変わらないか」

「おかげさまで」

今さら思い出したように声をかけられて、アーテスはますます憤慨する。

「そなたが対ユミなのか」

「はい」

「ふむ。どういことだ」

皇帝が尋ねたのは老呪術師ラガシュであつた。が、彼が答える前に、アーテスが前のめりに主張した。

「護国邀撃隊則第三条の一。作戦行動中、隊員は常にふたり以上の団体行動をとるものとする。この団体の構成員を対ユミとし、事前の取り決めに従う。非常の場合はこの限りではない……対ユミが呪術師でなければならいなんて、どこにも書いていないはずです」

「当たり前だ。邀撃隊自体がそも、呪術師だけの集団ではないのだから」

ニレイは難しい顔でアーテスを見た。

「だが南方隊は違う。南方隊は、呪術大国イエンゼンの軍勢を退けるのが主にして唯一の任務。呪いに対し、剣だけでどうやって対抗するのだ」

「だから選抜戦を選んだんじゃないやありませんか。真正面から入隊審査に行ったらって門前払いだと思ったから、一番説得力のある方法で」

「門前払いになると分かっているはずだ」

「でも私たちは、呪術師を相手に勝ちました！」

皇帝は腕を組み、真意を探るようにじいっと少女の顔を睨みつけ、ふっと目をそらした。

「ああ、分かっている。アーテス嬢が常々前線へ行きたがっているというのは、城中の知るところだからな」

アーテスは一瞬表情を緩め、しかし、次の台詞に顔色を変えた。

「だがお前はそうではあるまい」皇帝はイルに厳しい視線を差し向ける。「十三になった年にも、呪術寮には属さなかった。てっきりこのまま家業を継いで、静かに暮らしていくつもりなのかと思っていたよ」

「あたしが引っ張り出して来たんです！」

「そちらの言い分はもう聞いた。余はイルオールに問うている」

少女をぴしゃりとはねのけて、皇帝はイルに詰め寄る。イルは、その曲がったことには少しも容赦しないと云わんばかりの厳然たる姿を、まともに見返した。

「私も、そうだと思っていました」

「なんだと？」

「私自身、このまま鍛冶場を手伝って、ずっとこの街で、暮らしていくのだと思っていた」

皇帝が眉をそびやかす。イルは照れたような笑みを浮かべた。

「でも、そうじゃないみたいなんですよね。南へ行くことになるかも知れないって言ったら、おかみさんが、言うんですよ。いつまでここにいる気なのかひやひやしてたって」

「あいつめ、余計なことを」

ラガシュが口を挟む。イルは首を振った。

「言ってもらえてよかった。ぼくはまた、迷惑をかけていることに気づきもしないまま過ごすところだった」

「ふむ……出てきたまでは、いい。それはわれわれとしても望むところだ。だがこんな無鉄砲極まりない行動の片棒を担ぐとは、いたいどういう見だ？」

「……やっぱり疑問ですか」

イルは悲しいような目をして、ですよね、そりゃあね、と、自分に言うみたいに何度か呟く。

「うまく話せる自信がないんで、聞かれなきゃ黙ってようかと思っ
てたんですけど」

一度だけアーテスをうかがうと、イルは観念して肩を落とした。

ことの起こりは昨年夏。帝国軍の夏期入隊審査も終わって、遠くの方で一進一退している秋の足音が聞こえてくるころである。

少女は十七、少年は、十四であった。

風の前13年 夏 サナ

イルオールは実の家族を持たない。かつてはいたのかも知れないが、知らない。四つの時、すべてが失われたその瞬間も含めて、彼は一切を覚えていないのである。

ある男に拾われ、そのまま養子に入ったが、養父もまた、今は帝都にはいない。少年が六つになるころ、帝国軍の呪術師である養父は、南の戦争に駆り出されてここを去った。

少年は、街に預けられた。

街並みは、人々の暮らしぶりを表すように、たがいに寄り添いあい、支えあう岩家の連続。いったいどれが最初に建てられたのか、もはや見ただけでは分からない。

商店街の方へ行けばいっそう騒がしいが、イルが暮らすこの区画は、賑わうと言うよりも、活気に満ちていた。軒先で座って草を編んでいるのも、巨大な石材の山に登ってのみとんかちを振るっているのも、吹きさらしの作業台でしゃっと勢いよく布を裁っているのも、皆誇り高い職人たち。彼らは日々の仕事に打ち込み、深い自信に裏打ちされて毎日を澆刺と送る。

夏の日差しの下、イルは桶を吊った棒を肩に担いで、通りを東へ渡っている。前と後ろ、ふたつの桶にはたっぷり水が入っていて、歩きたびに、たぶん、ちやぶ、と涼しい音をたてる。イルはぜひそれを頭からかぶってしまいたいものだと思ひ、何度も踏みとどまった。つかの間の涼と引き換えに、半エールも離れた井戸まで逆戻りするのとは考えものである。

少年はやがて、一件の家に入った。

入り口に、扉や仕切りはない。ぽっかり口を開けた洞窟みたいなその中は、広大で天井も高い三和土である。灯りは南側の大窓から入る日差しだけで、誇りっぽい空気がその光に白く照らされている。炎天下の外よりも増してむっとした暑さと、金くさいにおい。壁

一面に立てかけられた、大きさも形も様々なタガネ、万力、コークスの山、作りかけの鍬や出来たての鋤。一番奥に、四角い天板を乗せた炉と、年季の入った金床^{アンビル}。

その傍らに腰掛けたタズのたくましい背中を見つけ、イルは声をかけた。

「ただ今戻りました」

タズは振り返りもせず、ぼそり、おうと唸るばかり。

イルがこの十年たらずを過ごした鍛冶場は、養父の元上司の弟嫁の実家である。と、説明するたび自分で笑ってしまう。なぜこれほど縁の薄い家に引き取られたかと言えば、養父自身に自分を預ける当てがなく、その当時皇宮呪術師の長であったラガシュという男に相談を持ちかけた結果、こうなった。ラガシュにも、イルのような厄介者を引き受けてくれる心当たりは、それくらいしかなかったらしい。剛胆で義理堅く、腕前がすべての職人氣質が息づく、この家くらいしか。

鉄の工具や簡単な剃刀などを造る工房は、大勢の職人を集めて作業しているところが多い。が、ここで主に造っているのは刀剣だった。一匹狼の棟梁の意向もあって、家族だけで、個人からの依頼を受けて槌を振るっている。

タズはその跡取りで、イルよりふたつばかり年上だ。ここへ来たばかりの、お互いまだ幼かった時には、よく一緒に遊びまわったものだ。やがてタズが十三になり、仕事を覚え、家を継ぐのだという自覚が芽生えるにつれ、彼はどんどん寡黙で無愛想になった。けれども、根のおおらかさと優しさは、イルにはちゃんと伝わってくる。責任感のあまり、こと仕事場においては、偉そうに、ぞんざいに振る舞っているだけなのだ。

「ああ、イル」

桶ふたつ分の水を焼き入れ用の器にあけていると、二階からひとり、ふくよかな女性が降りてきた。タズの母親だ。一家の主の妻女であるので、他の店子と同じように、イルは彼女をおかみさんと呼

び習わしている。

「ご苦労さん、暑かったろう」

「だいぶましになりました」イルは階段の中途を見上げて笑った。

「作業場の方がいくらか暑いくらい」

「そうかい」

家の仕事の合間に声を聞きつけて降りてきたらしい、彼女は階段を降りきらず、早口に言った。

「お前が出ている間に、アーテスお嬢様がこっちにいらっしやっつね。いつものところでお待ちだから、すぐに来るようになってお言い付けだったよ。あの人にも伝えてあるから、早くお行き」

おかみさんがあの人と呼ぶのは、他でもない、鍛冶場の棟梁のことである。さすがに、公爵家令嬢のお呼び出しとあっては、仕事中でも抜けさせざるを得ないらしい。アーテスが来ると、すんなりお許しが出る。

「分かりました。行ってきます」

聞き耳を立てていたに違いないタズは、しかし何も言わないまま新しい鉄棒を熱しにかかる。彼はどうも、イルがアーテスと交流することをよく思っていない節がある。イルが勝手に察していることだが。

空にした桶を片付けると、イルはタズの背中にもう一度声をかけて、さっさと鍛冶場を出た。

アーテスの用事はだいたい三通りしかない。何かいいことがあったか、いやなことがあったか、刃をこぼしたか。悪いことに、いちばん多いのは三つ目だ。

この間叩きなおしてやってから、まだ日が浅い。また研いでくれなんて言われた日には、剣を扱う者としての心構えを一から説きなおしてやらなければ。

アーテスのことを考える時、イルはよく空を見上げる。さんさんと輝く太陽を手の陰から眺めると、あっという間に額に新しい汗が浮かんだ。鉄を溶かす鍛冶場の熱気よりはましだったとしても、や

っぱり夏は夏らしく、暑いのだ。

いつものところ、と言われたので、イルは街をさらに東へ抜けた。東の端の、草原との境も曖昧な場所。民家の集まりからは少し距離をあけた、石や鉄のくずが山積みされて打ち捨てられた、うらさびしい場末に少年たちはよく集まる。

その場所に近づくと、しのぎを削る激しい音が聞こえはじめた。音の方へ急ぐと、ひとときわ高くず石の山の向こうには、果たしてアーテスとミチの激しい真剣稽古が繰り広げられていた。

街を背にするイルから見ると、背景はユイの大草原。宮殿を抜け出してそのまま来た感が満載の、体にぴったり張りつく袖のない黒いシャツに、青い軍袴という出で立ち。ふたりとも、夏の日差しの中だいぶ動き回ったと見え、むき出しの腕の湿った素肌が時折きらりと光る。

ミチがアーテスの横薙ぎを避けて身軽に宙返りし、着地した瞬間、ちょうど目が合った。ミチはにっこり笑顔になった。

「あ、イルー！」

「えっ？ あっ！」

背後に気を取られたが最後。アーテスの剣は一瞬にして弾き飛ばされ、くるくるときれいな円を描いて宙を舞い……イルの傍らにぱさりと落ちた。

「勝負あり」

全体重を前足にかけて踏み込んだ格好のまま、にっと笑うミチ。アーテスは、真っ赤になった。

「卑怯者っ」

「実戦訓練に卑怯も何もないだろ」

高らかに鏑なりを響かせて剣を納め、ミチは上機嫌でイルの方へ寄ってきた。

「お疲れ。待ってたよ」

ミチは、アーテスと同じ年の、心根の優しい少年だ。その気性で見かけによらず、幼いころからやっとうの腕は一級品で、十三になると同時に皇宮の剣士たちの仲間入りを果たした。

「また抜けてきたの」

イルは苦笑して答え、足許の剣を拾い上げた。

アーテスの剣は、アルトレット。一見ではレイピアとも見まがうが、それほど長さもなく、軽い。イルはその刀身を一瞥した。どこにも、ひびや欠けはない。

「せっかくアーテスが街へ下りるっていうからさ」嬉しそうに、ミチ。「ぼくだってイルに会いたいじゃん」

「しょっちゅうじゃないか。仕事してるのか心配になるよ」

「もちろん非番だよ。それにちゃあんと、こうして熱心な訓練を積んでるんじゃないか」

「訓練場でやってよ」

「冷たいなあ」

昔はあんなにかわいかったのに、とくすくす肩を揺らすミチに、イルはちよつと頬を染めた。彼らとは、帝都へ来た四つの時からの付き合いだ。ミチは当時もう七つの少年だったので、まだ赤ん坊だった自分のしたこともしなかったことも、はつきり記憶されてしまっていて非常にたちが悪いのである。

「で？ お呼びとうかがいましたけど？ お嬢さん」

声高に幼なじみを呼ぶと、アーテスは悔しさを隠しめせず、乱暴に答える。

「何ふざけたこと言っただよ」

「こっちの台詞だよ。こいつで刃を使う時はもっと擦るようになって、何度言わすんだ。あんなの当たったら一発で折れるからな」

アルトレットを投げて返すと、少女はふてくされてそっぽを向き、それを鞘に納める。

「折れないようなの造ってくれよ」

「だったらもっと切るのに向いたやつに変える？」

「……あのくそ重たいやつだろ？」

すねた口調に、イルは舌の先を出す。

「おかげさまで、軽量化にかけては信頼をいただいてますが」そしてふっと笑った。「あれでも重いとなると、それでそれなりの使い方を覚えるしかないよ」

「実際、前の剣の時より動きは速くなったよね。ほーんと、いいなあ。内助の功だなあ」

支給の大剣グレーテを携えたミチがわざとらしく言う。

「それで？ なんの用？」

イルがもう一度尋ねると、アーテスは途端にもじもじと唇を尖らせた。ミチがつついて促すと、わざと聞こえないようにするみたい

に、低い声で、呟く。

「落ちた」

「ああ」

そういえば、そんな時期か。

アーテスたちが属する組織には、ややこしいしがらみが多い。彼女は、エンド帝国護国邀撃隊、俗に帝国軍と呼ばれる軍隊へ入ることを望んでいるが、それには条件がふたつある。ひとつは十五歳になること。そしてもうひとつが、寮という組織に所属して必要な地位を獲得することだ。昨年、ようやくそのふたつの条件をそろえてから、アーテスは毎回入隊審査に参加している。もう、三度、同じ台詞を聞いた。

「また頑張りなよ」

イルも、四度目になる台詞を返す。

「あとは？」

「……それだけ」

「そ」

アーテスは、ただ知ってほしただけであって、何か慰めを求めているわけではない。イルはあっさり、話を切った。

それから、ふたりの剣士は何局かの手合わせをした。

帝国軍の入隊審査が何を見るものなのか知らないが、アーテスは決して下手ではない。職業柄いつの間にやら肥えてしまった目で、イルはその手合わせを楽しんでいた。どんなことでも、腕を上げれば上げるほど、その動きは美しくなる。ひとたび集中したタズの鍛造が、その散らす火花の形に至るまで美しいのと同様、ふたりの剣戟には無駄がなく、時に一切当たらぬのが不思議なほど、鋭い。

踊るみたいに軽いステップと空を飛ぶような身のこなし、敵を見据えて熱い炎をくるんだ瞳、荒い呼吸に開いた唇。飛び散る汗さえ、その存在を引き立てるためにそこに采配されたひと振りの星。そして……アルトレットのほっそりした白銀と一体となっしなる、その腕。

アーテスはきれいだ。まるで戦いそのもののように、荒っぽく、時にすさんでさえいるというのに、その存在はイルの目を惹かずにおかない。

「それにしてもお前、太くならないよね」

思う存分動き回って、そばで休憩を取っていたミチが、ふいにイルの肩をばしばし叩いた。

成長過程の少年が密かに気にしていることを、ずけずけ言われるのには慣れている。

「鍛冶に困ることはないよ。必要ないからつかないんだろ」

「ふーん？」

何かを試すみたいな顔をして、ミチは鼻で返事した。イルは、またアーテスを見る。アーテスはひとり、素振りと型を繰り返している。

「イルはさ」ミチがつと、顔をのぞきこんできた。「このままあそこに残るの？」

「……どういうこと？」

「世にも珍しい細身の鍛冶屋さんとして生きてくのかってこと」

「なんだよそれ」

冗談なら聞かないとばかり、背を向ける。ミチは不服そうに鼻を

鳴らす。

ミチもアーテスも、他の何人かの友人たちも、イルが世界に隠している秘密を知っている。だからか、時たま、こうしたおせっかいを言う。

十年前。アーテスの願いを受けて、イルは……と言うよりも、イルの力は……世界を震撼させた不治の疫病を撲滅した。それから、世界は少年をハーターと呼ぶようになった。救い主の意味を持つその名の奥に、人々が何を求めているのか、幼心にイルは理解していた。彼らが自分に要求したのは、長い不安の時代の終焉。ハーターの存在に依る安寧だ。

だからイルは、その後自身に起きたことを、そっと世界に隠した。年をおうごとに、呪術の力が弱まっていったこと。今では、すっかりなくなってしまったのだということ。

型の練習を続けるアーテスの、気合いの入った声が聞こえる。彼女は白銀の剣を振り、空を切り、飛びざまにくるりと回転してすぐに構える。ひゅ、ひゅ、と風を切り裂く鋭い息のような音に、きびきびとした動きに合わせて持ち手の金具の鳴る音。

体を動かしている時、アーテスは一番輝いて見える。刀剣まで、命を得たように見えるから不思議だ。アルトレットはまるで彼女の一部のように、彼女の意思のまま、ひらひらと舞う。

ミチも、アーテスも、必要とあらば、あれで人の命をとる。それだけの力を、自由に操れる。それは、すごいことだと思う。いくら不治の病を治したとはいえ、決して自分の意思で成したわけではない自分などより、よほどすばらしいことなのだ。

やっぱり、ぼくにあんなことができたのも、ひとえにアーテスのおかげだったんだろう……。

思い耽っていたイルは、ある時ふと、あるものに目を奪われた。

少女の輝きの内にある、何か今ひとつ伸びきれない余白。荒削りでありながら完璧な美をもった姿には、あまりに不似合いな不均衡に。

「どうしたの、イル」

そんなに分かりやすい変化があったのだろうか、ミチが気付く。イルは、うん、と曖昧に答え、アーテスを目で追い続ける。

なんだろう。引っ張られる。かつてそのあけすけな振る舞いに引っ張り回されたように、その伸びしろが自分を引き寄せる。アーテスが、跳ぶ。舞う。回る。見えない敵の一撃を避け、真一文字にそいつに斬りつける。ああ、あれほど言ったのに。そいつの刃を、そう真横から叩き付けるんじゃない。

イルが眉をしかめた、それは直後だった。

三人は驚きのあまり、しばらく口を開けなかった。アーテスの振り切った剣先から、風が起こった。それはアルトレットの白刃よりも鋭く、向かいに積み上がった鉄くずのいくつかを、ぱっさり断ち切ったのである。

「何、今、の」

鉄のかたまりが崩れ落ちる音の後で、最初に唸ったのは、剣を振った本人だった。

「……新技？」

「ばか言え」

ミチの戯れ言を一蹴し、アーテスは、愛用の剣を見下ろす。

「アーテス」

何かに操られるように、イルはそれを指差した。

「もう一回、振ってみてくれる」

「は？」

「いいから」

混乱したまま、アーテスは、アルトレットを振りかぶり、振り下ろした。剣先は再び旋風を生み、切られた草葉が風に舞う。

「ひょっとして」ミチが目を見開いた。「お前が？」

アーテスも思い当たって、イルを見る。一番驚いていたのは、イルだった。

風の前12年 春 サナ く更けぬ夜く

「そういう次第でして」

語り終え、イルは、居心地悪そうに頬をかく。皇帝ニレイも、老呪術師ラガシュも、アーテスまでが、しんとして聞き入った格好のまま、動かない。

「あの……何か、ご質問があれば承りますが」

「ああ。いや、そうか」ラガシュが、暑くもないのに額を拭った。

「ハーターが、呪力を失っていたとは……驚いた」

「しかし、今こうして選抜戦を勝ち抜いたということは」

ニレイが考え深げに言い出す。

「失ったのではなく、表に出せなくなっていたということなのか？

言わば、そのお嬢さんが『スイッチ』だと？」

「さあ、そうかも知れませんが」

「その現象を起こせるのはアーテス嬢だけか」

「ひととおり試した限りでは、そうでした」

「しかし、一度生まれ持った呪力が失われるなどという話は聞かぬ。そうだな、ラガシュ」

深く首肯して、ラガシュは請け合う。

「呪力の有無は、瞳の色のようなものです。生まれた時に決まったが最後、老いて変質する例こそあれ、なくなることはありません」

「ではやはり、なんらかの原因で閉塞されていたのだな」

「おそらくは。彼は子どものころから『スイッチ』は不得手でしたから……」

推論で話し込む大人たちを前に、イルは再び肩を落とした。隣を見るのが怖い。

彼らの反応は、想定した範囲の正にど真ん中と言ったところだ。どうも老人や学者たちにとって、イルは素通りできない謎であるらしい。だから昔、この宮殿に住みついていたころには、イル自身さ

まざまな調査を受けたし、知らない間に調べあげられていたことも多々あった。

明確な答えが出たことは、一度もない。

そして隣で黒い印象の気配を纏いつつあるこの少女には、どうしても許せないと宣言しているものが三つある。そのひとつが、意味のない詮議。まさに眼前の状況のことなのだ。

「あのう……」

努めて正面を向きながら、イルはおずおずと挙手をした。

「それについてはもう、分からないと思いますので……そんなことより、今はこいつの要望に応じてやっていただけると、非常に嬉しいのですが」

「……分かっている」

皇帝は渋面をつくった。

「規則だ。選抜戦の優勝者は、寮での地位に関わりなく、南方隊への入隊が許可される。規則を破るは秩序を乱す。それだけはならん」
どす黒く濁っていたアーテスの瞳が、一変、輝く。

イルがとりあえずほっとする傍ら、皇帝はそれを無視し、苦々しげにふたりの若者を睥睨してから威厳を帯びた声で告げた。

「アマルナがな」

養父の名に、イルはぴくりと眉をそばだてる。

「やつが昔、先代に、ひとつ恐ろしい呪いをかけよってな。余は皇位継承の時、その呪いをも引き継いだ。お前がもしそれを解いて見せるというのなら、規則に従って許可を出そう」

「解呪、ですか」

「そうだ」

解呪の術は、数ある呪術の使用法の中でも、最も複雑なもののひとつだ。解くべき呪いを施した術者よりも強い力があることが大前提にはなるが、その条件を満たしたとしても簡単には行えない。対象の否定干渉を読み解いて、『説得』する必要がある。

聞いて言えば、思うようにみずからの力を操れなかったイルには、

まったく不可能な術だったと言うことだ。今となつてはアーテスを介した呪撃の術しか操れなくなったのだから、なおさらだ。

少年の表情が曇つたのを確かめてから、ニレイは続けた。

「アマルナは先代にこう言った。いまだ幼いながらさる必要が生じて、『ジャッジ』を教えたい子どもがいる。しかし戦乱のこの世に『ジャッジ』を使いこなす呪術師になるということは、邀撃隊の隊員たりうる人材に、はからずもなってしまうことを意味する。ついで、本人の意思による以外には、ゆめゆめ、出征など命じてくれるな。十五になり、自ら志願のない限りは、決してこちらから話を持ちかけることなきよう、ここできっぱり誓えとな」

皇帝はそこで、愉快を押し殺し損なつたように口の端を上げる。

「親心ゆえの談判だろうが、考えてもみろ。最強と謳われる呪撃師の言葉だぞ。本気のあまり、当人も知らず、呪詛の力を加えているやも知れんではないか。そらおそろしくて、先代も余も、お前を前にしては護国のごの字も口にできんだ。どうだ。この呪い、解いて見せるか」

イルはきよんとしていたが、皇帝の言わんとするところを理解して、ぷつと吹き出した。笑いながら、答える。

「ご心配なく。私は私の意思でここにいます」

「誠か？」

「だって」

居住まいをただし、イルは言った。

「みんな、行ってしまいましたから。先生の専門柄、知り合いはほとんど。親友もひとり。心苦しいし、心細かった。今までは自分にできることはなくなつたんだと諦めていましたが、今は違います。できることがあるのなら、私は呪術師の存在意義に準じたいのです……それに、こいつをひとりで突っ走らせるわけにいきません」

「……そうか」

ニレイは言いたいことを呑みこむかのように、唾を呑む。後ろ手を組み姿勢をただと、張りのある声でのたまつた。

「入隊許可だ。あとのことは、その老人に従え。ただし、そのお嬢さんはお前がしっかり守って帰れよ。呪いも恐ろしいが、マーテス公爵に一刀両断されるのもごめんだ」

「了解しました」

ま、守られるのはぼくの方だろうけど。イルがささやくと、ようやく事態を把握したらしいアーテスが、諸手と共に歓声を上げた。彼女の夢が叶ったのは、単純にいいことだなあ、とイルは思った。

それから何日かの間は、想像以上に忙しかった。

表彰式やら何やら、選抜戦後のお祭り騒ぎは得意ではなかったが、アーテスに叱咤されて向かった。なるべく目立たないようにそつと行つてそつと帰つてこようと思つていた。が、実に十年ぶりにまともに顔を合わせた知り合いたちは、一様にイルを歓迎した。

「ひさしぶりねえ、元気だった」

「こりゃあまた立派になつて。いくつになつた。はあん、十五か。

末恐ろしいのお」

「今までどうしてたの？　ずっと下にいたんでしょう？」

「まあ、まずはこっち来い。ゆっくり話を聞かせろよ」

乞われるまま、当たり前障りない程度にしていたはずの身の上話の聴衆は、皇帝主催の主会がおひらきになり、夜が更けてもいっこうに解散しない。それどころか、かたづけを終えた料理人や使用人までが加わつて、ほとんど最初から話しなおすはめになる始末である。「なーにやつてんだよ、もう朝になつちまう。ああ、お集りの皆々さま、こいつはとんでもない朴念仁なんですから。こういう場を華麗に切り抜けたりなんか、できっこないんですからね。誰か解放してやらないといつまでたつても終わりやしませんよ。さ、来い、イル。帰って寝ろ。明日は、じゃねえや、もう今日は、いつそう忙しいんだからな。お前、疲れて間抜けなことしやがったら承知しねえぞ」

アーテスに救い出されて、ようやく寢床に滑り込んだのは明け方近く。ほとんど眠つた気もしないまま、朝になってまた宮殿へ上り、

アーテスと共に様々な必要手続きを消化する。寮属のアーテスが多少事情を理解していたので、彼女に命じられるまま、名前を書いたり、捺印したりを繰り返す。その他諸々、イルには意味の分からない雑多の雑務に追われていると、あっという間に、数日が過ぎた。慣れないことのしどおしだったイルには、実のところ、あ、なんて言っている暇さえなかった。

「呪道が使えないので、馬になるそうです」

いよいよ出立を翌日に控えた夜、夕の食卓で、イルは報告した。鍛冶場の二階の小さなテーブルには、一家の主であるバンスとおかみさん、バンスの両親におかみさんの母親、タズと、その妹のタラがいる。

野菜を食みながら、バンスが地の大声で言う。

「お前、馬なんていつの間に乗れるようになった」

「乗れませんよ。今しごかれているところです。二日で乗りこなせってね」

「しかし早いねえ、もう明日か」と、おかみさん。「ねえ、お母さん。これで早く戦争が終わってくればね。みんな帰って来られるわね」

「そうだねえ。そうなるといいねえ」

「母さんたちは他人任せが過ぎるよ」怒ったように、タズ。「ひとりの力なんざたかが知れてる。こいつになんでもかんでも任せようってのは筋違いだ」

兄と母、祖父母たちが話し合うのを、隣席のタラはひとりスープをかき混ぜながら聞き流している。ふと目が合ったので、イルが微笑むと、タラは何故だか真っ赤になり、ますますスープをひっかき回す。

それを見たタズはますます機嫌を悪くし、イル、と顎をしゃくつた。

「時間はまだいいのか」

「あ、ほんとだ」

窓の外に、低くでっかい月がもう顔を出している。イルは食後の挨拶をし、自分の皿を水場に片付けた。簡単に上着を羽織り、階下へ急いだ。

街はずれのいつもの場所に、もう全員がそろっていた。彼らはくず石や地べたに座り、あるいは突っ立って、イルを待っていた。春先のまだ冷たい夜風が、黒々とした草原を不思議にうねらせる。月明かりと星明かりが、少年たちの表情をぼんやりと映し出す。

「遅い」

石材屋のクルルがおもむろに言うのと、

「まったく、風邪ひいちまう」

醸造蔵のシリンが自分の肩を抱き、

「シリンは風邪はひかないと思うわ」

「そうよ。だってばかだもの」

繕いもの見習い、双子のココとノノが真顔で答え、

「まあ、ばかだから風邪をひくとも言えるけど」

染織師のドロシーがおさげをいじりながら呟けば。

「なんで俺がばかなんだよ！」

「だってそんな薄着で来たの、あんただけよ」

「言えてら。ユーキの山はまだ雪かぶってるってのに」

「クルル、てめえ！」

「シリンも風邪をひくのね」

「珍しいばかなのね」

「いい加減にしろ！」

「……はは」イルは安堵のあまり、間拔けた笑いをこぼした。「ごめんね、遅くなって」

「変わんねえよなー、こいつら」

「えっとねえ、それはぼくらもだと思うよ？ アーテス」
喧噪を見守っていたミチとアーテスが、イルの隣に並ぶ。

彼らは皆、イルの一番の親友たち。イルが世界に対して抱えた秘密さえ共有してきた、無二の仲間たちである。イルが宮殿預かりの孤児だったころに出会い、帝国軍の要職にある男の養子となってもハーターと呼ばれても、鍛冶屋の手伝いに落ち着いた後も、どんな時でもまったく変わらず接してくれた。慣れないことに翻弄されてくたくたになっただけでも、こうして顔を見れば微笑みが自然にこぼれる。いつでも楽々と、自分を思い出すことができるのだ。

「明日の朝、行くよ」

イルが告げると、仲間たちは騒ぎをやめ、しかし暗い顔をすることもなく、しっかりと、うなずいた。

「大将が先に行ってる」

クルルが言い、彼特有の、いかにも元悪ガキらしい笑みを浮かべる。

「一緒に、帰って来いよ」

「うん」

「すぐに終わらせてやるよ、こんな戦い」

イルが答え、アーテスが胸を張る。

彼らはそれ以上、何を話すでもなかった。けれど誰も、長いことその場を離れなかった。星がきれいで、月がきれいで、みんな、それに見とれたふりを続けた。

風の前12年 夏 アヤカ西部 戦線の森

南の森がようやく本格的な夏をむかえ、じめじめとした蒸し暑さが急にのさばりだした。雨は一時、止んでいる。かぶさりあって光をまともに通さない枝葉の下、葉ずれの音が、さわさわと辺りを満たしているだけである。

しかし、ヨウとカシーは、無限回廊のように続く細く高い木々の向こうに、はつきりと感じていた。一瞬姿をかいま見てすぐに見失ってしまった気味の悪い虫のような、不快な気配を。

「あーあ」

カシーはひとまとめにひつつめた髪の手を揺らし、ため息をつく。彼女の頭の上には、暗澹とした森の中で異様に目立つ色とりどりの花が咲いている……丸みの強い、裾の広がった傘だ。

「なーんか、最近多くない？　　こちら、疫病神？」

「えっ、ぼくもですか」

極めて心外だとばかり、ヨウは声を上げる。

「疫病神はカシーでしょ。　　ぼくがこんな不幸体質になったのはカシーと組んでからですもん」

「わお。責任転嫁」

「事実です」

軽口をたたく間にも、いやな気配は、そっと、少しずつ、こちらに近づいてくる。姿は、まだ見えない。だがこちらが気付いているということは、すなわちあちらからも気付かれているということの意味している。呪術師の目に呪術師の存在は隠せない。『輪郭』と呼ばれる境界線によって、くっきり他と分別されてしまうからだ。

「どう？」

「そうですね」問われて、ヨウは目を眇める。「中級の防御型と、上級の攻撃型ってところでしょいか」

「なんか、うちみたい」

「ぼくは中級ですか」

「なに、不満？」

「いえ、別に」

こちらの様子を、あちらもうかがっている。息を殺し、身構えている。

「突破する気かな」

じり、気配がにじり寄る。

「さあ。つっこんで来るんじゃないですか」

ふたりは同時に、互いに背を合わせる方向へ半身を引く。

「……それって突破するのどう違うの？」

「似たようなもんですね！」

言うと同時に、ヨウは左腕に嵌めた小さな盾を振りかざした。鈍く光る鉄の盾の向こうに某かの力が集結した瞬間、何かがぶつかり爆発する。刃物を擦りあわせるような甲高い音が立ち、一瞬の内に逃げるように森の彼方へ広がっていく。

一撃目を防いだふたりの前に、敵がその姿を現した。黒一色のローブ。顔を隠すように目深に被ったフード。西の民特有の、背の高さと、わずかに見える頬や手の先の異様なほど白い肌。

「わお、しかも男女ふたり組」第二撃を避けて飛び跳ねながら、カシーが口笛を吹く。「ますます、うちらみたーい」

「ぼくはあんなガリガリじゃないです！」

カシーが傘を畳むやいなや、敵のひとりがそれを狙った。黒ずくめの懷から短剣めいた武器をぎらりと閃かせ、呪術の刃で傘を切り裂こうとする。気付いたヨウが、カシーに盾を投げて寄越すような仕草をする。カシーの体の前に空氣の盾が浮かび上がる。それは敵の放った術を、寸でのところで弾き返した。

間髪入れず、カシーが傘を振る。と、別のひとりが、杖を振りかぶった。短剣使いを狙った力のかたまりは、そいつの放った横槍に当たって空中で弾ける。カシーは爆風を避けて飛び退りつつ、敵の得物を横目に捉えた。

「スチム工房のコルネーゼ仕様。あー、流行りにのっちゃった感じ」
ふわりと着地、そのまま両足を踏ん張り、両手持ちで傘を振り上げる。

「でもそれ、モデルが三つ前！」

傘を振り下ろす。先ほどより数倍大きい呪弾がその先から迸る。敵の杖使いはそれも同様に叩き返そうとした。が、両者がぶつかるより早く、ヨウの放った空気の手盾に阻まれる。盾は一瞬で消滅し、カシーの術だけが、敵めがけて疾走した。

爆発、衝撃、鼓膜を突くような高音。短剣使いは三身長も吹っ飛ばされ、大木の幹にしたたかに背を打ち付ける。杖使いが何かを喚き、そちらへ駆け寄る。

「ナイスアシスト！ さすがのコントロールう」

「中級ですけどね」

「なに、すねてんの？……て、あつ、逃げた！」

敵が敗走した。本部からは遠いとはいえ、この辺りを巡回していると知られるのも厄介だ。カシーが素早く追い、ヨウが続く。

間隔の狭い木々の間を、敵は慣れた足さばきで走り抜けていく。ふたりは時に木の根に足をとられ、思いがけず突き出した低い枝に目を打たれ、徐々に距離を離される。黒く細長い人影を必死で追いかける目の端に、ある時、まったく別のふたり組が映りこんだ。

カシーはぎくりとした。一瞬、新手かと思ったのだ。木々の向こうに見え隠れするふたりの内、片方の体つきがあまりにも西の人間とよく似ていたのである。だが違う。彼は黒の戦闘服ではなくくたびれた旅装束姿であったし、何より、呪術師ではなかった。連れらしい女にも『輪郭』はなく、明らかに東の出で立ちだ。

国境の森に、一般人？

「あ」

前に行く敵もまた、彼らの存在に気付いた。まずい。西の呪術師は血も涙もないを地で行くやつらだ。呪術師でない者であっても、ここで鉢合わせれば容赦はすまい。

黒いふたり組が、直角に方向を転換して旅人たちに襲いかかった。カシーは声を上げた。地図だろうか、呑気に何かの紙をのぞきこんで言葉を交わしていたらしいふたりが、同時にこちらを振り向く。遅い。敵の術式の方が早い。カシーは丸い傘の柄を握りこむ。ヨウも左腕を振りかける。

が、彼らの援護は、不発に終わった。

金髪の女の方が、涼しい顔で腰の剣を抜き放ち、その場でひと振り、空を薙ぐ。生じた旋風がそのまま刃となり、ならず者どもの杖を、短剣を、一撃のもとにまっぴつにしたのである。返す剣が今度は鋭い風圧を生み、ふたりをいっぺんに吹っ飛ばす。彼らはものすごい勢いで地面に擦り付けられ、長い尾をひきながらヨウとカシーの足許にまで転がってきた。

呆然とするあまり、敵が起き上がるまで手が出なかった。ヨウが慌てて、ひとりの両腕を後ろにねじり上げる。カシーも傘の先をもうひとりの喉に突きつけた。

黒装束どもが、何かを喚き散らす。西の言葉は分からない。カシーは先端を喉に食い込ませるようにして、そいつを黙らせた。

ふたりが固唾を飲んで見守る先から、旅人たちが寄ってくる。

彼らは馬を引いていた。青白い牝馬と、栗毛の二頭は、いずれも常馬であったが、鞍も頭絡も帝国のしるしを彫り込んでいる。女の方が着ているのは、だいぶ着崩されてはいたが、剣術寮の制服だ。

だが、男の方は。

細身の長身。薄い肌。改めて見ても、異民族の特徴が目につく。

頼りなげな骨格は顔の輪郭にも及び、きょとんとしたようなあどけない表情と相まって、なんだかこちらも少女めいて見えてくる。着ているのは有りがちな旅着で、外見からは出自を判断しがたい。けれども、その立ち居ふるまいのどこからか、敵意やいやらしい企みめいたものは感じられない。それどころか、見ていると何とはなし、体から強ばりが抜けていくようだ。

物理的な間合いのぎりぎり一歩外で、少女が立ち止まった。後ろ

で、少年が軽い会釈をする。間近に見れば、どちらもカシーやヨウとおなじような年齢であることがうかがえた。

頭のとっぺんから靴の先までこちらをじろじろ見回して、少女が口を開く。

「ひょっとして、南方隊の方？」

「……そっちは？」

忘れかかっていた警戒を露にし、カシーは問い返した。

「ああ」

少女が懐を探り……ふたりは瞬時緊張した……首に吊っている鎖を引っ張り出す。銀鎖の先にぶら下がっているのは、エンド帝国のしるしである鳥の彫刻をほどこされた、小さな銀の板だった。

「春期入隊の新人です」新人とは思えないぞんざいさで、少女は答える。「第三ラインの本部ってどこを探してるんですけど。こう空が見えなくっちゃもう、方向がさっぱりで」

「入隊？」と、ヨウ。「南方隊に？」

「そうです」

だって、呪術師ではないではないか。ヨウもカシーも、同じことを考えて、同じように口を閉ざした。たった今、この黒ずくめたちを剣のふた振りで退けて見せた力。呪術師を相手に、呪術以外の力は通用しない。

ふたりは顔を見合わせた。

自国の人間であることは間違いないようだから、ここに放置するわけにはいかない。どの道、この敵の間諜を連行しなければならぬのだ。旅人たちの目的地である、第三ラインの本部……カシーやヨウの本拠地へ。

風の前12年 夏 アヤカ西部（対峙）

エンド帝国呪術師長のおよその居場所は、幹部棟。広さのない、頑丈なだけのテントである。

外が明るい内は灯を灯さないから、日差しの気配があるばかりで薄暗い。入って正面に、祖末で巨大な木机と、背もたれのある木の椅子。そこから左手に仮眠用の小さな寝台、右手にかりそめの書棚。机上は、かつて帝都の宮殿にあった彼の部屋がそうであったように、雑然たるありさま。もはや何かも分からない書類の山と、インク壺に浸したままのペン、幾度も濡れて畳めなくなってしまった地図、金の皿に乗ったちびた蠟燭、山積みされた革張りの書籍、開きっぱなしのまま隙間風にやられてさっぱり関係のないページを見せている書籍、拳大の謎の石、先ほど食べかけたサンドイッチ。壁際を中心に床も、もちろん書棚の上も、寝台にまで、重そうな麻袋や木の箱、槍や盾などの道具類、そしてやはり本の類の山がいくつも折り重なって、いつかテントを外側へ押し崩すのではないかというていたらくである。

前言撤回、皇宮の自室はここまでではなかった。今はただ、かたづける時間が、ことに気持ちの余裕が、まったくないのである。先触れに届いたとある報せが、男の心をあまりにもかき乱していたのだ。その手紙が届いてから今までの決して短くない期間、歓喜と焦燥と後悔の間をいったい何往復したのだろう。

手紙は、先の春の審査によって選ばれた新入隊員たちの名簿だった。一般の審査とは別の、選抜戦枠。地位も経歴も関係ない、完全実力評価式の特別枠に、今期、二名の名前があった。その名を見た時、彼はそこらしばらく目が離せなかった。

暑さの盛りの昼下がり。すさみきったその部屋でその日何度目かに手紙を読み返していた時、開け放しの入り口に、剽軽な少女の顔がひよっこりのぞいた。

「あ、アマルナさーん」

カシーだ。第一大隊所属の呪撃師。今日は、巡回の当番だったはずだが。

「十二班、カシー、ヨウ。キツレの森で怪しいの二名確保、処置終了です。で」

少女が何かを手招いた。それに従って姿を見せた若者たちを見、呪術師長アマルナは白筋の混じった眉をしかめた。

今期から呪道が使えなくなり、新人たちは各自馬を駆ってここへ入ってきている。春から夏になり、ほとんどが顔をそろえたが、遅れているのがふたりほどいる。他ならぬ、アマルナをもっともやきもきさせているふたり組。

彼らが、そこに現れた。

「変なもの二名確保しちゃったんでー」カシーが、後ろ頭に手を当てる。「連れてきてよかったですね？」

「……ああ」

机の上に、アマルナは手紙を放った。まるで、こんなものに大した価値はないのだと、見せつけるみたいに。

「件の、遅刻者だ。ご苦労」

「わお！」

カシーが色めき立つ。外から、興奮した別の声も聞こえる。彼女の対のヨウだろう。

アマルナは興味のないふうを装い、若者たちを視界の隅に捉えた。剣術寮の青い制服姿、金の髪の少女。そしてその隣に佇む、張りついたような無表情の少年は。

「入りなさい」

アマルナは言った。厳しい声で。

「カシーたちは巡回引き継ぎを。それが終わったらまたここへ」

「りょうかい」

カシーとヨウがはしゃぎながら去っていく。旅疲れした格好に荷物を背負ったままのふたりの新人は、無言のまま中に足を踏み入れ

た。土のままの床を踏み、中央まで進み出ると、彼らはぴたりと足を止め、右手を左肩に当てる。その息の合いようは、まるで長年組んだ熟練の対だ。^{ユミ}

アマルナは手持ち無沙汰に席に座り、無意識に手紙を拾い上げてすぐに放した。正面を見据える。

それは十年ぶりの対面だった。

「名と、所属は」

「銃砲剣術寮所属、第四位、アーテス・マーテスです」

「呪術寮所属、イルオールです。位はありません」

「確かに」

声を低め、うなづく。本来なら首飾りの形をした隊員証明書である銀証を照合せねばならないし、質疑応答で確認すべき事項ももっとたくさんあるのだが、このふたりに限ってはいくら規則でも必要を感じない。片や超名門貴族の高名なるご令嬢、こなた手ずから指導した愛弟子であり義理の息子でもある少年。本人確認は顔を見るだけでじゅうぶんだった。

「ずいぶん遅かったな」

「はあ」

まっさきに遅刻を指摘した途端、アーテスが肩の力を抜いた。隣を指差し、唇を曲げる。

「おたくの息子さんが、なかなか馬と仲良くやれないものですから」

「言うなってばっ」

「事実だ」

「……しょうがないだろ、うまくいかないんだから」

アマルナは、声をもらしてしまいそうだった。小さく嗜める少年らしい声、すっかり大人びたその仕草。夢を見るような目眩を、慌てて押し殺す。

ここで感傷に浸るわけにはいかない。手心を加えれば、それは彼のためにも、国のためにもならない。自分も二度とここで威儀を保つことはできない。

「呪術師長、兼、南方担当連隊長アマルナだ」極めて儀礼的に、彼は名乗った。「まずは無事に辿り着いてなによりだった。こちらの都合で、手間をかけたな。きみたちのことは、既に報せを受けている……二十八戦全勝で選抜戦枠から志願。大したものだ」

少女は満足げに鼻をならし、少年はちらりと俯く。

「荷解きの前にやるのがいくらもある。それを済ませてしまうでしょう。まずは、馬の代金の返還を」

「あ、それがですね」

再びアーテスが返答する。

「馬も一緒にここまで来てしまいました。今のところは木の木に繋いでありますが、どうしましょう」

「サナでの指示を受けなかったのか？」

「いえ、受けましたけど。見事に失敗したんです」

南方隊は移動に馬を使わない。当然、宿営地に馬の世話の用意はない。

サナから乗ってきた馬は、安全圏の最南端であるヘレンという街で売り払っていくようにという指示があった。

「ヘレンに寄れないまま森に入っちゃった挙げ句、そのまま道に迷いまして」

「……森の中ならいざ知らず、平野で地図が使えぬのは問題だぞ」

南の森は深いので、来たばかりの者はたいていひとりでは歩けない。それでもまたたいていの者が、時間の経過と共に無事に歩けるようになるものだ。しかし元来の方向音痴となると、少々話が違ってくる。

「地図を読むのはこいつの役割だったのに、馬にかまけて」

「だから言うなってのに！」

「お前があたしに役目を放り投げたのが諸悪の根源だ」

「自分が地図読めないの棚に上げてその態度かよ！」

「ああ、分かった分かった」

子どもたちの口喧嘩に、アマルナは叱咤するでもなく口を挟む。

規定年齢に達すると同時に入隊してくる者は少なくはない。十五の少年少女がいかにか子どもであるかなど、百も承知だった。

彼らがまた、些細なきっかけで豹変する可能性を秘めていることも。

「馬たちの処置は私が預かる。とりあえずは必要書類を提出して、これに署名もしなさい。それから……」

規定に従い、入隊の承認に必要な書類をそろえさせる。

その間中、アマルナは彼らしからぬ遅鈍を見せていた。整理されていない書類束に足を取られたのも事実だったが、彼は、次の段階に進むのをためらっていたのだった。南方隊長としてあるまじきことに、なんとかやらずに済むまいかとさえ模索した。

「提出物は、以上だ」

だがそんな妙案などあるはずもなく、時は淡々と流れた。以上だと言いながら動きを止めてしまった隊長に、新入隊員二名が怪訝そうな目を向けている。

最強の呪術師は今、人知れず自分の運命を呪っていた。彼は眼前の少年を養子に取ってすぐ、側を離れることを余儀なくされた。父親としてしなければならなかったすべてのことを置いて来た。その悔いが、側にいられる限り親の役目を果たしたいという想いに変わるのは必然だった。

なのに、別離の次の再会が、一隊の長と隊員という立場を介したものであるというこの事実。

アマルナは最後の深呼吸をし、では、と重い口を開いた。

「新入隊員はすみやかに所属大隊と班を決定せねばならない。でないと今宵の寝床も決まらんのぞな。そういうわけで」

そつと、名残惜しいように席を立つ。

「表へ出なさい」

「は？」

アーテスが眉根を寄せる。アマルナは構わず、背中で手を組み、若者たちの横を通り抜けて外へ向かう。先に動いたのは、イルオー

ル。アーテスが不満そうに地面を蹴り、しぶしぶ続く。

カシーらがそうとう騒いだらしく、表にはもう野次馬が集まっていた。数十も居並ぶ灰色の宿営テントの中から、影から、木の向こうから、若い者はもちろん、ある程度落ち着いた年齢であるはずの者たちまでが、好奇心いっぱいの顔を向けている。彼らは出てきた呪術師長を見て、ひとしきりざわめいた。

まあ、いい退屈しのぎではあるだろう。それに、いつそこではつきり見せておいた方が、後々話が早い。この少年がいったい、どれだけ不可解な存在であるのかを。

アマルナは彼らには何も言わず、どこへともなく、呼びかけた。

「カイロ、エル」

群衆の中から、ふっとふたりの男が歩み出る。どちらも、アマルナ自身とそう変わらない年頃。老練の呪術師だ。

幹部棟前の開けた場所に、アマルナは立った。その両脇を固めるように、ふたりの老呪術師が寄り添う。突然の命令と、いつの間にか溢れていた見物人たちに驚いて、少年少女は目を瞬いている。じっと待つと、やはりイルオールが、後からアーテスが、おっかなびつくり、三老の前に歩み出た。

「そこへ」

淡々と、アマルナは命じる。

「正式に審査を通してここへ辿り着いたきみらを、南方担当連隊は歓迎する。しかし、われわれは書面を通してしかその姿を知らない……先に着いたすべての新入隊員たちも通った道だ。その力をここでわれわれに示せ」

少年たちが身じろいだ。

「ここは実力がすべてを支配する世界だ。弱いものにはそれなりの、強いものにもそれなりの役割がある。それは間違いない。割り振られねばならない。戦術、戦略、連携、すべてを見定めて采配する責任が隊長にはある。そして隊員個々にも、すべてを開示する責任がある。全力で、きなさい」

左肩を引き、右手のひらを上向け、差し出す。左右を守る呪術師たちもまた、体を閉じ、身構えた。

「われわれは徒手だ。選抜戦のような武器破壊は利かぬぞ」

風の前12年 夏 アヤカ西部（開示）

少女が何か言い、少年がささやき返す。少女は背に負った荷物を脇の方へ放り投げ、しゃん、と潔く剣を抜き放つ。細身の両刃。しつとりと輝く刀身は美しいが、射程といい、強度といい、あまり実戦向きではない。一方の少年は、荷袋を下ろしもしない。少女の背後を守るように、ひっそりと立っている。

「いいのですか。これでは事実上、一對三ですよ」

右から、エル。

「だがこれで選抜戦を勝ったのでしょうか」左から、カイロ。「暴れ馬をどう手なずけたものか。見物ですな」

アマルナは答えない。

彼はそつと、若いふたりを観察する。かつて、少年がまだとても幼かったころ、宮殿の白砂の訓練場で、呪術を指導した時を思い出す。あのころ少年は……イルオールは、怯えきっていた。見知らぬ世界と、見知らぬ自分とに戸惑って、いつも不安げに瞳を揺らしていた。十年。今、少年は微塵の迷いもない目をして自分を見ている。それが、どうも腹に落ちない。この目は、迷いを乗り越えたゆえなのだろうか？ もっと他の、不穏なものの影が、老人の目に見え隠れする。その姿が、とても脆く、危ういものに映る。

一方の少女は、抜き身の切っ先ごしにこちらを睨んでいる。彼女は呪いの力を持たない。しかし、まったくこちらを恐れる様子がない。抜く前よりも抜いた後、それよりもさらに構えた今。戦いに向かえば向かうほど、彼女はいきおい、輝きだす。

アーテスが、間合いを詰めた。こちらの想像を遥かに越えた速さで、銀色の剣先が首筋にまで迫った。アマルナが身を翻すと同時に、背後のふたりが左右に散る。鋭い切り込みを、躲すこと数度。跳び退り、少女との間隔が離れた瞬間に、向かいからエルが小手調べのような呪弾を放つ。腕を振る気配を、少女は逃さなかった。振り向

きざまに剣を振り切る。そこに、初めて術式が生じた。少女に襲いかかった力の波が、剣の軌道でかき消える。

見物の衆が、息を呑む気配。

「なるほど」カイロがささやいた。「つまり、あの娘そのものが武器のようなものなのですな」

「ああ……しかし、相変わらずだな」

弾くのではなく、消失させた。それほど力を発していながら、呪いの気のなんと薄いこと。まるでないも同然だ。

カイロとエルが二方向から放つ波状攻撃を、少女はひとりでさばききる。アマルナはしばし手を出さず、様子見に徹した。彼らの呪撃には何かしらの動きが伴う。少女はそれに全神経を集中し、刀身で受け、体で躲している。彼女が剣を使えば、そこに呪術が起こる。

イルオールはしかし、敵どころか少女の動きもろくに追っていない。両腕を寛げ、時折目を閉じさえしている。周囲になんら警戒をしていない少年の隙を、カイロが突いた。少女を狙うように視線を向けておいてから、その背後を打ったのだ。それでも、少年は動かない。うっそりと開いた瞳は俯いたまま、気付いてすらいらないかのようにだった。だが。

カイロの術は、少年の姿に重なると、吸い込まれるように、消えた。

イルオールはそれでようやく気付いたように、ふ、と目を上げた。その瞳の奥にある、すべての色を飲みこんだようなぬばたまの夜に、老呪術師たちは覚えず凍りついた。そこに、剣士が渾身の一撃を叩き付ける。南方隊の呪術師たちは、呪術師長の両翼がいつぺんに倒されるのをつぶさに目撃することとなった。彼らは今度は、声をあげてどよめいた。

「……立てるか」

構えを解かぬまま声をかける。いらえの弱々しさが、受けた衝撃の大きさを物語る。

すごい力だ。アマルナは聞こえないように舌を打った。

長年背後を任せてきたふたりの部下だ。アマルナは彼らに絶大な信頼を寄せていた。そのふたりが、にわか仕込みでは防衛しきれない。それも、かつては誰にも従うことのなかったその力が、今は何かしらの制御を受け入れている。

アマルナは腹を据え、微動だにせず、少女と少年を視界に捉えた。少女の体の向こうで、少年は柳めいて佇んでいる。その目がこちらの視線を受け止め……あっさりと、受け流した。申し訳なさそうに、苦笑する。

「……ふん」

アマルナもまた、頬を緩めた。ふいと構えを解く。

「カシー、ヨウ！ 戻っているか」

「はい！」

突然の呼び出しに、元気のいい返事。彼らはなんと幹部棟横の木のでっぺんから落ちてきた。高みの見物を決め込んでいたらしい。

「後で案内を頼む。もうしばらくここで待ちなさい……皆は散れ！」

余興は終わりだ」

「はい」

「りょうかい！」

カシーの興奮冷めやらぬ歓声に、周囲の緊張の糸が切れた。群衆はたちまち騒然となった。

アマルナはふらつく部下たちを引きつれ、早々に若者たちに背を向ける。アーテスが、腑に落ちないふうに首を捻り、抜き身を握りしめたまま、少年の方へ駆け寄った。

「イルオール、お前はこっちだ」

唇を尖らせたアーテスを宥めすかしている少年を、アマルナは背中ごしに呼びつけた。

「アーテス嬢、済まないが、今少しそこでお待ち願おう。この子と少々、野暮な話をしなければならいのでね」

少女の、ますます機嫌を損ねたらしい金切り声が響き渡った。

幹部棟に戻る。遅れて少年が、こちらの出方をうかがうように、

ゆつくりと入ってくる。改めて相対すると、アマルナは今さら、ぶるっとひとつ体を震わした。軽いくらみは、突然の暗がりには驚いた目のせいか。それとも。

「……久しいな、イル」

そう言う初めて、少年は屈託なく微笑んだ。

「はい。おひさしぶりです、先生」

彼はアマルナを、父でなく先生と呼ぶ。それは彼らが、親子となる以前から呪術の師弟であったためだ。

「変わりない、というわけにはいかなかったようだな」

「なんですか？」

イルはいかにも下手くそに、とぼけた。

「説明してもらおうか」アマルナは許さなかった。「ここへ至る経緯を。隠さず。すべてだ」

「え……」

少年が、もの言いたげに横に控えた老人たちへ視線を送る。

「案ずるな。これなるはカイロとエル。私団の中でも古株のふたりだ。私とともに、お前の出自を知っている……お前と出会った時に、連れていたのだな」

イルはそれで、ますます肩を縮こまらせた。今しがた出会った人間に、いきなりもっとも深いところまで踏み込まれたようなものだ。無理もないが。

「お前たちは、対の本質から少々ずれているな」

アマルナはやるせないように、組んだ両手に顎を乗せる。

「対とは、一方の方が一に、もう一方が助けとなって難を乗り切るよう定められた制度だ。お前たちはそうはいかないだろう。アーテス嬢がなんら躊躇なくわれわれに向かって来られるのは信頼関係の賜物。しかし、ひとたびどちらかが欠けたなら……残された方に生き残る術はない。違うか」

少年は答えない。

「イル、お前」老人は畳み掛けた。「どうやってそう出力を抑えら

れるようになったのだ？」

呪術の制御は、二方向からなる。力の影響範囲を決定する『ジャッジ』。そして力の強弱を決定する『スイッチ』だ。

立ち尽くしたまま、自分のつま先と何か相談でもしているかのよう
に視線を落としているこの少年は、正確無比かつ絶対の『ジャッ
ジ』の腕前を持っていながら、いつさい『スイッチ』が利かないとい
う重大な欠陥の持ち主でもあった。強弱がつけられないというこ
とはすなわち、「出す」のか「しまう」のかも制御できないことを
意味する。実戦本意の南方隊としては、それは戦力外と等価である。
だからと言って、わずかしき力を持たなかった者が多く選択するよ
うな、呪術と関わりない生活を送ることも難しい。彼らは呪術の基
礎をきちんと修めた上で、みずからの力を「しまいこんで」街に溶
けこんでいるからだ。

十年前、イルはそれでも、「しまい続けておくことができるかも
知れない」という可能性を示唆するまでには至った。それがちよう
ど、アマルナが南へ発ったのと前後してのことだった。少年のいち
ばん大事な時に、側にいられなかった。こちらへ来てからも、ずつ
と気がかりだったのだ。今、彼が昔と変わらない無邪気さとまっす
ぐさを残していることは、少なくとも人格を歪めるような最悪の事
態を迎えることなく、あの鍛冶屋で過ごしてこられたことを物語る。
だが。十五の子どものものとも思えぬ落ち着き、それに対して感
じた違和。完全なる無光の虚空の中、身動きひとつ取れなくなるよ
うな、あの目。

あれらは、少年本来の気質とは根本的に相容れないものだ。ひと
りの人格の中に、共存するはずのない……。

「……話は、します」

ため息まじりに、ようやくイルが呟いた。

「でも、ぼくにも事実以上のことは分かりませんかね？」

臨戦時の存在感が嘘のような薄弱たる様相で、少年は訥々と語り
だした。この十年に、その身に起きたことがらを。

風の前12年 夏 アヤカ西部 く戦場の友く

「なんなんだよ」アーテスは不平たらたらだった。「わけわかんねえ。なんであそこで切ったんだ？」

アーテスの隣には、派手派手しい大輪の花が咲いている。背の低い少女がさした傘である。カシーという名前で、ひとつ年下らしい。尋ねもしない内からそういう自己紹介をしてきた。少年の方もひとつ下で、ヨウです、と当たり障りないことを言ったが、何故か同年のはずのカシーにまで丁寧口調を崩さない。

カシーは、とっさに理解できない言葉を聞いたように、二三、目を瞬いた。それから、ああそっか、と勝手にうなずいた。

「アーテスは剣士なんだもんね。ごめんごめん。どうもねー。ここに呪術師じゃない人がいるって慣れなくて」

明るくはきはきした物言いは決して悪気のないことをうかがわせるが、どうも言葉の端々が癪に障る。

「どうということだよ」

眉間に陰を刻み、アーテスは怒鳴った。

「最後ですね」

ヨウが得意げに説明する。

「アーテスの対^{ユミ}がアマルナさんの『ジャッジ』を覆したんです。早い話が、勝負がついたってわけですよ」

「『ジャッジ』？」

それは確か、呪術を操る技術のひとつだ。イルが、敵の体をまったく傷つけず、その武器だけを狙う時に使っている。自分の剣から生まれた風が、両者を等しく吹き抜けていきながら、武器だけに作用するのは見ていて不思議なものである。

「アマルナさん、なんかしたか？」

「あの人はねー、フリーでダイレクトだから」

「なんだ、それ」

「呪撃するのに、武器も使わないし特に動きもないってこーと!」
何故だかカシーが自慢げである。「呪術も魔術も、みんな基本はイメージすることだからね。人間、長いこと武器やら弾薬やらを使っ
て戦ってきたもんだから、みんな自然とそういうイメージに偏るわ
けよ」

確かに今まで戦ってきた呪術師たちは、たいがい何かしらの武器
防具を身につけていた。選抜戦では、それを破壊することが直接勝
利とされたくらいだ。

ヨウも戦闘時には盾を使っていたが……カシーが振るっていたの
はこの傘だ。彼女はこれで”戦い”をイメージしているわけなのだ
ろうか?

「でも別に呪術に武器は必要ないし、呪弾が爆発する必要もほんと
はないんです」ヨウが引き取る。「単純に呪力が強いほど、そうい
った一般的なイメージに縛られず、敵の殲滅を直接的にイメージで
きるんです」

「……はあん」

分かるようで、さっぱり分からない。カシーは半端な表情のアー
テスを責めるように、立てた指で胸のあたりをぐさぐさ刺してきた。
「さっきのお三方はね、はっきり言って南方担当連隊の最高幹部な
んだから。中でも連隊長のアマルナさんは、ただ突っ立ったままで
周囲三エールの敵を潰せると言われる伝説級の人なんだよ? 呪力
もないのに平気で突っ込んでくアーテスには、正直みんなびっくり
そのアマルナさんの絶対の『ジャッジ』をさらっと無効にしちゃっ
たあの彼には、もっとびっくりだけどー」

「まあな」

自分も自然自慢げになり、慌てて渋面を作る。

「しかし、新人ごときの査定に豪勢な面子を使うんだな」

「あっはっはー! あっさり騙されちゃって」

カシーは喉を反らせて笑い、まるっこい傘をくるくる回した。

「毎度あの三人でやってるわけじゃないじゃーん。ていうかむしろ、初

じゃない？」

「なんだった？」

「ハーター・イルオール」

少女が急に、声をひそめた。上目遣いにアーテスを見上げ、いたずら好きの子どものように笑う。

「みんな知ってるよ？　ううん、顔は知らなかったけどね。今期その子が入ったって、みんなその話で持ち切りだったんだから。誰が百年ぶりのハーターの査定相手なんかできるかって、もう戦々恐々」「アマルナさんも、下手なの指名できなくて、自分でやっちゃまったんじゃないですかね」

アーテスは、本格的に顔をしかめた。

その名で呼ばれることを、イルは好まない。はっきり拒むことは決していないが、どこか自分のことではないように聞き流していることが多い。その実、そう呼ばれるたびに、むしろ罪悪感めいたものを感じているらしいのだ。

「笑わせんな」

「なにがー？」

「救い主だぜ？」アーテスは鼻で笑った。「あんな、泣き虫のへんてこにこれ以上世界が救われてたまるか。言っとくけど、あいつは今自分のことでもいいっぱいだからな。期待するだけ無駄だって。自分のことは各自なんとかする方が、よおっぼど建設的だよ」

「あ、同感」

反論を予想していた、アーテスは言葉をなくした。カシーが、秘密のおもちゃを発見したように瞳をきらきらさせて、花の下からこちらを見つめている。

「美人さんな上、男前。なーんか、アーテスとはすっごく仲良くなれそう！」

てらいもなくそんなふうに言われたら、本当に何も言えない。

少なくとも、先ほどからこそそと周囲でささやき交わしている、堂々としなない連中よりは、よっぼど仲良くやれそうではあったが。

「あ」ヨウが、テントを指差した。「終わりましたよ」

イルが、消えていったテントの中からひとり姿を現す。

どうせまた、皇帝やラガシュにしたようなうっとうしい説明を強いられてきたのに違いない。なまじ相手が身内なだけに、さらにつつこんだことまで聞かれてきたかも知れない。その表情はどことなく疲れて見える。

まったくあいつは。少しくらいはしょったり、ごまかしたりすればいいものを、真正面から逐一受け止めすぎなんだよ。アーテスは姉貴風を吹かせ、ちよつとからかいでもして景気をつけてやろうと考えた。少年の方へ、一步、足を踏み出す……その横から、遠慮も会釈もなく、カシーが飛び出した。邪気のない子犬が主人の元へ駆けていくみたいに、一直線に、イルのところへ。

「ね、イルの対はかっこいいね」

ちぎれんばかりに振り回す尻尾まで、目をこらせば見えそうだ。

「私はどっちゃかって言うとかわいいものの方が好きだけど。でもアーテスは特別。かっこよくってだーいすき！」

イルは完全に虚をつかれ、自分の胸くらいまでしか背のない少女をぽかんと見下ろしている。それから、苦笑いして言った。

「何したの、アーテス」

「……んだよ、その疑いの目は」

先を越された、と思い、何の、と自問する。いろんなものがないまぜになった気持ちを、アーテスは噛み殺した。

「お前を弁護してやったんだっての」

「弁護？」

「アーテスの言うとおりだね！」

カシーが、左足を軸にくるりと回る。

「だって、イルはもうハーターなんだよ？」そして跳ねるように歩き始めた。「さ、こっちこっち。配属先にごあんなーい」

早々と先に行くその背中を、イルもアーテスも無言で見送ってしまう。

「……なんの話してたの？」

「いや……なんつーか」

ふたりで立ち尽くしていると、ヨウが、行きますよ、と手を打つ。

「カシーがいつも言うんですけどね」

それでもためらうふたりに、彼は、こそ、とささやいた。

「ハーターは役目を果たした救い主さまの呼び名なんですって。みんないろいろ、言うでしょうけど。誰にもどうにもできなかったことを、既にいっこ、解決してくれたわけだから。それを理由にして次から次へとお願いするのはおかしいじゃん、ですって。これ、彼女が言うことでよくが納得した、数少ない言葉のひとつなんですけど」

どうですかね、ご本人としては？ 冗談めかして肩をすくめると、後はこちらを見ずにカシーの後を追っていった。

アーテスはその時、幼なじみの見たことのない表情を見た。見たことがなかったので、それがなんの感情から湧いたものなのか、なかなか分からなかった。

こいつ、喜んでんだ。

理解した瞬間、アーテスの頬に一点、赤みがさす。

その、純粹な高揚と、自分でも慣れない感覚に恥じらうような色を含んだ横顔は、少女のまなじりに強く残って、しばらくの間消えなかった。

風の前12年 零雨 ロイセン東部 へ再会へ

ロンは、やや冷たさの勝ちはじめた雨の音を聞きながら、深い森の中を黙々と歩いていった。

彼はひとりだった。自らも、負傷した片腕のじくじく痛む傷を庇いながらの孤往だ。

護国邀撃隊則第三条の一。作戦行動中、隊員は常にふたり以上の団体行動をとるものとする。この団体の構成員を対とし、事前の取り決めに従う。

非常の場合はこの限りではない、とはよく言ったものだ。

「ああ……くそ」

さすがにめげそうだった。

目の前で仲間を失ったことは何度かあったが、ふたりきりの任務中に、片方を死なせたことはない。直接的な責任感は、感じ始めると重きにすぎた。

帝国軍に属して三年足らず。

その間、あまりいい思いをした記憶がない。

ロンは、それはそれでいいと思っている。彼は何か思想があつて帝国軍へ志願したわけではない。幼少期に世話になった国家への恩返しがしたいわけでもないし、武勲功名に逸ったわけでもない。彼はただ、紛れこむためにこの森へ来た。

呪術師たちの中に埋没するため。

エンドは、悪い国ではない。その広い間口と深い懐とを、種族や民族の違いを越えて解放している、いい意味で奔放な国だ。そこに暮らす人々も、それは様々いるが、根っこところは悪い人間ではない。それでも、呪力児への偏見はなくなるらない。

国策や人心が悪いのではない。呪いの存在が不自然なのだ。

それに気付いた時、ロンは、矢も楯もたまらなかった。その衝動は若者特有の情動を併発してますます止めようもなく、少年は、呪

術師だけの世界を志したのである。

胸を開いてかきむしりたくなるような寂寥は確かに手強かった。けれど、ロンは、一方では自分の行動に驚いてもいた。

自分は十年來の親友たちよりも、ただ生まれ持った能力だけでつながっている者たちを選んだのだ。自分は捨ててきた。かの街に渦巻く偏見を笑い飛ばし、常にそばにいてくれた友を。そして何より、この世の何よりも眩しいと感じていた、ひとりの少女を。

不思議なものだ。

今だって、南方隊の仲間と街の仲間と、どちらがより大切かと問われたら、自分は即答するのだろうに。では、帰るかと言われたら、きつと残るのだ。傷を負っても仲間を死なせた罪悪感に苛まれても、本当に会いたい者に会えなくとも。きつと、この森を選ぶのだ。

森の色味に合わせて彩色した簡易テントの小さな群れに、ロンが帰り着いたのは宵の口だった。雨は小降りになったらしく、梢に瀟過されて霧のようにけぶっている。それが薄闇の中でひっそりと灯されている手灯りを、いっそう幻想的にぼかしている。あんまり現実離れして見えたから、ロンは、間違っただの世の入り口に辿り着いたかと思った。

腕と心の痛みとの孤闘に、失血も手伝って、彼はそんなことを思ってしまうくらい疲れ果てていたのだった。

灯りを持って立っていたのは、死出の旅路の案内人ではなく、仲間のコネリだった。彼ははっと外套の袖口で顔を隠し、高く火をかざして不審な来訪者を確認した。ロンだと気付くと、一転、慌てて駆け寄ってきた。

「何やってたんだ、心配したぞ！」コネリは言った。「イアラはどうした」

「死なせた」

ロンは短く答え、そのままテントのひとつに向かって歩いた。コ

ネリは息を呑み、何度か口を開きかけたが、結局何も言わなかった。ロンの後を追う。

医療班の寝起きしているテントでは、サザンがひとりで向こうを向いて寝そべって、何やら書物をめくって肩を揺らしていた。ロンは無言でそこに押し入り、サザンがこちらを向くより早く、そのやや太り気味の尻を蹴り上げる。ひああ、と妙に艶かしい声が上がった。

「包帯使うぞ」

用件だけを言い放ち、ロンは治療台に使われている机に向かった。コネリがどこからか小さな木の箱を持ってきて、机上に置く。

「帰ったの」

ようやく状況を把握したらしい、サザンは山の動物めいた目をきよろきよろさせて起き上がった。

コネリはそちらはおかまいなしで、ロンの左腕を取る。押さえつけどおしだった右手は、暮れると共に冷えきった外気にかじかみ、なかなか傷から離れない。むりやりはがすと、傷のただれの乾いたものがぱりぱりと音をたてた。ロンは思わず顔をしかめたが、声は出さなかった。ようやく自由にした腕を、テント内の明るさに晒す。

「火傷だね」

サザンが唸った。

「お楽しみだろ、おっさんは」背を向けたまま言う。「気にせずやってろ」

「見くびらないでよ。仕事は最優先してきたでしょ」

言いながら寄ってきた男に、コネリが傷口を預けた。荒っぽい治療には慣れていた。が、これだけ深い傷はあまり負わない。ひよつとすると初めてだったろう。意識というのは痛みでも薄れるのだということを、ロンは知った。

きれいに包帯を巻かれ治療が済んだ後も、しばらく呆然として、サザンが寝そべっていた場所を占拠して休憩せざるを得なかった。コネリは気を利かせて、代わりに上役への報告を買って出てくれた。

正直、ありがたい。女どころか男まで何やら面妖な目で見る怪しげな医者なんかより、百万倍もありがたかった。

「焼かれたってことは、やっぱり出くわした？」

椅子の上に移ってこりずに書物をめくっていたサザンが、ふいに言った。ロンはぼんやり天井を見上げたまま、ああ、と答えた。

「だから一対で行くなんて無謀だって言ったのに」ぶつくさ呟きながら、顔はにやついている。「あんたもついてないね」

「そうかもな」

「負傷したのは、あんただけ？　イアラちゃんは？」

「……跡形もねえよ」

怒鳴るように答えてやって、ロンは起き上がった。気が落ち着いたからではなく、ここにるのが精神衛生上よくないと判断したからだ。

「もういいの」

「おかげさんで」

「無理するとぶっ倒れるよ」

腕から発する痛みは波のように伝わって、いったいどこが本当に痛んでいるのか分からないほどだった。しかしロンは、足早に治療場を辞した。平静を保つための正当防衛だ。それに、なんとも情けないことに、腹が減って仕方がないのである。

どんな時でも腹だけは空くもんだと、いろんな先輩が笑って言うが、どうやら嘘ではなかったようだ。

外はすっかり冷えているが、そこだけは温かい、いいにおいのする湯気でおおわれている。小さな人だかりの向こうに、簡素な炊事場。かりそめの炊き出しである。

食事の時間には少し遅くなっていたが、それでも数人が行列を作り、または周囲で皿をつついている。ロンのいる部隊は少人数だが、ここはそれら全員を一度に賄えぬほどに小さいのだ。暗黙の了解のもと、それぞれ時間をずらして食事をとっている。自然、遅めの夕食となる者たちもあるわけだ。

あるわけだったが。

その少女を見た瞬間、ロンは傷の痛みなんかよりはるかに鋭い衝撃に打たれた。違う、いるはずがないと思いつつも、これが彼女以外の女であるはずがないと確信してしまう。

ちょうど行列の先頭で湯気の立つ皿を受け取ったところであった少女は、列から外れしなにロンに目を止め、あ、という形に口を開いた。そして、

「やつといやがった!」

変わらぬ調子でそう言ったのである。

「なんか、予定の時間に帰ってねえって聞いたからさあ」彼女は豪快に笑い、さくさくとこちらに寄ってくる。「ちょっと心配してたんだ。なんだ、なんかあったのか?」

ロンは驚きのあまり、自覚できるくらいの無表情で、少女を見下ろした。驚愕は予想していたとばかり、少女はおもしろそうにこちらを見上げている。

「……アーテス?」

「あ?」

「……な、んで、いんだよっ?」

「おー、その反応。期待どおり。さすがロン」

「ばっかやろう! 笑い事じゃねえ!」

大音声に他の数名の視線を注がれて、ロンは声を呑む。ついでに叫んだひょうしに腕がぴりりと痛んだ。まったくもって不条理だ。

「何してんだ、こんなところで?」

「晩飯」アーテスはかんかん匙で皿を叩く。「いや、こんなに混むなんて聞いてねえじゃねえか。待ってたらこんな時間に」

「そうじゃねえだろう」

「まああたしに会えて嬉しい気持ちは察するにあまりあるけど」

「だからそういう」

「どっちかつつーと、お前あっちの方が嬉しいんじゃないの?」

言葉をかぶせ、アーテスが親指を立てて自分の背後を指す。

その方向から、予め言い含められていたかのようにぴったりと、ひとりの少年が歩いてくる。右手にカップ、左手に受け取ったばかりの皿を持って、ぼうっと締めりもなくただ歩いている……その少年の顔がはつきりするにつれ、ロンは目を見はった。

目を上げてこちらを確認した途端、少年もまた竦んだみたいに足を止めた。並びのいい前歯でくわえた匙が、やるかたないように上下する。アーテスを挟んで、しばらく見つめあってしまう。

ここが雨の国でなかったら、地面にでもいいから座り込んでしまいたい。疲労困憊のところへ持ってきて、その驚きは……その喜びは！……とうてい耐えきれるものではなかったのだ。

「……とうとう抜かれちゃった」

「え？」少年は匙をくわえたまま、器用に喋る。「……ああ。成長期なもんで」

アーテスが、弾けるみたいに笑った。空きっ腹の底でちくしうと思いつつも、ロンは、自分も笑顔になるのを止められなかった。

風の前12年 零雨 ロイセン東部 く雨の夜騒ぎく

イルに続いて夕食を確保して現れたカシーが、大喜びで飛びついてきたので、ロンは再び激痛に身もだえるはめになった。ヨウが気付いて少女をひっぱがしてくれなければ、なんとか止まっていた血までが噴出するところだった。慌てふためき、ひとつに結んだ髪をぶんぶん振って頭を下げるカシーに、ロンは、いいから黙れと言った。それだけ言うのが精一杯だったただけなのだが。

「会えてよかった、ロンさん」

カシーを押しつけるようにして、ヨウが言った。彼と会うのは、対^{ユミ}を解消してから、半年ぶりほどになる。

「ぼくら、ロンさんのところへ行くように指示を受けてまして」

ロンはその瞬間、新顔四人を見回して、嫌な予感に顔をしかめた。諜報部隊に起きた最悪の問題を早急に解決すべく、送り込まれた助成要因といったところに間違いない。アーテスとイルの存在ははなはだ疑問ではあるが、自分に世話を任せようとしているあたり、決定的だ。

「今日、来たのか」

「はい！」再びカシー。「ついさっき着きまして、オレイン隊長のところに挨拶して来ました。そしたら、あんたたちのことはロンとイアラに一任しようと思ってんだけど、今いないから、ま、腹ごなしでもしてきたら？　て言われましたので、こうしてみんなで晩ご飯に」

「あーあー、なるほどね。はいはい」

目に浮かぶ。オレインはいい意味でも悪い意味でも、部下を信用している。そして腹のたつことに、彼女のその日の気分次第と言って過言でないその采配は、だいたいかちっと嵌るのである。ものぐさを勘の鋭さだけで補って生きてきてしまった女なのだ。

「あ、ロン」

その時、向こうからコネリが走ってきた。イエンゼンの土はぬかるんで、濡れた足音を立てさせる。

「ああ、カシー、ヨウも。ロンに会えたんだな、よかったよかった」ひととおりあいさつすると、コネリはロンの肩をひとつ叩いた。「オレインさんから伝言だ。その四人任せたから、今夜からよろしく。報告は明日でいいわ。体を大事にね。以上」

「ああ、今聞いたよ。まったく」

ロンが肩をすぼめると、コネリは訝しげに顔をのぞきこんできた。

「顔色よくなったな」

「悪かったか？」

「……まあいいや。今日はもう、飯喰って寝ちまえよ」

「ああ」

カシーがご機嫌で手を振るのに答えながら、コネリはテントの群れの中へ消えていく。ため息は、闇の中炊き出しの灯りを受けて、白々とした形を持った。ついこの間ようやく夏めいたと思ったのに、もう、朝晩は祖国の冬のようなのである。これだから雨の国は。

「俺も飯もらってくるから、ちょっと待ってろ」

それだけ言いおいて、ロンは短い行列の最後尾に加わった。

ひとつのテントにはだいたい三四人が一緒に暮らす。移動を繰り返す部隊だから、持ち運びと設置の簡便さが優先され、ひとつひとつが狭小だ。四人も入れば、折り重なるようにしなければ眠れない。ロンはしかし、配分の運で、このテントをイアラとふたりで使っていた。

適当に座れ、と敷きっぱなしの床を目で示しつつ、指先に熾した火を灯心に移す。今までのが広かったから、五人も入るといきおい手狭に感じた。

「はーい、じゃ、遠慮なくー」

「てめえはいっつも遠慮なんかねえだろ」

「アーテスだってイルには遠慮ないじゃん。恥も外聞もなくー」

「どういう意味だよ!」

「うるせえなあお前は」一番奥にどっかと座り、ロンは唸った。「で? なんて言われて来たって?」

「あ、はい」

あぐらのロンの前に正座に座り、ヨウが口火を切る。

「ぼくら夏いっぱいくらいまでは第一大隊にいたんですが、こっちで今ひと騒動起きてるって言うんで、異動になりました。来てみたらなんと、今回、ぼくら六人で組むようになって、オレインさんが」

「この前別れたばかりじゃねえか」

「そんな、いやそうにしないで」

悲痛な声を出すヨウの隣で、やっぱりちょこんと正座したカシーが、ものを噛みながら話を引き取る。

「ずぶの新人さんもいますからねー。ロンさんから話を聞いて、あと、今夜はここで寝れば? だそうです。なんか、色々複雑な縁のある面子みたいだから、いっちょよう寝食でも共にして親睦深めたら? て」

複雑なりにか。ひと言でかたづけやがって。

ロンはぼりぼり頭をかいた。

「というわけだから」後ろに突っ立ったまま匙を動かしていたアーテスが、口を開く。「さくつと説明してくれよ」

「あ、無理。俺もう、今日は閉店だ」

すっぱり切り捨て、これ見よがしにひと口頬張る。アーテスは青筋を立てた。

「仕事くらいしやんとしろよ、センパイ」

「疲れてんだよ」

「まあ、作戦終了直後みたいですしねえ」

ヨウがうんうんうなづく。ロンは、身構えた。

ヨウは呪術師の家系で、南方隊にもけっこう身内が多い。イアラとも、血筋としてはそう近くはないが、よく付き合いのある親戚だ。

「イアラ兄さんは」こちらの考えを読んだみたいにな、ヨウは言った。
「まだ何か用事ですか？」

「……あいつは、帰らねえよ」

「はい？」

「やられた」短く言い、皿を持ったままの包帯の腕を掲げて見せる。
「俺がこれで済んだのは、あいつがちょうど俺の前にいたからだ」
前列に正座したふたりが、言葉をなくす。ロンは皿に口をつけ、
最後の残りをかきこむ。

「ひと騒動つてのは、イアラをやった敵のことだよ。正直、しんど
いんだ。明日にさせてくれ」

「……それは違いますよロンさん！」

突然、身を乗り出して叫んだのはカシー。

「仲間の死は引きずるものじゃなくって大事にしまっておくもので
すっ。イアラさんだってそんなふうに言われて嬉しいと思いますか
！ 私たちは全員、覚悟決めてここに來てるんですから。そんな言
われ方したら、心外だと思います！」

彼女がやかましいのはいつものことだが、その劍幕はそれとは別
の……カシーには珍しい……強い真剣味を帯びていた。ヨウとアー
テスも目を丸めている。イルはひとり、考え深げに空の一点を見つ
めている。

「ああ。そう、だな」いやに素直に、返事ができた。「そうだけど
……よく言えるな、そんなこと」

「分かればいいんです」途端、真顔を笑み崩すカシー。「言いたい
ことは言いますよ。私の取り柄ですからね」

ロンもつられて苦笑した。自分の感覚の変化に驚いた。

この森では、人が死んでいくのは特別なことではない。だが決し
て、当たり前なことでもない。皆それぞれの方法で、どうにか乗り
越えているに過ぎない。

ロンの乗り越え方を、いつまでも乗り越えきれないという不器用
な方法を、ここの皆は知っている。だから、気を遣ってくれる。し

かし、どうだ。対^{ユミ}を亡くしたその日に、今日やって来たばかりの間から、遠慮されるどころかずばっと正論を叩き付けられてみて、自分のかえって、すっきりしているのだ。

「ま、そう、だけど」

ロンは皿を置き、右腕だけで伸びをした。

「俺は今このとおり、絶賛負傷中なの。明日ちゃんど、落ち着いて話してやつから。お前らだって、長旅の後だろ。とっとと喰ってとっとと寝ちまえ。無理は禁物」

「あ、それはそうですね！　じゃ、私ロンさんの隣取ったー！」

変わり身も早く、言うが早い。カシーが食器を放り、正座状態からは信じられない俊敏さで、ロンの隣に転がりこむ。ロンはぎよつとし、また痛みを予期して飛び上がった。彼女が抱きついたのは右腕だったのだが。

「ええ？　じゃ、ぼく、アーテスの隣取っていいですか」

さらにはヨウが、ぼそつと聞き捨てならないことを言いだす。ロンは慌てた。だが、ここでむきになって止めるのもどうなのだろう？　と言うか、なんだこのみつともない思考は！

「えっ、したらイルがひとりぼっちじゃない」右腕を拘束したまま、カシーが叫ぶ。「だいじょうぶだよイル、そんな悲しそうにしないで？　私のいちばんはいつだってイルだから。ただね、今日はひさしぶりにロンさんに会ったから」

「ああ。新しいもの好きだもんね、カシーって」

「わお。予想外の心の広さに逆にどきつとした！　あ、じゃあじゃあ、私の右っかわで寝る？　したら今日も一緒だよ？」

「えー。遠慮しとくよ。いくらロンでもな」

「てめえの……」芝居つけを含んで面白そうに応じていたイルの隣で、彼女が、切れた。「その、浮つついた舌はいったいどうやって止まるんだろうなあ！」

「やだー、アーテス、妬かないでよー」

「誰がっ。イル！　お前も軽々しく乗るんじゃない！」

「はいはい、すみませんでした、お嬢さん」

「適当か！」

「もう、いちいち怒るなつてば。どこでもいいから、さっさと寝よう？ 一日中アーテスのお守りでくたくただよ」

「あ、分かるー」

「てめえが言うな！」

ロンは呆れ果てて低い天井を仰ぐ。あまりの騒がしさに、やがて周りのテントの連中が様子をうかがいにやって来た。そっと入り口をたくし上げる彼らの中には、コネリの本気で心配そうな顔も混じっている。

ロンは、目だけでなんでもないと合図を送ったが、彼らが引き下からぬ内に、たまらず吹き出してしまった。

「お前らつて」必死に笑いを堪える。「なんか、もう、ほんつとに……阿呆だよなあ」

「あー、何がですよー、ロンさん」

「どうせこの人数じゃ、すし詰めじゃなきゃ寝れねえよ。せいぜい、親睦深めてろ」

「あ、そうですね。じゃ、ぼくも」

「お前はこっち！」

「ええっ？ ちょっと、何するんですかロンさん！」

「いいじゃねえか、昔組んだよしみだろ」

「ま、待って！ ああつ、やめて！ そこだけはっ！」

ロンは隙を見て右腕を引っ張りだすと、ぐいと手を伸ばしてヨウを一番奥へ引っ張り込む。逃げられた上に眼前で浮気をされたカシーが、イルに縋って大げさに泣き出す、アーテスはそれを見てまた罵詈雑言を浴びせかける。

腕を掴んで離さないカシーと、それをひっぺがそうとするアーテスにもみくちゃにされながら、イルは、入り口で唾然としている人だかりに目を止めた。

「あ。どうも、お騒がせしてます」

肩越しに、ちょっと会釈する。

「ご心配には及びません。しばらくしたらおとなしくしますから、少々お待ちを……て、本気で痛いよアーテス！」

「いえ……」のぞき見連中が態度を決めかねるように、曖昧に返す。「楽しそうで、何よりです……？」

ヨウの脇腹にくすぐりを入れながら、妙に冴えた頭で、ロンはそれを見ていた。

コネリたちの気遣いが、ありがたくないことはないが。もし今夜、あのままひとりで飯を喰い、ここでひとりで眠ることになっていたら、果たしてどうなっていただろう。

たぶん……どこかの何かが、一本へし折れたんじゃないだろうか。こいつらが来たのが、今日でよかった。本当に、よかった。そう思うと、不覚にも、今さら涙しそうになった。ロンは、仲間に見せつけるように、自覚を促すように、余計にばか騒ぎして見せた。

風の前12年 零雨 ロイセン東部 く風を読む目く

真昼でも薄暗い天気に加え、深い森がいつそう辺りを暗鬱とさせている。

のろのろとそこを歩くロンの前には、アーテスの金の髪、カシーの色鮮やかな傘、そしてイルが並んでいる。カシーとアーテスは、今日もやっぱり、何ごとか揉めている。そしてイルは、今日もやっぱり、なかば巻き込まれ気味にその騒ぎに興じている。

その背中に目をこらすと、小さい時ちょうど同じようにした記憶が蘇った。その時の、軽い落胆も。

ロンをこの森へ駆り立てた偏見は、幼いころから容赦なくあった。いつ『癩癩』を起こすか分からないという恐怖と嘲りと、その裏にある薄汚いもくろみ。呪力児たちは、将来、そう低くない割合で皇宮に勤めて帝国での地位を得る。へつらっておいた方が安全だろう。いやむしろ、多少危険でも、今取り入っておけば。もしかしたら、何かうまいおこぼれにでもありつけるかも知れないじゃないか。そうした胸の悪くなるようなささやきは、けれど呪いっ子に直接届くことはない。皆、いろんなことを考えるだけ考えて、結局、呪力児を遠巻きにする。

加えて、ロンは孤児だった。戦災孤児だ。天涯孤独の身の上は、偏見を増長させた。

孤児院にもいくらかの呪力児が混じっていたけれども、ロンと同年代の者はなかった。大きくなって彼が人目を気にするようになればなるほど、年嵩の呪力児たちは仕事を得ていなくなり、世論を知らない幼い子どもたちばかりが周囲に残る。彼らの面倒を見るのはやぶさかではなかった。ただ時々、どうしても、同志が欲しくなる。ちようどそんな年頃の時だったのだ。ロンの前に、へんてこな迷子が現れたのは。

そいつは開口一番、だいじょうぶ？ と言った。ロンはたったの

九歳だったのだけれども、年下に囲まれた環境ですっかりマセており、そんなふうには正面から氣遣われることも久しくなくて、ひどくまごついたのを覚えている。

その子どもは自分の歳も知らないような赤ん坊だった。ロンは山ほどの赤ん坊たちを相手にしてきた勘で、四つくらいと当たりを付けた。

成長した迷子は、今だにロンが決めたその年齢を使っている。

「ヨウ」

ロンは、隣を歩く男の名を呼んだ。

「お前、あいつを、どう見る？」

「はい？」

ロンが昔を反芻していたことなど思いもよらないヨウには、その質問は藪から棒だった。あいつって？ とヨウが問い返し、ロンが顎で前方を指す。

「イルは……お前の目にはどう見える」

「あれ。ロンさんてそういうの氣にする人でしたっけ」

返す言葉に詰まるロンを見て、ヨウは、ふうん、と意味ありげに鼻を鳴らす。

なんだか暗に責められているような氣がして、ロンはむっつりと押し黙る。

「確かに、珍しい線ですよ」

前を見据え、ヨウは言った。

「『輪郭』はありません。でも、隣のアーテスとも明らかに違う。

なんて言うんでしょうね。線自体が、ないのかな。はっきりとは分かりません」

「お前でもそのくらいか」

「見たことがないですからね」

ヨウはからからと笑う。

「ぼくらは、経験から見たものと傾向とを結びつけているに過ぎないんですよ。こう見えるものには、こういう特徴があるっていう、

膨大なデータが伝わっているのです、それを勉強しているだけなんです」

ロンは、重い息をつく。

眼前では、アーテスがなぜか剣を鞘ごと抜いて、イルに向かって押し付けるようにしている。声高になりやすいアーテスの言葉の端々から、言い合いの内容がおぼろに読めた。カシーが、アーテスの風変わりな剣に何か言いがかりでもつけたらしい。

いくらはやり物好きのカシーでも、あの剣のことは分かるまい。

あれはこの世にふたつとない、アーテスのための剣だからだ。

あの剣ひとふり打つために、イルがどれだけ試作を重ねたことか。やれ短いの長いの、重すぎるの脆すぎるのと、わずかも妥協しないわがまま放題な客に、イルは愚痴のひとつも言わずに、むしろ楽しそうに付き合っていた。

イルは、当時帝都にいた南方隊長の養子に入ったが、義父の南遷に伴って街で暮らし、鍛冶を手伝うようになる。ロンが仕事に就いてからは、会う機会もめっきり減っていた。そんなある時、呪術寮に住み込んでいたロンを、イルがわざわざ訪ねて来たことがあった。クルル、ミチ、シリンの三人に付き添われて現れた彼は、いつになく神妙な顔をして、どうしよう、と呟いた。

それは幼いころからハーターと呼ばれ人々の支えにされながら、その力を喪失した少年の、助けを求める声だった。

義理とは言え、大きな大きな寄りどころであった父親と離れ、イルは心細かったのに違いない。こと呪いに関する話は、新しい家族となった鍛冶場の面々では、残念ながらとうてい理解できない。その中で少年は、それまで関わった呪術師たちの誰でもなく、ロンのところへ駆けこんだ。

ロンが心密かにその存在を頼りにしていたように、イルにとってもロンはほとんど唯一の頼りだったのだ。

そんな弟分さえ、自分は見捨ててきたものと思っていた。終戦まで会うことはないはずだったのに、今イルは、アーテスとともに、

この森にいる。こそばゆくもあり、また、不思議で仕方なかった。彼らがどういういきさつで対^{ユミ}となったのかは、既に聞いたのだ。南方隊長がその両翼と共に査定に当たった話は、ヨウたちから……それは臨場感たっぷり……聞かされた。

自分の目で確かめていないことも大きい、信じられるわけもない。

「ぼくが驚いたのは」

歩きながら腕を組み、ヨウは見解を述べ続ける。

「ハーターと呼ばれるほどの人が、フリーでさえなかったことです。死んだ人間が生き返るイメージさえできる人が、どうして呪撃をイメージできないなんてことがありますか。そりゃあ不思議でしょうがなかったんです。何度か見てる内に、分かりました。イルは完全なダイレクトですよ」

「イルが？」

「『スイッチ』は確かにアーテスかも知れない。でも彼女は、『ジャッジ』に関しては意識したこともないと言う。一度解放されれば、あとはイルの制御下にある……少し変わった形態ではありますが、呪術を操ることに限っては何ものも介していないということです」

「まあ、そう言えなくもないな」

「ぼく個人としては、すごく興味ありますね。どうして『スイッチ』だけがさっぱり利かないのか。けどたぶん、それは一朝一夕には分かりませんよ。本家の目に見てもらいでもすれば、何か分かるかも知れないですけど」

ヨウが本家と呼ぶ場所は、この森よりさらに南、『中立の盾』の向こうにあると聞く。

確かに、かの地には、こちらでは失われてしまったような知識や能力がふんだんに残されていると言うが。自分たちが呪術師である限り、そう簡単には踏み込めない……。

やくたいもない物思いに耽っていたロンは、前列が止まった気配に顔を上げた。イルが立ち止まり、何もない木と木の間を見つめて

いる。

周囲の景色を確認した途端、ロンの胸は、きり、と緊張した。いつの間にやら到着していたのだ。イアラが命を失い、ロンも深手を負った場所。炎使いの狩り場へと。

「……イル」

イルが何かに憑かれたように凝視している場所がどこなのか、ロンにはすぐに分かった。背中に冷たいものを感じて身をこわばらせる。

「お前、何を見て」

皆まで言う前に、ことは起こった。まだ記憶にも新しい、禍々しい炎が、一帯を包み込んだ。

風の前12年 零雨 ロイセン東部 く炎使いのジフオイラく

「ジフオイラ」

「そ」

アーテスらが到着した、その翌日。

ロンは朝からオレインのもとを訪れ、先日の委細を報告した。ついでに、新しい四人組をどう使うかの相談もしておいたが、好きに使ったら？ とのことであった。

仕方がないので自分の寢床に戻り、仕事の説明に取りかかった。

「あっちの言葉で、炎の意味らしい。こっちで勝手に呼んでる、まあ仮称だな」

丸くなって座った四人を見回して、ロンは言った。

「名前のとおり、炎を使う術師だ。現れたのは今年の夏のはじまり。その時うちの先鋒だった四人がいつぱんにやられたんで、何事だって騒ぎになってな。調べる間にも何人か犠牲になった。典型的なセン族の男で、黒い戦闘服も他と同様。フリーのシンボリック。シンボルは右手の人差し指を立てること」

「シンボリック？」

アーテスが眉根を寄せて呟く。

「術式の発動に特定の記号を使う」ロンは胸の前で、人差し指を立てて見せる。「お前なんか特に、知つとかないと命取りだろ」

アーテスは無言でうなずいた。

「こいつにはひとつおかしい点があって」ロンは続けた。「大規模な作戦には参加していたことがない。必ず単独行動で、かと言って諜報目的で活動しているようでもない。やる時は残らず灰にしちまって、何も持ち帰ろうとしないんだ。まるで狩りにでも来るみてえに、俺たちを狙って森にやって来る。そのくせ、現れる場所は毎度似たようなところに集中している……俺たちの最終的な仕事はやつ討伐だ。だが、厳しいと判断したら即時撤退。無理な深追いは厳

禁だ。死ぬ」

テントの中が、しんと静まる。ヨウも、カシーも、イアラを直接知っている者たちは、それぞれに彼のことを追想しているのだと思われた。

森の空隙に唐突に起こった炎は、周囲の草木には一切作用せず、まっすぐに五人の命を狙ってきた。

左腕がこわばる。熱波の影に先日の残像が見える。ロンは奥歯を噛み締めた。その炎を前にすると、恐怖はなお彼の手に余った。繰り返さないためにも、今はそんなことに臆している場合ではないというのに。駄目だ。やっぱり……！ 知らない内に固く目を閉じたロンに、炎は、届かなかった。熱波は五人の脇をすり抜けるようにして、すうっと消失する。熱い風が頬をなぶり、髪を揺らす。

それは、ヨウなどが操る防御の術とはわけが違った。呪術そのものを否定していない。敵の『ジャッジ』だけを完全に凌駕し、覆っている。その呪いの気配の微細なことが、かえってその術者を明確にしていた。

「……なんだ、今の」

「ね」

自身は盾を構えもしていない、ヨウが片目を瞑った。

「あれですもん。ぼく、お役御免ですかね？」

「ロン！」前方で、アーテスが叫ぶ。「こいつかつ？」

敵の姿はまだ見えないが、はっきりと『輪郭』がある。炎のたもとには、あいつがいるのに違いない。

「間違いない。ジフォイラだ！」

「よし！」

迷いなく走りだすアーテスに、イルが鞆に収まった剣を放る。たった今して見せたことなど、自分とはなんの関係もないのだと言うように、その顔に表情はない。

ダイレクト。

それは呪術師の頂点にある者たちの成せる業。中でもイルは、世間にハーターと呼ばれる者だ。ヨウの言うとおり、それくらいできで当然であると言える。

ではなぜ、そこにアーテスの存在が不可欠なのだ？ 思えばそもその最初から……イルがコヅカ熱という鬼病を滅したその時から、アーテスは彼の傍らにあった。いったい、なぜ？

そして、さっきあいつが目を凝らしていた場所は、間違いなく。

「ロンさん！ 行きますよ！」

カシーが畳んだ傘を振る。ロンは慌てて、アーテスたちを追いかけた。

余計なことを考えている余裕はない。この戦場を何が何でも生きて抜けて、それからゆっくり、本人に聞けばいい。

聞かれても困る。

イルにだって、皆目分らないのだ。狂言だとささやく者もなくはない。そうであった方が楽だったかも知れないとさえ思うが、そうではないのだから仕方ない。

アーテスが、自分を介して闘っている。ここにいる理由など、イルにとってはその事実だけでじゅうぶんだった。

「いた！」

二度、三度と放たれる炎の源を辿って、アーテスがついに本体を発見した。黒一色の飾り気のない戦闘服。細長い影が、木々の間に立ち尽くしている。顔の半分を隠すフードの下から、尖った顎に曲がった口が見える。青白い肌の上に青紫の線がいやな笑みを描き、骨のような人差し指が、黒服の胸の前ですっと立つ。敵の背後からほむらが上がり、意思を持って蛇のようになたうつ。アーテスがそれを剣で受けると、イルの力は『ジャッジ』ではなく炎そのものを否定する。

その時、予期せぬ衝撃が起こった。

きん、と突き抜けた痛みに、思わず胸を押さえる。空気の弾け飛ぶような高い音がしたかと思うと、アーテスが後ろざまに吹き飛ばされる。炎使いもまた、某かの衝撃を受けたらしい。驚いたように手を引っ込めて飛び退いた。

「アーテス！」

追いついてきたヨウが、そちらに走り寄る。同時に現れたカシーがこちらに来る。

「イル！ どうしたの？ やられた？」

一度、首を振る。声は出ない。痛い、と勘違いしたのは最初だけだった。これはあの違和感だ。ぴったり合わさっていないだけでいいところ、ずれている。あつてはならない隙間から、何かが逃げていく……いや、何かの侵入を受けているのか。

アーテスが上半身を起こし、再び迫り来る炎を受けた。同じ反発に炎は四散したが、大地の反動を利用したアーテスは衝撃をしのぎきり、すぐさま立ち上がって敵に向かっていく。みたび、炎と打ち合うアルトレット。

感覚が妙だった。かつて感じたことのない抵抗がある。少女が力を含めれば込めるほど、ちょうど同じだけの力で打ち返される。まるで鏡に立ち向かいでもしているみたいに。

アーテスが一瞬、怪訝そうにこちらを振り返った。そこにジフォイラの影が迫る。至近で象徴をかたちどる不吉な白い指が、かすんだ目に映る。少女に覆いかぶさる炎は、しかし寸前で横っ面を張られたように大きく逸れた。実際、それはぶん殴られたのだ。遅れてその場に走り込み、一気に中央へ飛び出した、ロンによって。

「あーっ！」

殴り飛ばされてひっくり返った敵を見くだし、右の拳を握りしめて、ロンは溜まりたまったものを吐き出すように絶叫した。

「ちっきしょう、できんじゃねえかよ、ばかやろうっ」

「ロン……？」

「お前な！」今度は無防備に棒立ちしたアーテスを怒鳴りつける。

「闘ってる最中に人を気遣うな！ お前にそんな余裕あんのか！
だいたい、くそっ、怖えんだよ！ 再現もほどほどにしろ！」

「……ああ」迫力負けしたように、アーテス。「わり……」

「イル」

カシーが再度、イルの顔色をうかがった。

「問題ないよ」ようやく声を取り戻し、イルはうなずいた。「ちょっと驚いただけだ」

不服そうに目を細めるカシー。

イルだって、知ったことじゃない。何がどうなっているのかわからない。だが、ここでうずくまっているわけにはいかないではないか。

ジフォイラが、顔を押しえながら起き上がる。気をとりなおしたようにアーテスが剣を構え、ヨウも左腕の盾を掲げる。おろおろと様子をうかがうカシーに、イルは、行って、とささやいた。

「大勢でかかって悪いと思うが」

ロンが腹の底から吠える。

「今日という今日は消えてもらうぞ、てめえ！」

風の前12年 零雨 ロイセン東部 黄泉の声

「呪術師殴り飛ばすやつ初めて見た」

「お前とかイルとかに初めて見たって言われたくねえや」

「ロンさん、拳が武器ですもんねー」

「いやー、漢おんどって感じ」

「無駄口叩くな！」ロンが憤慨する。「行くぞ！」

各人各様、返事を返す。ジフォイラの指が、動いた。

青白い炎が逆巻いて、槍のひと突きのように後方のイルを狙った。そばにいたカシーにも、イルにも、やはり呪いは届かない。炎使いが小さく舌打ちし、距離を詰めようとしたところへ、ロンが加減なしの蹴りを入れる。鋭い反射神経で横っ飛びにそれを避けると、今度はアーテスの剣戟が打ちかかった。黒い影が地面に打ち付けられると同時に、その向こうの樹木にいくつもでたらめな切れ込みが入り、断ち切られた葉がひらひら舞う。

イルは眉をひそめる。

相手の『ジャッジ』には対応できるのに、自分の『ジャッジ』がおぼつかない。よっぽど集中しているのに、ほとんど『無差別』スワイプだ。「右手を狙え！」

ロンの叫ぶ声が聞こえる。

「シンボルを奪うんだ！」

カシーが傘を振りかざす。再び殴りかかったロンに向けられた炎を、ヨウが防ぐ。が、どうしたことから、空気の盾が、炎にぶちあたって大きくぶれる。盾は歪んで消失し、炎は軌道を変えてアーテスの方へ流れた。少女はとっさに剣で受けようとし、はっとしてそれを下ろす。じゅうぶんに体制を整えないまま回避したアーテスは、地面に激突した火柱の放つ熱の突風にやられた。

ロンの一撃をくらったジフォイラと、アーテスとが、同時に真反対に飛ぶ。

「何してんの！」

「すみません」カシーの金切り声に、ヨウも首を捻る。「あっちの力が強すぎるんでしょうか」

……違う。

イルは、ぴくりと耳をそばだてた。

まただ。また、声が聞こえる。

こんなにもはっきりと、ひとつのことを訴えてくる声は珍しい。

ロン。違う。

気配を追って上を見上げる。

どこまでも終わりのないような、森の天蓋が広がっている。霧なのか、雨なのか、細かい水の気の中に、一筋、ひときわ大きな水滴。それがまなじりに落ちた瞬間、黒い森が、渦を巻き始める。自分の立っている場所を中心に、何かの気配が充滿して、世界を細く長く縋りあげていく……力極まり、縋られた空間が引きちぎれると、さまざまの熱が体を包んだ。青白い閃光、食い違い反発しあう力、いつまでも耳にこびりつく、戦友の悲痛な絶叫。

イルは唐突に、それが誰かを理解した。

勝手なことをしてすまない。

お前の重荷になるようなことをしてすまない。

でも、ロン、聞いてくれ。

気付いてくれ。

あいつは、ジフォイラは……！

青ざめた唇の、ひきつった笑い。白々と骨張った指の結ぶ印。現実なのか、森に満ちた気配の見せる幻なのか、朦朧として定かでない

い光景が頭の中に広がる。だがそこにはひとつ、イル自身の目では見えようのないものが映っていた。黒装束の炎使いが、その背後に負っているもの。この森よりはるか遠く、どことも知れない場所で怪しく蠢く何者か。そこから派生し、森中を這い回り、目の前の敵に集中している力。

呪いの炎を強からしめている、異質。

「アーテス！」

イルは叫んでいた。いや、イルの唇を使って、気配が伝えたのかも知れない。

「後ろを取れ！」

四人が四人、ぱっと振り返る。

「そいつはシンボリックじゃない」確かな口調で、気配は言う。「背後を断て。それだけしてくれればいい！」

カシーがヨウをうかがい、ヨウがジフォイラに目を凝らす。追撃の足を止められたロンの下で、ジフォイラは今にも起き上がらんとしている。

アーテスは、イルを、信じた。

だっと駆け出したその時、ジフォイラはロンに向けて炎を放とうとしていた。ヨウがそれを防ぐが、盾は再び激しく身もだし、炎はあさっての方向に逸れた。

今のイルには、はっきりと見える。ヨウの防御の術が、ジフォイラの呪撃とうまく噛み合っていないことが。偽りの象徴によって狂わされた勘が、防御を不完全にしていることが。

本当の炎のたもとは、あれの背後にある。

森の果てから伸びている、気味の悪い幽鬼の手。ジフォイラは、それに操られているに過ぎない。

ヨウに続いてカシーが、傘を広げて振り回す。するとジフォイラは、上からのすごい圧力を受けたように、押しつぶされ、地面に這いつくばった。動きが封じられた間に、アーテスが走る。ジフォイラは西の言葉で悔しげに唸り、辛うじて挙げた腕で印を結ぶ。

アーテスはそれを見た。だが止まることはなかった。濡れそぼった地面を蹴り、跳ぶ。生じた炎の中に、自ら身を踊らせる。

熱風吹きすさび、ロンもヨウもカシーも、その勢いに思わず立ち竦む。炎は地から立ちのぼって天を突いた。少女の姿は一時、その閃光の中に掻き消える。

ジフォイラは一瞬の歓喜に、身動きのとれぬまま唇だけをいやらしく枉げた。が、その表情にはすぐに亀裂が走った。

呪いの火柱よりもいっそう輝く金色の少女が、炎熱の中から飛び出した。炎の尾を引いてくると宙返り、狙い澄まして敵の背後に着地する。跪いた格好の敵の背を、一刀両断する。

皆の目には、アーテスが何を切ったか分からなかったろう。イルにとっても、それは信じがたい光景だった。ジフォイラと、異質とのつながりが、断たれる。ジフォイラを捉えていた手は激怒し、めちゃくちゃにのたくり、やがて干涸びるように縮こまって森の闇へと吸い込まれていく。

途端、ジフォイラの気配が……威圧感とか存在感とか言うようなものが……急速に薄れた。

カシーの限界がきたのと同時に、ジフォイラは身を翻して遁走を試みる。ロンがそれを逃がすはずもない。敵がもはや力を失っていることが、彼にも感じ取れたのだろう。ロンは躊躇なくその顎を碎き、よろけたところへ下腹から拳をめりこませた。悪態だったのか、断末魔の呻きだったのか、ジフォイラはよく分からない声をもらした。

敵の体は、完全にくずおれる前に、細かな砂の粒になって風に散る。

……ありがとう。

イルは、そんな声を聞いた。振れた世界がまた、くると回転して元に戻っていく。ひどい目眩がした。緊張の氷解も重なり、イ

ルはその場に崩れた。長い、息をつく。

四人が、そこへ走り寄ってきた。

「なになに？ 今の。消えちゃったよ？」

「アーテス、何を切ったんです？」

「あたしが知るか。切ったのはこいつだ」

アーテスたちはイルを見下ろした。最後にやって来たロンが、三人をかき分けるようにして前に進み出て、イルのそばに膝をつく。

「お前、まさか、聞いたのか」

「何を？」

「とぼけんな！」

今にも掴みかかってきそうなロンが、イルには現実味のないものに見えた。何をそんなに怒っているのだろう。アーテスを危険に晒したことだろうか？

「死んだ人間の声は”あの”一回きり聞こえねえって……！」

そう言われて、納得する。

「最近ね。そうでもないんだ」

カシーとヨウは、意味が分からずに顔を見合わせている。アーテスだけが、いわくありげなため息をつき、森の彼方に視線を逸らした。

風の前12年 零雨 ジロン

ユリアは、水中に没したごとくふわりと広げていた両腕を、ぽとりと落とした。閉じていた瞼を開くと、赤い光を映じた青い瞳が現れる。赤は、その青に鼻白んだように、すうっと退散した。

「……やられちゃったわ」

黒い部屋の隅に座し、深く瞑想していたユーシアは、その声ではっと顔を上げた。

「なんだって」

「ばれちゃった」 楽しくて仕方ないといったふうには、ユリアは肩を揺らす。「押し負けちゃったし。まだまだね」

「押し負けた？」 ユーシアは眉を寄せる。「誰に」

「ほ・ん・も・の」

軽薄に告げられたその言葉には、思わず立ち上がった。

「いたのか？ ロイセンに？」

「私が間違えるわけないでしょう？」

「セントラを出たって言うのか。なぜ。いつの間に」

「知らないわ」

赤い呪いの陣から、ふわりと浮き上がるような足取りで出てくると、ユリアはさっさと出口へ向かう。ユーシアはひらりとそれを追う。

「すごいわね」

黒一色の闇から雑多な色彩の世界に出ると、しばらく両目がちかちかした。ユリアの声の喜色は、そんなまたたきに拍車をかけた。

「まだ押し切られちゃうのよ。『ジャッジ』も競り負けたわ。ふふ、いったいどれだけ強いのかしら」

「ちとただ事じゃないぜ。もう、ことは半分以上進んでるんだろう」「そうね」

いたずらを考える子どものように、ユリアはほっそりした指を一

本顎に当て、廊下の天井を仰いだ。

「今までのやり方じゃ、ここから先へ進むのは無理なのかもね……
ねえ、ママに相談してみましよう」

「何を」

「私もロイセンへ行くわ」

「お前が？」

「直接やれば、負けやしないわよ」

恐ろしい吹雪のような響きが突然混じる。ユリアの鮮やかな唇が、
いとも美しい弧を描く。

「傀儡越しじゃあ限度があるわよ。直接、みいんな、ぶち壊してやるわ。エンドも、『中立の盾』も、この国だって。私とセントラの邪魔をするものは、みんな消してやる」

ユーシアは、悩ましいようなため息をついた。

他の者が見れば震えあがり、取るものも取りあえずひれ伏して許しを乞うに違いない、氷の微笑。しかしユーシアにとってそれは、この世の何よりも優先する、最高の美だ。

ユリアが部屋へ引き取るのと別れ、ユーシアは、さらに廊下を進んだ。人気のなさが頂点に達する場所に、クフリラは蟄居しているのである。

そっけない扉の前で、ユーシアは声をかけた。

「母上。ユーシアです」

こちらを疑うような沈黙の後、入りなさい、といえがあつた。

ユーシアは扉を押し開け、室内に踏み込んだ。

細長い、洞穴のような部屋である。地下であるから窓はない。そこここに灯された弱々しい蠟燭灯りが、かえって中の薄暗さを演出する。

簡素な寝台と文机、それに向かう形で揺り椅子にかけている、くすんだ金髪の枯れ木めいた女。クフリラは、今朝がたユーシアが持

ち込んだ数冊の書物を読み耽っていた。まだ開いていないものを右に、読み終えたものを左に積み上げて、老いて灰色がかった青い目に分厚い片眼鏡を当て、気難しい表情で活字を追っているのである。膝掛けの上では、小さな生き物が丸まって眠っている。濃い緑色の鱗を持ち、額から一本長い角を生やしている。足の病が悪くなり、彼女がここを出ることはめっきりなくなった。あの膝の上の生物とユリアが、今の彼女にとっては世界のすべてらしかった。

「いかがでした」

指で紙をなぞりながら、クフリラは言った。

「失敗です」

淡々と、ユーシアは答える。

「ロイセン東部、トーレ地区にて七度目の接触。相手は五名。傀儡を見破られ、つながりを断たれて滅したそうです」

「断たれた？」

「はい」

クフリラはこちらを睨んだ。

「ユリアの呪術を破ったというのですか？」

「そうです」

「は。エンドの下賤の者どもにそのようなことが」

「ユリアは、本物にやられたと言っています」

それを告げると、クフリラは今まで見せたことのない勢いで椅子を回した。いきなり首根っこを掴まれた生物が、寝起きの掠れ声で抗議する。それでも拘束が緩まないと知ると、おとなしくまた体を伏せた。

「見つかったのですか」

「そのようで」

「なんてこと！」

女は狂ったような声を上げた。緑色の生き物の首を締め、床に投げ、読んでいた本のページをむしり取った。

「なんて愚かしい！ ではセントラは今、エンドに組みしていると

いうのですか!」

生き物は長い尾をひきずって、すごい早さでユーシアの足許へ逃れてきた。緑に濡れたふたつの眼球を燃え上がらせて、小さな牙の見える口を開き、さかんに威嚇の声を発する。

ユーシアは胸の中で嘆息した。

「あるいは、元々エンドの内に囲われていたのでは?」

「なんですって」

「母上はお怒りでしたが。エンドにハーターと呼ばれる者がかく生じたという話はあったではありませんか」

「あんなものは偽りです。センでない者にハーターを名乗る資格はありません」

「ですから」

肩口まで登ってきた生き物の背を指でなで、そちらに言い聞かせるように言う。

「それが、センだったのだとしたら?」

クフリラは押し黙った。ユーシアの右腕に尾を巻き付け、左肩の側から顔をのぞかせた生き物が、またひとしきり、しゃ、しゃ、と鳴く。

「ユリアは東への出征を望んでいます。直接に侵蝕しなければこれ以上は進めないと感じているようです。お許し願えますか」

ユリアの要求をひとおり口にする。彼女が言った以上は、伝えるだけ伝えなければならぬ。それが役割だからだ。だが。

渋るのだから、と、ユーシアは踏んでいた。

クフリラはユリアを手放したことがない。この地下に囲いこみ、大事に大事に育ててきた。それを戦場へ放り出し、当のセントラと直接対峙させるなど、簡単に許しはすまい。

「……なりません」

クフリラは言った。

「ユリアを危険に晒すことはありません。お前がお行きなさい」

「お言葉ですが、私はでき損ないですよ。セントラの相手が務まり

ますかどうか」

「傀儡を使いなさい。お前を加えて、数で攻めたならば負けはしないでしよう。エンドのハーターとやら、捕えてここへ引きずり出すのです」

「ユリアは、直接やったなら負けることはないと確信しているようですが？」

「なりません！」

骨と皮ばかりの手で、クフリラは力任せに机を叩いた。驚いた生き物が爪を立て、尾をきつく締めたので、ユーシアは顔をしかめた。「お前たちはセントラを舐めきっていますね。ユリアとセントラの力関係は今拮抗状態にあるのです。かつまた、たった今、あの子は負けたのでしよう！ 私の目の届かぬ場所にあの子をやることはなりません。よく言って聞かせなさい！」

ユーシアは、薄ら明るい炎の光を受けて爛々と光る女の目を、冷ややかに見下ろした。

勘づいているな。

彼女はうすうす勘づいている。ユリアが決して、自分の思ったとおりには働いていないことに。自分のあずかり知らぬところでことが進み、脚本から大きくずれることを恐れているのだ。

「仰せのままに」

慇懃無礼に礼をする。クフリラが生き物の名らしいものを呼ぶ。生き物は剥製にされたようにユーシアの肩で固まっていたが、やがて従った。それが床に足をついたのを見計らい、ユーシアはきびすを返した。部屋を出る。

ロイセン。

前線を本格的に退いて数年経ったが、その名を聞いてもなつかしくもなんともない。それよりも、ユリアの反応が気にかかった。あの辺りは特に綿密な呪道が張ってあるから、行こうと思えば一瞬でどこへでも行ける。クフリラの言うことを、いつものようにユリアは聞くだろうか。今回ばかりは、分からない。

楽しいも嬉しいも、皆共有してきたが……今日のように静かに静かに昂っている彼女は、見たことがなかった。

風の前11年 春 アヤカ西部 く親子のやり方く

「南へ？」

「ああ」

イルとアーテスは、食堂舎の卓に並んでかけて、昼食をとっている。時間がやや早いので、人はまばらである。

「まだ正式に命令受けたわけじゃねえけど」

串にささった肉に歯を立てながら、アーテスは言った。

「さつき通りすがりに、エルさんにそれとなくにおわせられたんだよな。諜報が報告してきた、南の異変があっただろ？」

「なんだっけ」

「かー！ あいつかわらずなんにも聞いてねえな！」

「だって。どうせ命令の時に説明しなおされるんじゃないか」

昨年から、国境はおおむね平和であった。

謎の炎使いジフォイラの出現と消滅を最後に、イエンゼンは急になりをひそめてしまった。護国邀撃隊は名の示すとおり、国と国民を脅かすものを迎え撃つのが仕事だ。向かってくるものがない限り、動くこともない。本来の国境より退かされてはいるものの、もとからこんな辺境に取り返すべき集落もないのだ。

「それで、その異変がどうかしたの？」

「そこまで聞いてねえけど、なんか動きあったんじゃないの？ どううにも得体が知れないんで、あたしらに行ってほしいって」

「信用されたもんだね」

笑いながらイルが言うと、アーテスは、そりゃあな、と鼻を鳴らす。彼らが諜報部の手練を何人も屠った強敵を一度の遠征で討伐したことは、第一大隊でも語りぐさだ。

「で、アーテスはどうしてそんなに不機嫌なの。ひさしぶりに仕事があつてよかったじゃないか」

「お前は、また」

口の中のものをごっくんと飲み下し、アーテスは、ずいとイルに迫った。

「本気で言ってるのか」

「なんで？」

「お前の方こそ、ここんともまともな戦闘もないから、忘れちゃったんじゃないのか」

少女の怖い顔が、ますます近寄る。

「お前、おかしいだろ」

「面と向かっておかしいって、ずいぶんだな」

「真面目な話だ」

アーテスが怒るので、イルは匙を置いて向き直った。

「なんのこと？」

「選抜戦の最後と、ジフォイラの時のことだ。お前どっか、調子悪いんじゃないの？ こっち来てから思ってたんだよ、なんかぼーっとしてること増えたら。信頼されてんのはけっこうだけだな、今回の任務、あたしは乗り気じゃない。お前になんかあったらことだ」

あまりに真剣にそんなことを言われて、イルは居心地の悪さに目を逸らした。

あの後、特に何を言われるでもなかったから、気にしていないのかと思っていた。急に、そんな顔して切り出すなんてずるい。こっちにだっていろいろ、悩みとか葛藤とか、そういうものを全部ひっくるめてもうどうでもいいやという諦観だとか、あるのだから。

「わお」

ごく狭い空間に張りつめていた空気を、陽気な声がぶった切った。ふたり一緒にそちらを見ると、見慣れた三人が食事の席を探しているところだった。

「相変わらず大胆ですことー。カシー、妬けちゃうなー」

「ぼくはかねがね感心してるんですよ。それだけ接近されて、よく平気ですよ、イルは」

「てめえは下心があるから耐えられねえんだよっ」

しきりとうなずくヨウの頭に、ロンの肘鉄が入る。身を竦めると同時に食器の乗った盆を取り落としかり、ヨウはおおわらわだ。

もともと第一大隊の所属であった四人に加え、対^{ユミ}を失ったロンもまた、アヤカの宿営所へ移った。扱^{ユミ}いとしては、イルとアーテスの三番目の対^{ユミ}となっている。しかしあの一件以来、何かと五人ひとくくりに見られることが多い。

「なんのお話？ 私たちもまーぜて」

「こいつの話だよ」

「アーテスっ」

やけっぱちに言うアーテスに、イルは鋭くささやく。しかし少女はますます険悪な空気を醸すばかりだ。

「仲間に隠し事する気か」

「そういうんじゃないくて」

「あたしは納得しねえからな。悪いが、もう直談判させてもらった」
「え？」

ふたりの前に席を取り、ロンたちは、話の一端でも理解しようとそのやりとりを聞く。

「アマルナさんに直接言つといたから」詰られるのも覚悟の上といった顔で、アーテスはとんでもないことを言う。「この際きちんと、看てもらうなりなんなりしてもらえ。じゃなきゃ、安心して仕事できねえ」

「……お前か！」

イルはイルには滅多にない大声をあげて、食べかけの食器の上につつ伏した。見物の三人どころかアーテスも、それには驚いた。

「……なんだよ」

アーテスが腕を組んだまま問うと、イルは机の上で上半身を横ざまに転がし、倦怠感たっぷりに呻く。

「午後、先生に呼び出されてて」

「へえ」

「何かと思ったら……そういうことか！ やめてくれよな、もう…

…」

「さっすが連隊の長ともなると行動がお早くていらっしゃる」アーテスはピンク色の舌を出す。「あたしの命もかった問題だ。しっかり善処して来い」

「ねえ」カシーがとうとう、身を乗り出した。「ほんとになんのお話？」

アーテスは、ふんとあっちを向いてしまう。イルはだらりと伸ばした腕に顎を乗せて、食卓の木目を見つめてため息を吐く。目に落ちなかった前髪が、ふわりと舞った。

「と、いうことだ」

暗い表情で現れた少年を、アマルナは難しい顔で迎えた。幹部棟は以前と比べればいくらか片付いているが、相変わらず雑然とした感拭えない。

その中に、南方隊長はひとりで座していた。

「はい」部屋のまん中に立ち、イルは答える。「だいたい聞きました」

「公平を期すためだ、いちおう聞いておく。アーテス嬢の申し出は真実か」

イルは斜め下を向いて口ごもった。

アーテスめ、とんでもないことをしてくれた。養父にだけは知られたくなかった。いや、別にアーテスは、アマルナが自分の父だから告げ口したのではなく、上司への義務として報告したに過ぎないのだろうが……。

「……事実です」

老人は重い息をつき、ますます眉間の皺を深くする。

「ここへ来た時、私はなんと言った？　すべてを知らしめる義務があると言わなかったか？」

「……言われました」

「隠したというわけだな」

「いえ……あの時は、まだ」

「しかもまだ隠そうとしている」

言い訳をするひまもない。アマルナが何を言わんとしているのか、いやというほど分かっている。だから彼にだけは知られたくないと思っていたのに。

「見せてみなさい」

「……」

今すぐ逃げてしまいたかった。

かつてアマルナは、少年についてのすべてのことを知る唯一の間だった。何も隠す必要のない相手がいたことは、幼い日のイルにとってとても大きなことだったに違いない。だが、十年、離れていた間に養父に対してもたくさんの秘密ができてしまった。それを暴かれて、いったい何を言われるか、どんな顔をされるかと思うといたたまれない。十六にもなって、泣きそうになる。

「そうか」

何も言わずにいると、ほどなくしてアマルナが口を開いた。椅子にもたれ、尊大とも言える態度で、彼は言った。

「どうしても見せたくないのだな」

「……ロンも加わりましたし、隊務に問題はありません。わざわざご報告するほどのことでは、ないかと」

語尾を消え入らせながら、遠慮がちにアマルナの顔を見やる。完全に目が上がる前に、しかしイルはびくりとそれを閉じることになった。

聞いたこともない怒声がとんだのである。

「甘ったれるな！」

執務机を叩き割る勢いでひっぱたき、アマルナは立ち上がった。

「よく分かった。お前が飽くまでもその態度を貫き通すというのなら、こちらもちらの職責に従うまでだ。今すぐここへ幹部連中を招集して隊則に照らしてくれようか！ 虚言隠匿、命令違反で処罰

の上、見も知らぬ者たちの前で“それ”を晒すことになるぞ！」

潜伏の場に相応しくない声量が一度途切れると、周囲の静けさがそれに続き、すさまじい剣幕をことさら浮き立たせる。

「言ったはずだぞ。何があるうと、どこへ行こうと、私はお前の親だと。だがそれは飽くまでも、互いの了解に基づいた親子のふりに過ぎん。互いがその意を体し努力をしなければ、われわれは親子たり得ない。お前は確かに了解した。だったら努力を怠るな。いつまでも、いち隊員と隊長の距離に甘んじていられると思うなよ！」

形を成さない、様々のイルの言葉。

養父の躰は厳しいので有名であったし、叱られたことなどいくらかもあった。が、こんなふうに感情的にものを言われたことはない。いわんや、このような、脅迫めいたことなど。

けれどその顔は、いつだかに見た覚えがある……その怒声の中にかすかにのぞく悲哀に気付いた時、イルは思い出した。小さなころの断片的な記憶の中に、確かに今のような養父の姿があったのだ。

ふたりが、親子になった日。

あの時、自分は何を思っ返事をしたのだろう。アマルナのただならぬ様子を察してはいたが、その覚悟を本当には理解しなかったのじゃないだろうか。

でも……ぼくを置いていなくなったのは、先生の方なのに。

ついそんなふうに考えてしまう自分が、一瞬後には許せない。イルは自己嫌悪にますます顔を暗くした。半ばなげやりに、上着の留め金を片手で弾いた。

風の前11年 春 アヤカ西部 く親子のあり方く

前をはだけて見せると、その場は長いこと停止した。

養父が何も言ってくれないので、イルは、心もとなさと肌寒さで落ち着かなかった。無言のまましおしおと服を掻きあわせると、アマルナは失っていた我を取り戻したかのように、は、と息を吸いこんだ。

アマルナが次に何を言うのか読めない時間、それはイルがもっとも不得意なものなのだ。見せたものは後には退けない。もう、恫喝でも軽蔑でもなんでもいいから何か言ってほしい。我ながら不安でいっぱいの顔をしてその顔を見ると、養父は、意外なほどの無表情だった。

「いつからだ」

淡泊すぎるその口調が、かえって恐ろしい。

「はつきりは、分かりません」イルはか細い声で答えた。「ずっと、体の成長のせいだろうと思っていたので……ひどくなったのは、去年の春ごろからです」

「そのころに、何かあったか」

あった。

あったけれども、それは、言うべきではないような気がする。

「春か」

イルが考えあぐねている間に、アマルナはやはり淡々と、続けた。

「ちょうど、アーテス嬢の言う最初の変調の時だな」

「そう、ですね」

「何があったのか説明してみなさい。お前の感じたままでもいい」

イルは、ためらった。

いくらすべてを開示すると言っても、それは南方隊長の戦略判断上必要になる情報に限られるはずだ。そう思っていたから。

「……開くんです」

眼力に気圧されるように、おずおずと所感を口にする。

「そんなところが開くなんて思ってもいなかったようなところが、突然、開く感じ……」

分かってもらえる自信がまるでなくて、語気は自然と弱くなる。

「それまでにも、同じような感じはあったんですけど……開いていると確信したのは去年が初めてでした。それから、なんだか……閉じるに閉じられなくなったと言うか」

「開いていると、どうなる」

「どう、と言われると……ちょっと気持ち悪いくらいです」

「はっきり言いなさい、イル。病気の類でない以上、お前の言い分で判断するしかないのだから」

「そんな、大したものじゃないですよ。おかしい感じがするだけで両手を振って否定したが、まるっきり信じてもらえていないのは分かった。」

アマルナは呆れたみたいに鼻で息をつく。短い間にたくさんのことを考えているらしい張りつめた沈黙の後で、彼は、いかにも言いなくなさそうに、言った。

「今ここに、とある任務がある。お前たちに割り振られることが、ほぼ決定している」

イルはうなずいた。アーツも言っていたことだ。

「はっきり言おう。私はお前を参加させたくないのだ。万全でない者が臨むには、この任は危険すぎる。もう一度言うぞ、イル、不調があるのならはっきり申告しろ。お前が言ってくれなければ、私も他の連中を説き伏せることはできない。これに限っては、お前を使わない理由がない」

「ぼく？」

アマルナはただ、そうだ、と肯定するに止めた。イルは困ってしまった。

不調とは思わない。けれど、一瞬の隙、と言われたら確かにそうなのだ。あの瞬間、自分は虚になる、集中を欠く。だがそれを理由

に今ここを退いて、その後どうすると言うのだ。原因なんて分からない。どうせ、改善しようがないのに。

「心配いりません」そうとしか言いようがない。「今までだって、なんとかあったわけですし」

「本当だな」

「はい」

「……分かった」

アマルナは深く考えている時の癖を出し、頬の裏に舌を押し当てて斜め下を睨んでいたが、ふと、口だけを動かした。

「お前、結局、故郷のことで何か思い出したことはないのか？」

「ないです、けど」

出会いのだいぶ初期のころ以来、それを尋ねられたことはなかった。驚いて答えると、アマルナは、そうか、と返した。

「いずれ、エリカには行かねばならんな」

「エリカに、ですか」

「それが」と言って、アマルナはイルの胸元を指す。「何者かの術式なのかは分らん。お前に害なすものなのかどうかも、どうも読めんが、今もって動きがあるのなら、放置するわけにもいくまい。呪海の後処理もあるからな。いつかはとっていたのが、こういう時勢ゆえ後回しになっていたのだ……知っているか？ この森の東はエリカに通じているのだぞ」

確かに、東西に線を引くように続くこの森は、やがてユーキの山岳地帯とぶつかる。その裾野の一角が、エリカと呼ばれる地域である。

「西がおとなしいようなら、軍縮もあり得ようから、復路はエルやカイロにでも押し付けて、東へ行ってみようか」

イルは目を見張った。

「先生も？」

「当然だ。お前に呪海の処理ができるのか？」

「いえ……」

「それにあそこは、独りで行くべきではない」考え深げに、養父は言う。「独りで行かせたくは、ない。と、私は思う」

イルはもじもじと視線を落とす。なんだか、背中がくすぐったいようだった。

先生は、頑に先生だった。だからイルは、親子となった後も、この男のことを先生としか呼んだことがないのだ。

それが何か、とてつもなく悪いことのような気がした。そんな声でそんなことを言われると、急に、先生と呼ぶのが憚られるように思えて。

と言ったところで、他の呼び方なんて、今さら気恥ずかしくてできないのだけれど。

「そう気にかけることもない。まだまだ先の話になるだろうからな」イルの表情を憂慮と取ったのか、アマルナは含み笑いにそう言う、身を翻して机上の書面を一枚取った。

応急に南で漉^すかれる黄ばんだ紙ではなく、都で使われていたような獣皮紙だ。ちらりとのぞいたのは、帝国の鳥の御徴。寮からの命令書や定期連絡でも、ましてや隊員の家族からの手紙でもない、皇帝直々の書簡である証だ。

「勅令ですか」

「今回のお前の仕事だよ。南の異変の詳細を報告せよとお達した。先に遣っている諜報の情報からすると、西め、このままおとなしくはしなからう」

はあ、と流すような返事をする、アマルナは一瞬、こちらを見て目を眇める。

「お前、また聞いていなかったのだな」

「どういう、仕事ですか？」

「まずは陛下のご命令どおり、起きていることの実態を調べることになるが、まあ、それだけでは済むまいな。イエンゼンがロイセン以南で動きを見せている……やつら、どうやら」

皇帝の書面を見ながら、アマルナは渋いような顔をした。

「『中立の盾』を越えたらいいのだ」

風の前11年 篠突 ロイセン南部 く不用の者く

イエンゼンの軍隊は陣を引かない。

腰を落ち着けて敵を待ち構えたり、暮らしの中で連帯したりをしない。彼らの仕事は攻め立てることだからだ。突撃し、崩し、押し退けて、東への道を切り開くことだからだ。

開かれた後のことを考える必要もない。その道を通るのは、別の人間……もつと尊い、選ばれた人間の役目だ。

道を通り抜け、辿り着いたその先で彼らがいったい何を成すのか。実際、ユーシアはそれにさっぱり興味がない。

「ユーシアさま」

誰かが背後に現れる。ユーシアは木の一本にもたれたまま、振り返らず、返事もしない。

「西側も駄目です。南側は、刻限になっても戻りません」

「あ、そ」明るくない報告にはもううんざりだった。「仕方ねえな。明日を待って、東へ進軍。それまでは、各自好きにやってろ」

「了解」

片手で虫を払うようにそいつを追い払う。ひとりになると、袖の下から小さな箱を取り出す。雨の国は湿気を防ぐことにかけては進歩していたが、なにぶん手入れを怠ったから、中の干し薬草は多少湿気っていた。まあ、なんとか吸えそうだから、それはいい。

細く巻かれてある先に火をつけてすぐに消すと、すっと一筋、葉の色と同じ青い煙が上がる。炎を失しても、薬草は燠火を宿して燠り、煙が途絶えることはない。

他の者はひどいにおいだと言うが、ユーシアは好んでこの薬草を吸った。火をつけたのと反対の端を口にはさみ、ひと息深く吸いこむと、ほんの少し、気分が良くなる。すべてがどうでもいいような、軽やかな心持ちになるのである。

クフリラの命を受け、ユーシアは南へ至った。ユリアは来なかった。明らかに様子がおかしかったのは間違いない。彼女は出立するユーシアを見送りに来たのだ。

うまく会えるといいわね。

そう言うて。

「いいにおいがすると思ったら」

背後から先ほどとは別な声がすると、ユーシアは今度は振り返った。見知った男がひとり、飄々と立っている。

「一本わけてくださいな」

「五百オン」

「生々しい金額をおっしゃる」

くつくつ笑うと、差し出した巻き薬草を取る。セン族は総じて長身と言われるが、彼はわけでも背が高い。東の人間にはさすがに及ばないが、肩や腰にもそれなりに幅がある。禿髪、帯剣の変わり者である。

「熱心だな」ユーシアは眉間に皺を寄せた。「自由行動になった途端にこれだ」

「いいじゃありませんか。お付き合いくださいよ」

呪術師のくせに、古風なマッチで火を起こす。この煙を、この世で一番うまそうに吸うのはこいつだろうな、とユーシアは思った。

「降りませんね、まったく」

木々の頂に目を向ける。

「本国は篠突く季節だと言うのに」

「相当下ったからな」

「センの恩恵はジロンを巡る、ですか……テイルフィユはもう南の気候域なのですね。こう降らないとエンドの領内のように不気味ですよ。だが、同時に興味深くもあります。いつそこのまま山越えして、ザフィアの謎を解き明かしませんか」

「いいな、それ」

「おやおや」

男はこちらに目を落とし、あからさまに肩をすくめる。

「なんだ。誘っておいて、乗ったら逃げるか」

「いやはや。母上の御子どのは、センチラを探す気など皆目ないと見える。世も末です」

「まだるっこいな。俺がいつセンチラに興味を持ったよ」

「そうですね。興味は常にあったように思います。ただ、対面するのは心底いやがっていらっしやる」

ユーシアは不機嫌を露に、口の中の葉を噛み締めた。

「お前のそういうところ、昔から嫌いだ」

「ご容赦くださいな。仕事の内みたいなんです」

煙も苦いが、葉の味はもっと苦い。舌の触れたところから痺れるようだったが、ユーシアは耐えた。この痺れが頭の中に広がってしまえば、酔うことができるのを知っているからだ。

昔には、彼にも、好きな人間の好きなものはみんな好きでいられた時期があった。そんな自分を思い出すと、片腹が痛いのと同時にどうしようもなく焦れたい。

ユリアが夢を語るように語るから、ユーシアも、センチラをまるで世界の宝物みたいに思っていた。だがユリアが母の描いた筋書きに従い、ことを進めて行くのを傍らで見守っていると、気付かざるを得なかった。センチラは確かに宝かも知れない……ユリアだけの彼女にとってだけ、唯一意味のある宝なのかも知れない、と。

その時、会ったこともないその存在を、憎んだ。

お前もまた、会ったこともないくせに。そんなに遠くから、どうしてユリアを奪い取った。生まれた時から側にいる、この俺の許可もなく！

「……俺は、ばかだったよ」

「はい？」

憎しみの熱に慣れると、冴えた頭の中でいつの間にか理解していた。

ずっと側にいたのに、最も重要なことを見落としていたのは、自分なのだ。

セントラは別に、途中で割り込んできたわけじゃない。最初からそこにいた。自分たちはふたりではなく、生まれたその瞬間から、三人であつたのだ。

自分ひとり、それを知らなかったただけだ。

「なあ。お前も、セントラを手に入れたいとは、思うの」

「それは当然でしょう」

「センの誇りにかけて？」

「そんなものは私にはございません。ご存知でしょう？　ユリアさまの欲するものは私の欲するもの。ユリアさまの敵は私の敵です」

「それだけか」

「それだけです」

大昔の自分みたいなことを、さらりと言って憚らない。

自分が、今はそうではないかと言われたら、それはもう答えようがなかったが。

「でも」

男はにやりとし、遠慮もなくユーシアの瞳を覗きこむ。

「ユーシアさまのことも、同じくらい、気になってしまふのですから。興味がないならともかく、あなたがセントラを消したいと言い始めたりなさると、私は少々困ったことになるのです」

「何が困る。最終的に我々が従うべきは、母上ひとりだ」

おもしろがるようにじろじろとこちらを見下ろしてから、男は、そうですね、とわざとらしく同意した。

「変わらないものは受け入れてみることですよ、ユーシアさま。そうすると、ふわっと、楽になることもあるのです。信じられないほどにね」

ユーシアはありつたけの險を込めて、その目をねめつける。

言われなくても、受け入れている。だからこうして、命令に従っているのじゃないか。

そう思っても、なぜだか言葉にできなかった。なんと言い返されるか如実に想像してしまったからだろうか。

「これ、どうもありがとうございます」

男は突然そう言っ、葉草の燃えさを半分ほどくわえこみ、ぱり、とかじり取った。そのまま、むしゃむしゃと喰う。

この男のその特異な嗜好を見ると、いつも思い知る。

こいつもまた、ユリアだけのものなのだ、と。

赤ん坊のころからずっとユリアと自分の側にいる、世話役、兼、目付役。彼には素性がない。身分も地位も、名前もない。母が呼ぶから、自分たちも、なんの疑問もなく呼んでいた……不用の者、ユオと。

ユオもまた、別に自分の側にいたのではないのだ。彼はいつもユリアのためにいた。その隣に、自分が勝手にくっついていただけだ。一本を燃やし尽くしても、ユーシアはちっとも酔えなかった。ひとりになった木の許で、彼は腹立たしげに袖の下をまさぐった。

風の前11年 篠突 ロイセン南部 山中思案

ユリアが初めてセントラのことを語ったのは、ふたりがそろって五つだったころ。霧雨から細き雨へと移ろう、長い寒さも底を脱しつつある季節であった。

「ママがね、それはせんとらにちがいないって」

幼い時のユリアは、人並みに笑ったものだ。

「えらいって。よく見つけたわねって、ほめてくれたの！」

「せんとらって、なに？」

「知らないわ」

ユーシアが尋ねると、ユリアはにっこりそう答えた。

「じゃあ、何がそんなにうれしいんだよ」

「だってママがほめてくれるんだもの」

「ふうん……なあ、ユリアは、そいつと話すのが楽しいの？」

「話ができないのよ。でも、話すこともないもの。ただね、ママの言うとおりにしてみたら、ちゃんとかかるようになったのよ。これからもっともつとがんばれば、もっともつと分かるようになるって、ママが言うの。だから、がんばるの」

今思えば当然のことだが、母の……クフリラの態度が明確に分かれるようになったのは、あのころからだ。クフリラの興味はユリアひとりに絞られた。

ユリアもまた、ユオやユーシアを顧みなくなった。何かも分らないまま、セントラと呼ばれる存在だけを彼女は追い続けている。

最初は母に誉めてもらいたい一心だったかも知れない。

しかし、今はそうではない。

物思いに耽っていたユーシアを、誰かの声が引き戻した。先頭集団で方向を読んでいた者が、地図と現在地を照らし合わせた報告を寄越したのだ。

昨日彼らが行き詰まったのは、テイルフイユ連峰の中腹である。

ティルフィユはイエンゼンの実質的な南端だ。ロイセン地方南部の大森林を裾野に従え、東西に連なる山々はさながら大陸の屋根のようだと評される。

部下の話を統合し、脳内の世界地図に当てはめる。信じられないことに、ユーシアは今、山中北側を東へ抜け、エンド帝国領土に踏み込もうとしているらしい。この先はやがて下り、東の人間がアヤカと呼ぶ森に通じているはずだ。それも、主戦場からわずかに南に外れた、誰もいない場所に。

『中立の盾』になんらかの変化が起きたことが、これで確かになった。

ティルフィユは広大な山地であるが、ひとつひとつの山は決して険しくはないと伝わっている。しかしこの山越えに成功したものは近年、まったく無い。彼らが今頼りにしている地図ひとつ取っても、実に百年前に描かれたものだ。ロイセンから南へ行くことはもはやないものとされており、山間部とその南についてなおざりにでも記してある地図を探すのは、存外骨折りだった。クフリラの蔵書の中でも、特に門外不出とされている秘書たちに混じって、取るに足らない伝承の類を綴った書籍の中に、それは見つかった。地図と言うよりは、ほとんど挿絵の様相であったが。

イエンゼンがこの連峰から退かざるを得なかった、たったひとつの理由。それが、『中立の盾』の存在である。

発見したのは、セントラを追って東へ向かおうとした百年前の呪術師たち。イエンゼンは何も、最初からエンドといざこざを起こそうとしていたわけではない。当時無法地帯とも不毛地帯とも言われていたザフィアを通して、東の地へ抜けようと試みた。

ティルフィユの山は、彼らを通さなかった。

その証言は多岐にわたった。いわく、間違いなく南へ向かっていたはずなのに、いつの間にか折り返してロイセンの平原に戻ってしまった。またいわく、三日間歩きどおしてもいっこうに山岳地帯を抜けず、諦めて北上してみれば半日で森へ帰り着いた。さらには、

かの山では同道していたはずの者がひとりずつ消えていくのだと言った者もある。ひとり生きて帰還した証言者の仲間たちは、確かに行方を断っている。

南の森に生じたこの不可解な現象を、世界は『中立の盾』と呼ぶようになる。世紀の始まりから今に至るまで戦いの止まぬ森の北を、国家間の諍いから距離を置き続けていた南のザフィアが、某かの術によって遠ざけたとする説が、その名の由来であった。東の情報はほとんど入ってこないが、どうやらエンド側でも同様のことが起こっているらしいとは知れている。

その、百年に及んだ中立の実力行使が、崩れたのだ。

いったいいつの間に通行許可が下りたのか。ユーシアの思考はその一点に集中している。

この百年……ことにエンドと慢性的な戦闘状態に陥ってからの三十年あまり、ティルフィユにはろくな注意が払われていない。今回この道が見つかったのも、まったくの偶然だ。森に慣れない新参者の一隊が、山に踏み込んで迷い、うっかりその頂を越え誤ったのだ。てっきり『中立の盾』のまやかしに囚われたと思い込み、絶望的に山林を彷徨っていたところ、急に景色が開け、巨大な湖が目に入った。それがザフィアの雄水レイシェンだと思い至った時、彼らは、なんとしても生還してこの事実を伝えねばならないという使命感に燃えたらしい。忠義なことである。

そんなことがなければ、誰もこの山のことなど気になけなかった。翻せば、もうずっと前から、盾は消えていたのかも知れないとも考えられる。

東以上に、南の情報は入らない。皆無と言っている。だから『中立の盾』が出現した原因がそもそも単なる仮説だ。そして、腹の底では誰もそんなものを信じてはいない。

盾を敷いたのはセントラそのものである、というのが真の通説だ。ユーシアはごく素直な少年だったので、最初は教科書の建前を鵜呑みにした。彼に最初に疑いを植えつけたのは、ユリアだ。

「おかしいわよ、こんなの」

歴史の勉強が百年前にまで進んだ時だ。教本に『中立の盾』が登場し、前後を一読したユリアはなんら躊躇なくそう言い切った。

その時は地下の一室で勉強していたらしく、記憶の中には人工の灯りばかりの閉塞感がある。季節も、時間帯もはつきりしない。

「ザファイアっていうのは、四の世紀には戦いをやめてしまったんでしょ」

とつくに百年前を通り過ぎて近代史に入っていたユーシアと、そばでまったく関係ない本を読んでいたユオは、同時に目を上げ、いかにも納得いかない様子のユリアの訴えを聞いた。

「三千年も無関係でいたくせに、なんでいきなり私たちをとおせんぼしたりするの？」

「ザファイアとその他の地域を完全に隔離するためと言われていますね」

「だからどうして？」

教科書どおりのユオの回答に、すかさず問い返す。

「我が国の思想はとかく周辺の理解を得ません」ユオは少しも動じない。「中立者が敵に回ることもありましょう」

「……ねえ、ユーシアは不思議じゃないの？」

ユオがあんまり落ち着き払って常識ばかりを述べるので、ユリアはふくれ面でユーシアに理解を求めた。

しかしユーシアには、彼女が何に納得できずにいるのか、さっぱり分からなかった。

「盗って逃げたんだから、追いかけられないように道を塞ぐのは、普通だと思うけど」

「あん、違う！」

ユリアはますます憤り、そっぽを向いてしまった。

今思えば、我ながらなんて風采の上がない返答だろうと、ユーシアはちよっと恥ずかしくもなる。しかし、教えられたことに即座に反論するなんて芸当は、まっすぐな子どもだった彼には難しすぎ

た。

セントラは力だ。エンドがわざわざイエンゼンからセントラを“奪った”ということもさることながら、戦闘行為を唾棄しているはずのザファイアが、エンドのその行為に加担したなんて話が、いかに不自然か。少し成長すればどんな国民にだって理解できる。国がその建前を崩さないから、誰も何も言わないだけだ。

あの境界線を引いたのが、ザファイアであるはずはない。エンドでさえない。セントラそのものに決まっているのではないか。

そして境界線の消失が示すものは、セントラの有事だ。

ユリアがロイセンに本物を見出したこともある。

『中立の盾』は、セントラは、とっくの昔に失われていたのではないのか？ エンドにハーターが誕生したと言われた、十年前に。

そこまで思惟して、ユーシアは胸中でふっと笑った。

自分の考えどおりだったとしたら、と思うと、おかしかった。イエンゼンが追っている方向も、エンドの迎え撃つ方法も、まったく見当違いだ。互いを知らずに争っているから、こんな滑稽なことになる。

ああ、誰か。誰にも自覚のない今の内に、誤ってセントラを消してしまってくれないか。そうすれば、ユリアは目を覚ましてくれるだろうに。クフリラが激怒しようと、国が傾こうと、ユリアが無事ならなんだったいいのに……。

ユーシアははっとして、意味もなく周囲を見回した。一面、森だ。薄暗い中にも陽光の気配があり、空には確かに雲の切れ間があることをうかがわせる。回想ばかりしていたせいか、空気が古びた本の一ページのような色をしていた。

少し離れた場所を歩いている、ユオが一瞬こちらを見た気がする。今自分は、セントラを消してしまいたいと考えたのか。ユリアの唯一絶対の望みを。彼女を裏切って？

「……受け入れている」

声に出して、唱える。

「俺は受け入れているとも」

雨の少ない場所は、温かくなりやすい。ユーシアは軽く汗ばんだ
てのひらを衣服の腿のあたりで乱暴に拭った。俄然、足を速める。

風の前11年 篠突 ロイセン南部 くその真上く

きんと静まり返った山中、樹上。その空気にまったくそぐわない大勢の人間の気配が移動して、ある一線を越えた瞬間、ふたりは詰めていた息を同時に解放した。

「……どう思う」

気配の背中を見やっただけ、アーテスが問う。

「どうも、こうも」

同じ方向の、けれど少々ずれた一点を凝視して、イルはそれだけ答えた。

「こりゃ陛下や隊長の懸念は一発当たりってとこだな」

尋ねておいて、アーテスは勝手に早々と結論を述べた。イルもそれとは同意見であったので、特に何も言い返さず首だけで相づちを打つ。

たった今ふたりの眼下を通り過ぎていった集団は、紛うかたなきイエンゼンの呪術師たちだった。

彼らの統一された服飾品は、同じく統一された骨格と相まって一見で敵味方の判別を可能にしている。それが彼らにとって利となるか不利と働くかの見解は、往々にして後者に偏るところだ。服装の統一は精神の統一。それによって個々の働きが若干能率を上げることを加味しても、見分けがつけやすいのはイエンゼンも同じであることを考慮しても……種々雑多な色の散在する森という場所において、黒一色とはあまりに自己主張が強すぎる。『輪郭』によって検知されてしまうことへの開き直りとも取れるが、少なくとも今回、その開き直りはエンドの肩を持つ形となった。

戦線の呪術師たちは、周囲の気配を呪いの気か『輪郭』から探ることに慣れきっている。だから呪術師の特徴をひとつも持たないふたりに対して、黒づくめの一行はかなり一方的にその存在を露見させる恰好になった。結果、特に意識して気配を消すこともなく、一

部始終を無事に観察することができたのだ。

もし見つければ、一卷の終わり。

『輪郭』を持たないまま呪術を操る者の存在を、敵に知られるのは得策ではない。対峙したら飽くまで一般人を装って逃げ果せるか、ひとりの目撃者も残さぬように手を打つかしかない。そして、あれだけの人数を相手にしては、どちらも絶対に不可能だ。

「あんな昼行灯集団、まくのは簡単じゃねえか。そんなにびびることもなかったな」

が、現物を目の当たりにしたアーテスはひらりとその見解を翻していた。

「……不可抗力の油断だよ」

人はいつだって通念の範囲内でものごとを考えるものだ。そこから発生し得る、自分にとってよろしくない事象に対して注意することとを、警戒と言う。

発生元からして常識から逸脱している場合、それは警戒の対象にならないだろう。だからこそその人選でもあるはずだ。

「油断は油断だ。言い訳にもなんねえな」

皇宮の剣士は自分にも他人にも厳しかった。

「だから、その油断をしておいてもらうためには、ぼくらはできる限り長く直接接触することのないように……」

「こそこそ隠れてろってのか。それじゃ結局いねえも同然じゃねえか」

「……あんまり無茶なこと考えないでよね、頼むから」

イルはそれ以上の教諭を諦めて、簡潔に懇願した。受理されたのかどうかは不明だった。

「じゃ、ま、任務完了ってことで。帰りますか」

「おう」

ふたりの第一大隊への帰属は半年で再び中断し、オレイン率いる諜報部隊へ戻り、すぐさま南へ発った。

異動はロンたち三人も一緒だったのだが、彼らは今は宿営所に残

っている。ふたりはふたりだけで宿営所から南下して、山間に入り、わずかに西へ折れた。空が見えない状態で方向を知るのも板についてきたが、自分たちが果たして目的の場所に着いたのかどうか、ふたりは確信を持てずにいた。目的地そのものが、最初からはっきりしていなかったからだ。

目的地はイエンゼンの南の国境。正確には、わずかに南へ越境した場所。その他の条件はない。

だから、国境さえ越えてしまえばどこであろうと到着とも言えず、どこまで行っても到着とは言えないのもあった。要は任務が遂行できるかどうか。遂行できれば、そこがすなわち正しい目的地となる。そういう曖昧な任務に翻弄されて、結局のところ、ふたりは山中すっかり道を見失い……あてもなく彷徨っていたのだ。

放浪四日目、疲労で扁平になった視界の奥に、真っ黒い集団が現れた。それは任務遂行の機会が訪れたことを示していた。

……奇跡と言っても過言ではないかも知れない。

イルは安堵と呆れと倦怠のごちゃまぜになった息をつき、すると木から下りはじめた。

『輪郭』がないのは確かとは言え、その特性を戦略の一部として敵に行使したことはなかったので、盤石を期するべくかなり高いところまで上っていた。南の森の木々は西の人々に似て細く長い。当然、上に行けば行くほどその頼りなさは顕著だ。

「わっ」

イルに続いてアーテスが荒っぽく下降を開始した途端、梢が大きく左右に揺れ、肉の薄い葉がはらりと舞い落ちた。突然のことにイルが思わず声を上げるのとほぼ同時、たちまち近隣のどこかからけたたましい羽ばたきの音が聞こえだす。危険を察知して飛び出した数羽の猛禽が、ふたりの姿を確認するやいなや破竹の勢いで向かってきた。

「ちょっと、待って、ここはまずいって！」

今度の懇願は、明らかに却下された。まるで騙されたことの不覚

をぶつけるように、鳥たちは嘴を叩き付け、かぎ爪を立て、さかんに鳴いて威嚇する。

イルひとりを狙って。

「あ……悪い」

平穩無事なアーテスが、少し高いところからぼそりと謝る。

「謝んなくていいから、助けてよっ」

イルは体を縮こまらせながらも、驚異的な技術でもって木肌を滑り降り……途中で力尽きて落下した。

「どうもなー。きらりと光る何かは確かに見えるんだが。詰めが甘いつつーか基本がなってねえつつーか」

年下の幼なじみに対し、木登りおよび悪戯全般で言えることを反芻してから、アーテスは迅速に後を追う。幼なじみは、落下してもなお止まぬ激しい追撃の餌食になっていた。アルトレットを鞘ごと抜き放ち、叩き落とすつもりで鳥どもを払う。実力行使に負け、不服そうな声を上げ続けながらも敵は飛び去った。

「心の底から同情しながら結論を言う。この森にお前の居場所はない」

「……悲しくなるから同情までにしといてくれる」

差し出された手を取って、イルは力なく立ち上がった。服についた木の葉と羽毛をはたき、敵襲と落下による被害を確かめる。敵襲の方の被害はところどころ痛々しい様相を呈していたが、本人の感覚としてはどれもそこまで酷いことはなかった。

ふたりが木の上で、気配を断つ必要もないのに息を詰めていた理由はふたつある。ひとつはもちろん、目の前で起きていることへの驚嘆や万が一見つかった場合を想像しての恐怖が織りなす、緊張。

いまひとつは、その”万が一”を起こさないための、必然の努力だ。

イルには、乗馬の才は皆無だった。

それは正しいが、すべてを表していない。

イルは、馬……と言うよりも、すべての動物たちから完膚なきまでに拒絶されるという、希有の才能を持っていた。アヤカやロイセ

ンなどの主戦場からは、長い呪術戦のためにとくに動物たちの姿は消えている。しかし国境を越えた場所はそうはいかない。むしろ、姿を消した動物たちがここへ集合でもしたのではないだろうか。野生の生命は呪いの届かないこの地で確実に繋がれていた。

イルにとって、それは脅威だった。ひっそり潜んで敵を監視する状況下ではなおさらだ。今しがたのような騒ぎを敵の頭上で起こされでもしたら、一瞬で見つかって終わりである。

「お前はきつと、幼児期に野生動物の長の子どもか何かを知らない内に踏み殺したんだな。それで末代まで崇られたのに違いない。でなきやあんまり不自然だ」

「なんだよ、それ……」

イルの幼児期は、なべてアーテスの知るところだ。そんな陳腐な故事じみた事実は、どこにもない。

だいたい、街にだって馬もノラネコも鳥の群れもいくらでもいたが、こんなことはなかったのだ。

「いいんだ。もう帰るんだから。つま弾き者はさっさと退散するよ」
哀愁たっぷりに森に向かって呟く十六歳の少年の囁きは、いっそ酸鼻の極みであった。だが、理由を知るでもない少女から言えることはもう何も残っていなかったし、実際早く帰隊して今見たものを報告しなければならぬ。アーテスはただ、ほら行くぞ、とだけ告げた。

ふたりの任務は、壁の消失の確認。

『中立の盾』と呼ばれる絶対防壁をイエンゼンの者たちが踏み越えているという事実の確認だ。

確認は成された。次は当然、対策だ。上層部がどんな決定を下すかは分からないが、固定化されきった戦場が流動する以上、戦局は確実に動く。

イルがうそ寒い別れを告げたばかりのこの森には、残念ながら、割と早急に引き返すことになるのではないか……アーテスはそんなことを思っただけだったが、口には出さなかった。悲哀を道化でこま

かしたりなどしながらも、恐らくはイルだつてとつくにその可能性を考えているだろうと思つたからだ。

彼女は少年の間の抜けたところもいやと言うほど知っている反面、あなどれない洞察力には密かに脱帽しているのだ。その能力は、特に他人の気持ち推察する際に最大限に発揮される。幼い時から変わるこのない、時に異常とも取れる共感能力がそれだ。

だから、人の評価は概ね良好なんだがな。帰り路の第一歩を踏み出しつつ、アーテスは心の中で何度目かの疑問を転がした。乗馬の必要に迫られて初めて発見したイルの特異な性質は、彼女だけでなく人として少年と付き合いのある多くの者にとって、まったくの謎だった。

風の前11年 篠突 ロイセン東部 小さな嫉妬

「あ。おっかえりー」

オレイン率いる諜報部隊、その宿営地点。

ふたりっきりの長い遠征を終え、無言のままテントの入り口をたくし上げると、腹這いになって向こうを向いていたカシーが振り返りざまに呑気な声でそう言った。イルは、数日分の疲労を吐息に変えて消し去った。

中には、あぐらのロンと正座のヨウの姿も見える。彼らは何かを囲んで円を成しているらしかったが、三人なので三角形にしかなくていい。

「おかえりなさい。ご無事で何よりです」

ヨウが極めて正しい迎えの言葉を投げかける。視線がアーテスの方に偏っていることには、ロンだけが気付いた。

「思ったより早かったな」言及はせずに、ロンもふたりに声をかける。「確認は取れたのか？」

「うん」

イルはしきりと隣を気にしながら、なんとか笑顔でうなずいた。

「ものの見事に取りれたんで、すぐ報告書を送信したいんだけど……誰か、やってくれない、かなー」

用件を伝え終わるころには、その笑顔はしぼんでいた。アーテスの怒気が明確な空気となって左半身に刺さったせいだ。

「あのアマ……」

「隊長に向かってアマはないと思うよ……」

「黙れ！」

怒気はとうとう明確な言葉と暴力になった。下段の蹴りを左足に喰らい、イルはちよつと肩をすくめつつ距離を開けた。

「なになに、どーしたのアーテス」

「お前らはあれが隊長であることに異論はねえのか！」

無理な体勢のまま背後に投げかけたカシーの疑問は、全力で打ち返されて彼女の額にぶち当たる。

諜報部隊長オレインに関しては、賛否両論が行き交っている。改めて異論はないかと問いただされると、微妙、のひと言に尽き、それを言葉にするわけにもいかないために答えに詰まる部分はあったが……今の彼女のように激怒する要素はないように思われた。真正直にそう吟味した後で、カシーはふるふると首を振った。

「いったい、どしたの」

アーテスは拳を握りしめ、隊長の鎮座している方に向かって吐き捨てた。

「あたしたちは他のやつらのようにはいかねえって、分かりきってることじゃねえか！　なのに、なんだ！　ご苦労さま。じゃ、ちょちよいとそれ送っというて、だど？　おちよくるのもたいがいにしやがれ！」

「要するにできないことをさりと指摘されたことに対する怒りが心頭に発しちゃっただけなのでお気になさらないでください皆さん」

「冷静に説明すんな！」

「いっ！……たいんだってばその力の込め具合は！」

イルは、足使用時のアーテスの射程距離を頭の中で修正した。

「別にアーテスたちをばかにして言ったんじゃないと思いますが」

その様子に複雑な苦笑をこぼしつつ、ヨウが立ち上がる。

「じゃあ、不肖このぼくが、ちょちよいと送信させていただきましよう」

「あ、ありがとう」

「けっ」

イルが黄色い紙の封筒を手渡すのを、面白くなさそうにアーテスが睨む。

「連隊長のところでもよろしいんですね？」

「うん、そう」

送信先を確認すると、ヨウは封筒をてのひらの上に乗せ、じっと

その存在に集中した。

ものであれ人であれ、その輸送に使用する技術の根幹は変わらない。呪道と呼ばれる瞬間転移の理論である。しばしば一般向けにされる説明を借りれば、出発地点で対象物の存在を否定し、到着地点で対象物の非存在を否定する。これに対してしばしば見られる一般人の反応は、理解不能の苦笑い。アーテスはもちろん、実際その術式を使用した経験のないイルにとってもまた、それは理解不能だった。

ただ、存在の否定というのがそのまま呪撃としても用いられる恐ろしい術式なのは、知識として知っている。敵と呪術を交わすのではなく、敵の存在そのものを消し去ってしまうという戦術だ。術式練りは難しく、とんでもない精神力を必要とするので、綿密な準備と大勢の信頼に足る術者が必要となり、実戦に組み込まれることはほとんどない。

そしてその制約は、そのまま呪道にも当てはまる。消すのみならず再度具現化しなければならぬから、むしろ難易度は上昇する。

戦況や人員に余裕のあった時は、輸送を専門に行う一団が常時待機していたが、最近解体を余儀なくされ、それに伴い呪道による人の輸送は実質機能停止に陥った。今は、こうした些細なものの輸送が個人の力量の範囲内で行われるのみである。

暫時の集中の後、ヨウが目を閉じて開くと……封書はふっと霧散した。

「オッケーです」うつすら疲労を滲ませながら、ヨウはアーテスに向かって言った。「本部の書簡の確認は朝夕やってたはずですから、今日の夕方には受取手があの手紙の“非存在を否定”してくれるでしょう」

「ありがとう、ヨウ」

アーテスが頑として謝礼を述べないので、イルはふたり分の感謝を込めてそう返す。少女本人の口からそれを聞けなかったヨウに、気持ちが伝わったのかどうかは考えないことにした。

「で……本当だったんだな」

軽さを装った声で、ロンが言う。

イルたちの任務は、確認できれば即終了となるが、確認できなかった場合の終了の目処は立たない。西の軍勢を発見できれば「情報は正しかった」と言い切れるが、発見できなかったからと言って「情報は偽りだった」と断定できるものでもないからだ。予定を繰り上げての帰還は、見切りをつけられたことを表す。結果は前者ということだ。

イルが小さくうなずくを見ると、ロンは何も言わずに視線を落とした。

そこに絶対的な壁があるかないか……それは攻める方にとっても守る方にとっても重要事項である。これまでまったく注意してこなかった方向から攻め込まれるという展開がいよいよ現実味を帯びると、若者たちはそろって、黙りこくることしかできなかった。

「と言ってもぼくらは、言われたとおりに動くだけですけどね」

ため息まじりにヨウが呟く。

「アマルナさんも大変ですね。十年かかってやっとここまで国境回復したのに。次から次へと大変な問題が」

「そーだよー」顔を前向きに戻したカシーが間延びした同意を示す。「イル、たったひとりの身内なんだから、ちょっと元気づけてさしあげなさいよね。親ってのはねえ、なんだかんだ子どもに喝！ ってされた時が一番力出るんだから」

その提案はイルには予想外だった。入り口に突っ立って左隣を警戒したままだった少年は、背中を向けた先輩にきよとした眼差しを向ける。

何事かをしきりと考えているその様子には、位置関係上、カシーだけが気付かなかった。彼女は話は終わったとばかり、大仰な動作で眼前の何かに手を伸ばす。

「えいっ。強行突破！」

ちやうどその瞬間、イルは何かを言おうとした……正面だった口

ンとヨウはそう思ったが、イル自身が大人しく口を噤んだので、カシーの場面展開に乗ることにした。

「そういう手使うから後々駒が足らなくなるんですよ、カシーは」
「だな。負ける気がしねえ」

「あー、ロンさんまでそういうことをー」

実のところイルは、口を噤んだと言うよりもカシーたちがとり囲んでいるものに目を奪われたのだった。三人がそちらに話題を戻したことで、アーテスも尖った空気を和らげる。

「なんだ。懐かしいもんやってんな」

「あ、おふたりもやります？」

アーテスの食いつきにヨウが嬉々として場所を開ける。

「それ……」

イルはそこには座ろうとせず、カシーの真後ろから中央を覗きこんだ。

一枚の木の板。目の回るような白と黒の渦巻き模様。人や馬、小さな城や立ち木などを象った駒。

「見たこと、ある」

「え？」

再び目を上げたカシーの声に、ヨウの驚愕の視線が合わさる。イルはびっくりしてそれらを順番に見つめ返した。

「何？」

「見たことあるって、あんた」 呆れ顔で、カシー。「むしろ大得意なんじゃないの？」

「なんで？」

その見解にはイルの方が驚愕だった。

それは昔養父の部屋にあったものと同じゲームのボードだ、ということはイルにも分かった。だが養父がそれに興じているのを直接見たことはなかったし、街の酒飲みたちは頭を使うボードゲームよりも賭け事に夢中、職人たちに至っては遊ぶということをあまりしない。

イルにとってそれは、何かは詳しく知らないけれども、久しぶりに見た懐かしいものに過ぎなかった。

「驚いた。あのアマルナさんの子がボードゲーム初心者って？」

「実際一緒だったのは一年ちょっとだからな」

何に驚かれているのかも分からずにたじたじとなった少年に、ロンが助け舟を出す。

「それも割とどたばたした一年だった。一緒に遊ぶ暇はなかったろ」

「はー、そうなんですか。不遇の子ども時代ってやつですね」

「お前は南方隊長をなんだと思ってんだ」

苦笑しながら、ロンはイルに視線を傾けた。

「お前のお父さんはな、こっちじゃ戦略の鬼で有名なんだ。そのせいでか、逆に訓練のためなんだか知らねえけど……何かつうと部下にこのゲームで勝負をふっかける。誰ひとり勝てるやつはいない」「てつきり英才教育済みだと思ってましたよ」

「ねー。うちらにまであの鬼指導だもんねー」

ひとしきりうなずきあうと、カシーも体を転がしてヨウとの間に場所を開け、ほれほれ、と手を振ってふたりを招く。

「お姉さんがやさしく教えてあげるから、いらっしやいいいらっしやい。これがね、一度覚えるとはまるんだから」

「いかがわしすぎです」

「なーに言ってるの、イルはみんなのアイドルなんだから。抜け駆けなんて恐ろしくてできませ……あらら、イルー？」

軽口を叩いている間に、イルはふいとテントを出て行ってしまった。アーテスにさえ後を追わせないほどの不機嫌な顔で。

「……ガキ」

アーテスはただ、その背中に呟いた。

「今度はイルが。どーしちゃったの、これ」

「便所だろ」

幼なじみの姉御肌は、十六の少年の心の機微を隠した。手法は乱雑であったが。

「で、なんでここへ来てそんなもの引っ張りだしたんだ？」

「そりゃ、迫り来るボスとの戦いに備えて」

用意された場所にどかりと腰を据えアーテスが尋ねると、カシーが寝そべったまま肩を窄めて答えた。

「迫り来る？」

「『中立の盾』消失、戦線の緊急移動、それに従って守備の要が移動……」

片手の指を折りながら、思考の変遷を説明する。

「確認地点から最も近い宿営地点はここ、となると要の移動先も恐らくここ、もしくはこちらでも多少東にずれてのランデブー……どっちにしろ、こちらは近い内に臨戦態勢のアマルナさんと第一大隊との合流を余儀なくされるってわけじゃん！ 専守防衛の第三ラインじゃ自主的に距離を開けることもできたけど、一緒に作戦行動となるとそうはいかないし。ここしばらくふっかけられないよーに慎重に慎重に動いてた分、実戦経験に著しいブランクが」

「アマルナさんがこっちに移る？」

アーテスの関心はカシーの懸案事項よりもそちらに置かれた。

「それは間違いないでしょうね」

恐怖に身もだえるカシーに代わり、翼の欠けた鳥の駒をいじくりながらヨウが言う。

「きつとそのための準備は、ぼくらが第三ラインを発ったすぐ後にも始められていたでしょう。先ほどぼくが送らせていただいた報告書を受けたら、おっとりがたなで来てくれるでしょうね」

「マジか……」

南へ来てちょうど一年。大規模な作戦に従事した経験は、アーテスとイルには今だない。

ティルフィユの森で見たイエンゼンの一団を、自分たちが相手することになる。そう思うと、今さらながら寒気がして、そのくせ高揚もしているような奇妙な感覚が少女を襲う。

アーテスは無言のまま、黒馬の駒を渦の一番外側に配した。

風の前11年 篠突 ロイセン東部 く霧中行き交い

他人の気持ちを汲むのは、とてもやりやすい。

誰かが喜んでいたり、悲しんでいたり、腹を立てていたり恐怖に駆られていたり……そうした起伏ある変化はもちろんのこと、落ち着いている、寛いでいる、あるいは空っぽの状態であるなど、平らかな感情も同様だ。それらは臆げながら確かな存在感を持っている。自分で特に意識することは何もない。あちらの方から進んで、簡にして要を得た説明をしてくれる。

一方、自分の気持ちというやつには、そうした親切心はまったくない。そこにあるのはよく分かる。けれども、やたらと遠くて、のらくらとして、とても掴みにくいのだ。

そうしたわけで、イルは、戸惑う。今のように思いがけない波が立つと。

敢えて分けるのならば、快ではなく不快。陽ではなく陰。けれど、いったい何に対して？ 先ほどの一連のやりとりの、どこに自分は反応したのだろうか？ 考えても、分かったことは少ない。ただなんとなく、あの場にいたくないと感じた。養父ちちを語る親友ともが、何か別の誰かのように見えた気がした。

その日、雨は深い霧に変わった。桐灰色のもやは動くものを見つけると嬉々としてまといつき、首筋や袖口に不快な湿気を生む。幾重もの極薄の布をかきわけるようにして進むと、周囲の木々もテントも瞬く間に沈み込んでしまった。

命令もなく、貴重な雨の止み間でもない普通の日に、出歩いている者はない。

ひとりきり。

その感覚は前兆だ。

どこ行くの？

最初の声が耳に届くと、その後はなし崩し。

もう行っちゃうの？

……ぼくがまだここにいるのに？

ねえ聞いて！

この人ね、聞こえてるんだよ。

聞こえてるのに聞こえないふりするの！

「だいじょぶ？」

我知らずしゃがみこんでいたイルの前に、高めの男声が起きた。頭を上げると、ひよろりと長い胴の上に、山の動物みたいな……何も分からないふりで、どこか人を小馬鹿にしたような……奇妙な顔が見える。

「……えっと」

両手を外套のポケットにつっこんだ男の、だらしない印象を与える佇まいは、以前一度だけ目にすることがあった。

「確か、医療班の」

「あら。覚えてたんだ」

異様に嬉しそうに言うと、立ち上がれないイルに代わるように正面に膝を折る。

「どうしたの道の真ん中で。体調不良なら診るよ」

「いえ、別に」

「そお？」

そうは見えないという語調で、こくんと首を折る。

現実の人が話しかけてくると、現実に体を持たない者たちの声は、嘘のように影を潜める。自分で脱しようのない状況から救ってくれたことについて、イルは心の中で感謝した。言っても伝わらないので、言葉にはしない。

そのまま、立ち上がる気力が湧くのを待ってじっと黙っていると、

男はにっこりと言葉をついだ。

「あたしも覚えてるよお、あんたのこと」

会話が長引きそうな気配を受け、イルは少し困る。名前が、どうしても思い出せないのだ。

「イルオールでしょ。連隊長の息子さん」

しかも、相手にはこちらの名前をしっかり記憶されていた。困惑の声で、はい、と答えると、男はさらに思いがけない行動に出た。

右腕を伸ばして、俯きがちなイルの頭をぼんぼん叩いたのである。「挨拶に来た時もあったんだ」そうしながら、いかにも優しい声を出した。「顔色悪い子どもだなんてね。十五だったっけ？ いかんねえ、そんなことじゃ。何か悪いところがあるなら、お兄さんに言ってごらんよ」

「……はあ」

びっくりしてそれしか言えなかった。ロンやタズやバンスや、それこそ養父にだって、そんなふうにされたことはなかった。が、その行為が親愛の表現であることは、不思議と分かる。なぜこの男が自分に親愛の情を持っているのかは、さっぱり分からないのだが。

「警戒心丸出しね」

別段不快そうにもせず、男はからから笑った。

「まあいいや。とりあえず、こんなところで座つてるとびしょびしょになるから、止めた方がいいよ。霧だと思って舐めてるとね。風邪っぴきにされるんだから」

「はあ……」

「あっはっは」

何がおかしかったのか、最後に声をあげて笑うと、謎の医療班員は潔く立ち上がって去った。ぼわぼわとした煙の塊が、その背中を見る間に覆い隠していく。

イルはそれを見送った瞳をぱちくりさせつつ、彼に最初に会った時のことを思い起こした。エンドで言う、夏と秋の間。イエンゼンこぼれあめでは零雨の季節と言うのだと、教えてくれたのはヨウだったか……

諜報部の精鋭たちに多くの犠牲を出したジフォイラの討伐に、イルたちが初めてここを訪れた時。隊長であるオレインをはじめとした幹部連中に次いで引き会わされたのが、医療班の面々だった。彼らの居場所に向かう道々、以前諜報部所属であったヨウが言っていた。この医療班員は、もちろん皆ある程度のレベルではあるが、格差が激しいのだと。はずれに当たると不要な痛みを強いられたり、異常に傷が残ったりと不利益を被るから気をつけた方がいい。しかも、当たりの方も問題ありで、だから諜報部員たちは必死に無傷で帰るための訓練をするのだと専らの言い草なのだ。

ヨウは声を落とし、何故かアーテスよりもイルに向けて、忠告するようにこう言った。

サザンさんはですね、腕前は確かですが、その、変な人で……妙なこと言われても、相手にしないのが一番ですよ。

「……サザン、だ」

思い出したことが爽快で、思わず声に出してしまった。

そう言えば、と、芋づる式に思い出す。後から、ロンからもそうした批評を聞いた。最初の会合の時には、多数対多数だったからか、特に気になることは言われなかったのだが……今のが、そうだったのだろうか。

妙なこと、と言うより、魂胆の見えないこと、といった風だったけれども。

「何してんだ」

いい加減立たなくては、と思った瞬間に、背後から新しい声をかけられた。出端をくじかれた体で起立を思いとどまったイルは、肩越しに後ろを見上げる。別にわざわざ見なくとも誰か分かる、聞き慣れた声であった。

「心配かけんだろ」

アーテスが、いつもの踏ん張るみたいな立ち方で、呆れたように見下ろしていた。

「いつまで経ってもガキなんだからな。変なとこばっか」

「……どういう意味？」

「やきもち焼きの甘ったれって意味」

「やきもち？」

差し出された手に促され、よろよろと立ち上がりながら、イルはおうむ返しに問い返した。心外だからではなく、説明を求める意味で。

「こっち来るって。近い内に」

「……誰が」

唐突な報告に、今度は単純に尋ねる。

「南方隊長」

唐突すぎるその事実には、何も言い返せない。

「嬉しくねえの？」

無言という反応を咎めるかのように、少女は言った。イルはなお、その青い瞳を見返した。他人の気持ちを汲むのは、とてもやりやすい。支離滅裂な発言を繋ぐ、彼女の真意。それが、次第に伝わってくる。

「アーテスこそ」イルは霧に濡れた目を眇めた。「どっちかって言う嬉しくないみたいだけど」

気持ちは汲めても、そこへ至る道のりまでは分からない。アーテスが今、負の感情を抱いているというのは感じる。感じ取ったら、そこから先は推測だ。

抱いた感情を発散したくて、外へ飛び出したのだろう。恐らく自分を追って。何か言いたいことが、聞いて欲しいことが、できたから。

「何か問題があるの？ 先生が来ると」

彼女が抱えた負の感情は、はつきりと、妬みの形をしていた。妬みの存在に対して、むしろくしゃもしていた。それもなんだか、妬まれているのが自分なように思えて、イルはさっきまでとは別の困惑に陥れられていた。

アーテスはこちらの問いにたじろいだように、しばらく口をとん

がらせて答えなかった。沈黙の中、霧がしんしん染みてきて段々と肌寒さが募り、着ているものもずっしりとしてくる。風邪っぽいにされるんだから。サザンの言葉が意味もなく過る。

「お前さ」

ようやく吐き出された言葉は、質問の答えをイルへの苦言にすり替えたものだった。それは、直接答えたくない時の彼女の常套手段である。

「もうちょっと、自覚した方がいいぞ」

「何を？」

「愛されてんだなーってこと」

「え？」

が、この時は内容が意外すぎた。

「なに、いきなり」

「あたしさ」やっと話すことにふっきれたのか、アーテスは口を早める。「聞いてたんだよな。実は」

「な、何を？」

「お前がお父さんに人生史上最高にこっぴどくしかられてるところ」何を言われているのか理解するための、間。

「……なんで!？」

その後、イルは全力で叫んでいた。

アマルナが感情まで交えて怒りを露にした、あの時。苦いような甘いような記憶。

確かに人払いをしたわけではなかったし、外まで聞こえるだろう大声を出された。けれど、幹部棟は他のテントとは距離がある。幹部たちか呼び出しをくらった者以外は近づく用のない場所だから、意思を持って寄って行かなければ中の会話を聞くのは難しいはずなのだ。

どうしてわざわざ盗み聞きに来たのか……それを問いただしたイルに対して、アーテスの返答は、
「うらやましかった」

またしても支離滅裂だった。

「……もうちょっと順を追って話してくれないかな」

「だから」

まっとうな要望なのに若干苛立たしげにされる。相当何かを溜め込んでいるようだ。

「聞いてたんだよ。全部はつきり聞こえたわけじゃねえけど。それで……なんかお前たちみたいなの、すっげえうらやましくて……親からあんなふうに言ってもらえるのって……ねえんだぞ？　なのにお前ときたら、あれしきで嫉妬しやがって……自覚しろよ！　もったいねえんだよ。見てていらすんだよ……」

相当の決意をして話し始めたのに、いざ言葉にしてみると途端に、自分の主張が取るに足らないことのような気がしてくる……アーテスの言葉はそんな失速を見せる。

「正直、南方隊長、公私混同だと思ったよ。思ったけど、だからこそっつーか。それだけ大事なんだって、見せ付けられた気になって……」

もやに霞んだ地面を睨み、両手を忙しく組んだり揉んだりし、アーテスは次第にしどろもどろになった。そのまま、言葉が途切れる。

出てくるだけ言葉を並べさせると、イルはそれらを頭から反芻してみる。

全体を通しての印象は、どうやら自分は叱られているらしいということと、その原因が彼女の心の地雷に触れたことであるらしいということ。アーテスの心の地雷とは、長年付き合っている者ならおよそ把握している割と身近な存在だ。彼女が絶対に許せないと公言している三つのものである。親子関係への言及に鑑みて、今回イルが踏んだのであろう地雷はすぐにひとつに絞られた。

絞られたが、どうもすっと落ちない。

直接の原因に心当たりがないからだ。

「ぼく、何に嫉妬したの？」

「ばか！」

一喝であった。

「お前変！ 絶対変！ 普通気付けよ。あからさまにロンたちに嫉妬してたじゃねえか！」

「へ……？」

「ほんっと変なやつ！」

言うだけ言うと、アーテスは大きな歩幅をあてつけて、イルを通り越した向こうに逃げてしまった。深い霧が、呼び止めるいとまも与えない。

「ロンに……？」

イルはぼかんと、少女の消えた方を眺めるしかなかった。

アーテスが絶対に許せないもの。ひとつは意味のない詮議。もうひとつは、情のない関係。本人がこういう言い方をするから最初は広い意味に捉えられがちだが、アーテスという背景を知れば、それが家族……さらに狭義には、親子……の関係についての話だというのは、理解に難くない。

彼女は、父親をあまりよく思っていない。

帝都でも指折りの大貴族の娘であるアーテスは、生まれる前から結婚相手を決められていた。相手は現皇帝ニレイの孫。アーテスが八つになり、自分の運命を強烈に意識しだした当時、まだ生まれてさえいなかった。

家のために頑に結婚を曲げない父親と、それに反発する娘。アーテスの父娘関係は、ずっとその一辺倒。

そして、彼女の父親への不信感が決定的になったのが……今からおよそ十年前。アーテスに、妹が生まれた時だ。

アーテスが十年近くも煩わされていた役目は、その一瞬に、妹に降ろされてしまった。折しも皇太子妃の懐妊が国中を湧かせていた中、生まれたばかりの末娘は、跳ね返りも強くもう十になろうとしていたアーテスよりも、ずっと役目に相応しいとされたのだ。かねていやがっていた皇室との結婚を免れたのは、僥倖だったかも知れ

ない。しかし、アーテスはそれ以来、父親にまったく顧みられなくなってしまった。

剣を振り回し、軍属となってこのような最前線に出ても、何も言われないほどに。

そうした環境で形成された人格が、親子、という関係に対する少々異常な固執を生んでいる。赤の他人であれ、心ない親子関係を思わせる光景を、彼女は極端に嫌う。また、親子の健全な繋がりが軽く扱われる光景も、同じくらいに嫌う。

イルは今、その嫌悪の対象を演じてしまったらしい。

「……ああ」

ようやく、ぼんやりと納得感を得た。

自分は、自分の知らない父の姿を、他人ひとから聞かされなくなかったのだ。それをアーテスは嫉妬と呼んだ。イルが、父親との繋がりを軽んじたと取ったのだ。

「そっか……」

同時に、思いがけないものを自覚する。

養父に対して今だ隠し事をしていることに、後ろめたい気持ちを持つている自分を。

まだいたの？

ひとりになると、霧のようにまとわりついてくる声たち。

どうしているの？

聞いてもくれないのに？

それとも聞いてくれる？

ぼくのお願ひ、聞いてくれる？

イルは何も答えない。答えれば、ばれてしまう。居場所がばれて、辺り中から声が集まってくる。そうなたらもう、対抗しようがな

い。

振り払うように肩を返し、サザンともアーテスとも別の方向へ足を踏み出す。こっち来るって。アーテスの言葉を胸の内で繰り返す。父が来る。ここへ来る。そうしたら……。

ねえ、聞いてよ！

高揚と焦燥の入り交じった思いを持て余し、イルは逃げるように走りだした。

風の前11年 零雨 ロイセン東部

エンド、イエンゼン、そしてザフィア地方が同居するこの大陸には、いずれの文化にも根付いた共通の神がいる。呼称はそれぞれ異なるものの、反目さえある異文化間には考え難いことに、姿形と位置付けはまったく同じだ。金色に輝く大きな鳥の姿をし、あらゆる時代と場所とを渡る翼を持ち、この世の始まりから終わりまでのすべての事どもを見届ける神。

エンドではヒオウと呼ばれ、帝国旗にも描かれている。

ヒオウは、神とは言っても信仰対象であるハーターとは意味合いが違う。災いを逃れ罪悪から救われたいと思うのも人なら、好悪の隔てなく他者の目に認められたいと願うのもまた人である。すべてを見守っていてくれる時の鳳は、崇拜されることはなくても人々の心の内に常にあり、複雑な願望の一端を叶えている。

白黒それぞれにひとつずつしかない鳥の形をした駒が、その神を象っているのだということを、イルはその夜初めて知った。

「これは時間を遡るゲームなのだ。この渦の入り口が今この時。中央が時代の始源。現在から、手持ちの駒を使って時の始まりにヒオウ神を配す。そうした者が時代を統べる……すなわち勝者だ」

イルの正面には、養父^{ちち}がいる。

ふたりの他には、誰もいない。

移動用のテントは、アマルナの平素の宿所とは比べ物にならないほど狭いが、他の隊員たちの寝床に比べればそれなりの広さがあり、きちんと簡易の執務机も設置されている。その上から、相変わらず手入れを怠っているらしいぐちゃぐちゃの蝋燭がうら寂しく照らす中、椅子ではなく地べたに、遊戯盤を挟んであぐらに座る父……それが、呪術のことでも仕事のこともなく、遊びのことを語る。その度、イルは意味もなく、同じく床についた尻を幾度となくもぞもぞさせていた。

カシーの予想に違わず、アマルナは第一大隊を連れて西へ移った。諜報部も宿営場所をわずかに南東へ移し、合流。その後も少しずつ南へ移動を繰り返した。部隊は今、現在の国境のぎりぎりイエンゼン側、かつて一度も戦場となったことがないほど南へ下ったところにいる。

そしてまたカシーの予想に違わず……アマルナは、隊員をつかまえてしばしばゲームに興じていた。今夜とうとう、五人して捕まったわけである。先ほどまでロンやアーテス、カシーもヨウもいたのだが、ゲームがアマルナの無敗で十回も終わったころ、夜も更けたのを言い訳に三五となった。普段なら周囲の流れに従って一緒に出て行きそうところ、イルは何も言わずここに居座った。何か言いかけたカシーとヨウを、ロンとアーテスが押し出すようにして、四人もまた結局何も言わず、イルを残して行った。

第十一回戦は、いとも静かに始まった。

イルにとっては、初めてのボードゲームが。

「誰も教えてくれなかったのか？」

始めの二、三手を指示しながら、アマルナは苦笑混じりに問うた。

「……教わりませんでした」

敢えて能動態の答えを述べながら、イルは指差された場所に自分の黒い鳥の駒を置く。戦っている相手に言われるまま手を進める、不可思議なゲームがしばらく続いた。イルには、今自分が優勢なのか劣勢なのか、そもこのゲームにそうした中盤の優劣があるのかどうかさえ分からないまま。

渦を半分まで回ると、次第とアマルナはイルに次の手を委ねるようになった。指示の言葉がなくなると、代わりのように雑談が生じる。普段の生活についてや、帝国軍として国境にいる心境……直近のことを尋ねられるまま答えている間に、なんの拍子にかイルは、呪撃師アマルナに対する世間の評価を口にしていた。なんの道具も動きもなく、周囲三エールの範囲に影響を及ぼすダイレクトの使い手……最初に聞いたのは、アーテスからだったろうか。

「三エールはちと難しいな」

その伝聞に対し、ちょっと珍しいほどの大笑いが返ってきた。

「みんなに言われましたけど」

「第一大隊の皆か？」部下たちの隊長評を初めて耳にしたようで、笑い飛ばす声の中に意外そうな響きがある。「そんなわけがあるまいよ。考えてもみろ。私がひとりですんな広範囲をカバーできるのなら、こんな大部隊はいらんじゃないか」

そんなまともなことを言われては、何も言い返せない。イルは、入隊初日に直接対峙した時の他に、呪術師としての養父の姿を見たことはないのだ。少し口を曲げただけで答えずに、そっと木の形の駒を進める。

「そうするとこうなるが？」

まったく考えた様子もなく、アマルナはさっと次の手を指してくる。さすがに一手先までは考慮して指したイルだったが、それは予想した手のどれとも違っていて、そのくせルール上問題なく、よく考えてみれば最も効率的な一手だった。ここへきて、その一手によって自分が不利になったことも理解できた。

「やりなおすか？」

「……いえ」

初心者に与えられた機会を、しかしイルは静かに突っぱねた。自分の膝に肘をつき、手に顎を乗せてボードの渦を見つめる。黒い鳥の行く手を、白い要塞が堅固に塞いでいる。白い鳥ははるかに時の始まりに近い場所において、黒の人がそれを追っているが、追いつく見込みは段々なくなってきた。それでも、待ったをかけたくはなかった。

養父は面白そうに、そうか、と言ったきりで、考え込む息子をじっと見守った。宵の細かい雨がふと強まり、水滴がテントを叩く音がまばらに聞こえだす。

かなり長いこと、イルは遊戯盤を睨んでいた。この際だからと、頭の中で一度最後までゲームを進めてみさえたが、どうもまだは

つきり想像がつかず、ともあれどう足掻いても勝てそうにはないことだけが分かった。初めてであるために、ひよっとしたら自分には思いつかない逆転の方法があるのかも知れない、と思うし、またひよっとしたら、父にはもう自分に勝ち目がまったくないことが分かっているのかも知れない、とも思った。この思案の時間が無駄なのかそうでないのか、思案自体がいつの間にかそんな内容にすり替わる。

「……それで」

焦れたようではなく、ぽつりと声をかけられ、イルは自分がいつの間にか爪の先を噛んでいたのに気付く。幼いころの癖を出したのは久しぶりなような気がした。相当深く考えこんでしまったようだ。

「なんの用だ？」

「え？」

唐突な問いかけに目を上げて怪訝を示す。アマルナは、手元にある駒の五、六個をかき回すようにしながら、老いた目許を緩めて微笑していた。

「遊びたかったわけじゃないだろう？ お前、私とふたりになるのをそれとなく避けていた節があったからな。わざわざ仲間と連れ立って退室する時宜を棒に振ってまで、ここに残れば……何か用があるからだと思うだろう」

「避けてなんか……」

「そうか？ それならそれでいいが」

どこかこちらを食ったような物言いに、また嘘をついた自分を咎められたような気になる。イルはまた爪を噛み、自分の肌の味を感じて慌てて指を離す。

会いたくなかったわけではない。けれど、確かに、一緒になるのを避けていた自覚はある。言うべきことをどう伝えたらいいのか、自分の中で整理がついていなかったために。

今夜を選んだのはしかし、その整理がついたからというわけではなかった。このままいつまでも言葉選びにかまけていたら、時期を

逸するのではないかという危機感を抱き始めたからだ。父の方からこの場所に……連隊長の宿所に呼び出してくれた今宵、この好機を使わなければ、自分はいつまで経ってもせつせと整理を続けて終わるように思えたからだ。

「……聞いてほしいことが、あるんです」

何日もかけて選り抜いた言葉のひとつひとつを、この場でさらに篩ふるいにかけるような慎重さで、イルは言った。

養父はちよつと眉毛を上げて、先を促す。この男がこうした表情をする時、先を読めずにとりあえず主導権を委ねているらしいことが、最近分かってきた。

「ぼく」そんな鷹揚な態度の前では、いつだってイルは五歳の子どものままのようだ。「声が聞こえるって、言ってたでしょう。小さいころ……」

「ああ。言っていた」

「それが」

イルの声は、つと詰まる。

しかし、すぐに毅然と顎を上げた。養父は、秘密を秘密のままにしようとした自分を叱った。晒した秘密に対しては寛容だった。受け入れて、未来を語ってくれた。その記憶が、少年の口を開かせる。「ここへ来てから、ひどくなって」

「ここへ？」

「この、森へ」

それは、昨年の夏、もう丸一年以上も前を意味していた。アマルナもそれを理解してか、瞬時顔をしかめる。

「……ひどくなった、とは？」

「街にいた時は、言葉が聞こえることは滅多にありませんでした」サナで暮らしていた十年、少年に訴えかける姿なき者たちの声ははっきりと言葉を持ったのは、二回きりだ。幼くして亡くなったルシカという名前の子どもの声。それから、疫病に命を奪われたアーテスの母の声。

いずれも、イルの呪術師としての転換点となった。言葉が聞こえるという事象はイルにとって、それほど大きなことであり、負担でもある。

「それがこの森では、ちょっと油断してひとりになったりすると、もう」

声たちは最初、自分勝手にかなりたてているに過ぎなかった。怨嗟も無念も苦痛も、聞いていて気持ちのいいものではないけれども、それだけだった。が、イルはすぐに、彼らがおかしなことを言っているのに気付く。その言葉には過去や未来がない。ある一点で停止している。直に流れこむ感情の波のような、こちらを内側からめちやくちやにする力はないけれども、不気味なほど冷静に、理路整然と自己の運命を呪っているのである。

それが不思議で、心のどこかで危険だと察しながらも、イルは彼らに語りかけた。彼らは一斉に振り向いた。聞こえてるのか。聞こえてるんだな。恐ろしい剣幕で詰め寄った後、口々に主張を始めた。自分たちが辿った悲惨な結末の数々を。

その内容から、これはこの森で死んでいった呪術師たちの声なのだ、結論するのは簡単だった。

「ウォルター」

頭のまん中に刻み付けられたみたいに、二度と忘れられないに違いない単語たち……そのほんの一部を、イルは口にした。

「セロ。リーベ。シャン。ナンナ。エン。トツテナ……ティオ、クイル」

アマルナが、徐々に余裕の表情をなくす。彼にとっても忘れられない単語であるはずだった。かつて南方隊に属し、死別した部下たちの名は。

「……彼らの声が？」

「ジフォイラの件では、イアラに助けられました」
うなずきつつ、答える。

「お前は、死者の声を聞いていたというのか」

「昔は違ったはずです……リサの言う限りは」

街でイルを取り巻いていた声は、街に生きる人々のものだった。ルシカの断末魔の絶叫も、絶命した瞬間に途絶えた。マーテス公爵夫人は死者であつたかも知れないが、イル自身が起こした奇跡によつて、その判断は難しくなっている。イルが死者の声を聞いたとしたら、その微妙な一度だけだ。

「こっちに來てからは多分、死んだ人たちの声しか聞いていない気がします。でも……ティルフイユへ、行つたでしょう。そこには、声は……なかった」

語る内に、ひとり悶々としていた時よりずっと速やかに、頭の中が整理されていくのを感じた。不思議なもので、そうするとまったく別の懸案事項も解決に向かうものである。イルはやにわに黒の門を取り、盤上に置いた。

アマルナは驚いた顔で、その手つきを眺めていた。その表情が話の内容に対してか、イルの指した手に向けてなのかは、イルには知る由もない。

「他の者には聞こえない声を聞く、という例は、昔からいくらか報告されている」

真意を隠すように口元を片手で揉み込み、アマルナは言い出した。「帝都にいたころ、調べていたことがあつてな」片手間に自身の手を進める。「お前とまったく同じ例は見つからなかったが……中には死者の声と思しきものを聞いたというのも、確かにあつた」

父が自分に起きたことについて、過去の文献を洗っていた。イルはそのことに奇妙な感慨を覚える。

「しかしどれもこれも、あまりにも条件が違いすぎた。似たような事例というのはな、それらを集めて分析して、法則を見出して結論づけられるものなのだ。声を聞く者たちに共通して言われていたことは、ひとつもお前に当てはまらなかった」

「なんだつたんですか？ それ」

「……十年も前に読んだものだ。詳しくは覚えていない」

突然、どこか不機嫌そうな声音。

「それで、何か悪影響はないのか」

かと思うと一転、子を氣遣う親の声。

「悪影響……？」

イルは、指しかかった駒をゆるゆると握り込む。

「昔のように、痛んだりはしないのか」

「それは」言われてみれば。「ないです」

明らかに、子どものころから変化している。それが良いことなのか悪いことなのかは不明だった。

しかし、悪影響を尋ねられて、言ってみようかと考える自身の心境の変化は、良いことなのに違いないとイルは思う。父ならば、良いことと捉えてくれると思う。だから、以前ならば確実に胸に秘めておいたであろう言葉を、イルは自分でも驚くほど軽々と舌に乗せた。

「ただ……怖いです」

声たちに脅かされるのは、気持ちだけだった。危害を加えられることはあり得ないし、不調を来すような無惨な訴えはない。けれど、死を通り越した者の価値観が、時々、寒気がするほど恐ろしい。

「彼らは、自分たちが捨て置かれた存在だと感じて……ぼくが、聞こえてるってことに、異常に執着する……生きていたころとつながる、唯一の手段だと思ってるみたい。でも、ぼくに何ができませんか？ 数えきれないあの声に、ひとつひとつ答えてはいられない。どう答えていいのかだって分からない……」

また、言葉に囲まれている状況が恐ろしい。かつて言葉を聞いた時、他人の激しい感情に晒されたイルは、その力を暴走させたことがある。ここにいるのは呪術師ばかりとは言え、不安は拭えない。なんとなく、それは言わなくても分かってももらえているように思えた。

「……そうだな」

父は、すべてに対してそう言ってくれたと思った。

眼前で、一翼の白い鳥に目を止めたまま、沈黙を共有している父。二十と五つの大隊からなる南方担当連隊のすべてに責任を負う傍ら、得体の知れない何かに怯える自分の話に時間を割いてくれる父。

イルは、温かい衝動に駆られて思わず口を開く。温かみは自覚した瞬間に熱に変わり、熱すぎるそれに炙られて頬が火照った。

今度の言葉は、出なかった。

翌朝、アーテスとロンがアマルナの宿所を訪れると、先客がいた。本来そこを寢床にしているはずのカイロとエルが、外側からそつと中を覗きこんでいたのだ。足音で振り返った老人ふたりは、くすぐったいような口をして、目で静かにと訴える。ロンはそれで事情を察しほっと息をついたが、アーテスは先客の後ろから無理やり顔を出して中を改めた。途端、起き抜けのむっとり顔をむずむずさせる。その状況は国防上由々しき事態ではあったが、敵国とはち会うには今少し間がある。四人は誰からともなく、その場を辞した。

涼しい早朝の気配も、そのテントの前だけは遠慮がちに通り抜ける。

遊戯盤を間にし、夥しい数の紙片に囲まれて、ひと組の親子は床の上でだらしなく寝こけている。父親の弛緩した手の中に含まれたペンは、詰めの戦略を図解しようとして途中で止まったままである。

風の前11年 零雨 ジロン

わずかに開いた糸のように細い隙間から零れんばかりの光差す、未知への扉。

ユリアにとって、赤い陣の中心はそんな存在だ。

その光はあまりにも温かく、希望に満ちていて、一片の曇りもない美しさを持っていた。その扉を全開し、向こう側へ行ってみたいと思わせるには、その光の魅力はじゅうぶんすぎた。ユリアには、自覚がある。自分が本来大事にすべきものをないがしろにし、この光の虜になっているという自覚が。それでもなお、光の魔力から逃れることはできなかった。

光を目にすることもできない母が、その存在を知っただけで囚われたのと同様に。

「近い内に接触するわ」

暗がりでも本ばかり読んでいる母が、ユリアの話にだけは耳を傾ける。

「ずいぶん前に一回、ニアミスしてたみたいだけど。ユーシアには気付けなかったみたいね」

「あれも所詮はでき損ないです」

膝掛けの上の緑色の生き物に皺深い手を乗せたクフリラは、忌々しそうに吐き捨てた。

「そう思うならなんで私に行かせてくれないのよ」

ユリアは母の寝台に腰掛けて、乾いた笑いを混ぜて言う。

「私ならあの距離で見逃したりしないわ。『輪郭』の類じゃないの。ここがね」ぎゅっと、胸を押さえる。「あったかい感じ。ママにも分らないでしょうけど」

「ユーシアはそれに気付きますか」

「さあ。目を見れば分かるかも」

「目？」

「そう。目」

ユリアだって見たことなどない。それは、ユーシアが“ニアミス”したその時に、ユリアの中の彼と繋がる部分を感じ取った、直感に近いものだった。その感覚は、黒い部屋にいる時に似ていた。陣の中央に立ち、探し求め、見出す瞬間に似ていた。

母がセントラと呼ぶものと、自分とが繋がる部分から伝わる、心地いい何か。それが今までで一番近くに……少し背伸びをすれば届きそうなほど近くに、確かにあったのだ。ユーシアがいつこうに気付かないことが、もどかしくて仕方なかった。

「直接会わせる他ないわけですか」

「そうねえ……」

抽象的な物言いでは話をはぐらかすユリアに、クフリラはあからさまな不快を示していたが、ユリアはそれを歯牙にもかけない。

「いいですかユリア」

夢見るような目で天井の暗がりを見つめ、はっきり答えない娘を、クフリラは熱のない声で叱った。

「これは国事なのです。お前の個人的な欲求を満たすための行為ではありません。よく覚えておきなさい」

幼いころなら、クフリラのその声を聞けば、ユリアは素直にはいと返事してにっこり笑ったことだろう。しかし今は違う。幼少から持ち合わせていた反射神経が、堂々と母にも向けられる。

「違うでしょ？ ママ」

浮かべる表情にも悪意のようなものが見える。

「王サマはこんなことお望みじゃない。これは国事じゃなくて、ママの個人的な欲求を満たすための行為。違う？」

クフリラは、緑色の背中から机上の本に目を移す。背中越しにでも、ユリアはそれを見逃さない。

「そして私はママの娘。ユーシアもユオも、みんなママの子ども。大きくなるほどママに似てくるのは、当然だと思わない？」

「……何が言いたいのです」

「みんなその内、動き出すってこと。好き勝手に。自分の欲求を満たすためにね」

「そんなことは許されません」

「許されるかどうかって、関係ないんじゃない？」

ユリアはひよいと立ち上がった。報告はとうに終えたので、話す気がなくなれば長居は無用だった。

話は終わっていない、と訴える険悪な視線を受け流して出口に向かい、

「ああ、でも」

振り返らぬまま口を開いた。

「ユーシアは気になっちゃうのかもねえ。そーゆうの……」

小さいころから、ばかがつくほど真面目で、まっすぐで、融通のきかない片割れ。

彼の欲求は、実際に今している行為とは別のところにある。時々、現実と理想の狭間で揺れていることもあるが、最終的には必ず、現実を優先する。今の場合は、クフリラの命令を。

そういう人間は、いざ本当にキレてみると何をするか分からない……ユオがそんなふうに評価していた。そこには危惧でも期待でもない、複雑な感情があった。

風の前11年 秋 未踏の地 予兆

「近頃落ち着きがないですねえ」

まさに自分でそう思っていたところに直球で指摘を受けると、理解された喜びよりも恐怖の方が勝つ。

「……なんだいきなり」

ユーシアはそれをありありと声に浮かべ、急激に詰められた距離を迷惑そうに離れた。

行動が自由となると、すぐさま寄ってきて結論もない四方山を吹っかける。ジロンに留まっていた間は四六時中視界のどこかにいたが、クフリラやユリアに付き従っていることがほとんどで、ろくに話した記憶もないと言うのに。

ユオはいったい、何がしたいのか。

ユーシアにはそれがさっぱり察せないのである。

「初めて見ました」ユオはこの日は葉草箱持参であった。「空が青い」

勝手に話頭を提出してくるユオに辟易し、得体の知れない旧知人に対する不安を噛み殺して空を見上げる。

森は徐々に開けて、梢の隙間にちらつくばかりだった空が段々広がり出した。それは黒や灰色でも、天の最も明るい色だと信じていた白でさえない。朝日が昇り、中天にさしかかるにつれ、くつきりと真っ青に染まっていった。寡黙なイエンゼンの軍人たちも、これには珍しく子どもじみた好奇心を覗かせ……対象が空なので、だらしなく上を見てぼかんとしている者がちらほら見られる結果となった……イエンゼンの国民性はやはり雨に帰属するのだとユーシアは確信した。国民性の曲直は別として。

「エンドの言葉ではナントカと言うんでしょうねえ。我々が雨を色々呼ぶみたい」

呑気な感想だな、とユーシアは思う。イエンゼンの空は雲が切れ

ることこそあれ、こんな浮かれた色にはならない。ここは本当に、完全に、エンドの領内なのだ。それなのに。

「言っておくが」不快と顔に大書して、きっぱり言い放つ。「お前とほのぼの会話する趣味はない」

「おやおや」

何を言われても一向こたえた様子がない。

「何かしましたっけ？ 随分な嫌われようだ」

「……態度が急変すれば怪しむのは当然だろう」

「急変？」

「とぼけやがる」

飄然と葉草を燃すユオを一瞥し、再び視線を上空へ留め付ける。東では今の季節を秋と呼ぶのだったか、と脈絡もなく思い出す。東の語感には慣れないが、秋と言う響きはこの青によく似合うような気がした。

「吐け。いったい何を命じられた」

「は？」

「母上か？ それともユリアからか」

ユオは口の端で巻いた葉草を挟んで、いやにゆっくりと煙を吸ったり吐いたりしながら思索した。また細かい演技を入れやがってと思ふといよいよ腹が立ったが、いつになく惚けた目つきを見ると、その勢いは不覚にも怯む。やがて、ああ、と嘆きの声が上がった。

「貧乏くじだ。まったくついてない。いやになりますね、そんなふうに疑っておいでだったとは」

いつになく感情表現豊かな言葉を聞くと、訳が分からなくなる。

「あなたと同じです。畏れ多くもハーターを名乗る不届き者を改めるためにロイセンくんだりまで来ているんじゃないですか。それだけですよ」

が、意味深長な間を空けてこちらの様子を観察する余裕綽々たる態度や、くわえっぱなしの巻き葉草が、ユーシアを冷淡に引き戻した。ユオが敢えてそうして見せたのか、元来の性格が不幸にも露出

してしまっただけなのか、そんなことはどうでもいい。

「お前は昔っから平気で嘘を吐くからな」

「それは否定しません」

「しねえのかよ」

「でもねえ、ユーシアさま。考えてもご覧なさいよ……あの国で嘘も吐かずにどうやって生きていくんです」

「それによ全面的に同意だけだな。仮にも上役にそんなこと言わんがためだぜ」

動揺するのに疲れ、ユーシアはユオに背を向けた。

他の者たちの気配は遠い。皆がユーシアを避けているのでもあるし、ユーシアが皆を遠ざけているのでもある。

「何にそんなに怯えてるんです」

去りかかった背中に、相変わらず引き止めようとする緊張感もないのんびりした声がかかった。

「あなたもユリアさまの片割れならお分かりでしょうけれど」

足を止めない代わりに歩調を緩め、ユーシアはその真意の欠片でも見つかりはしないかと耳を澄ます。

「気をしっかり持ちませんと……飲まれますよ？　それこそ、ユリアさまのように」

しかしその声音には、普段どおりの軽々とした響きと言葉どおりの意味以上には、何も含まれていなかった。

「接触は近い。あなたは、ユリアさまのようになってはならない」

「……俺はユリアのようにはなれない。なりたくてもな」

ユーシアは、誰もいない方へ立ち去った。ユオは深追いはしない。浮き足立つ理由などつくに分かっている。否、今に限らず、ユーシアの感情に影響を及ぼしてきたのは常にその存在のみだった。なぜなら、ユーシアが動くのはユリアのためだけであり、ユリアを動かすのはその存在だけだからだ。

エンドに侵入してからかなりの時が経った。相手の位置はおおよそ把握しているし、恐らく相手にもこちらの位置は把握されている。

今は互いを探っている状況なのだろうが、それももう、飽和が近い。その存在……セントラとの接触が現実味を帯びてきたことに、昂っているのが自分なのかユリアなのか、あるいはセントラの方であるのか、最近ではその区別もつかないほど三者は混線している。

ユーシアは、うまく会えるといいわね、と言った時のユリアの表情を思い出した。それはやはり美しく、絶対的だった。

「こら」

第六感なんてものが備わっているとは思っていないが、あまりにも唐突に人が現れるとさすがに自分の意識配分を見直したくなる。

「……なに？」

イルは戸惑いをありありと声に浮かべ、側頭に布告なくぶつけられた鉄拳の持ち主を顧みた。

「何じゃねえだろ」アーテスは大層ご立腹の体だ。「まーたばけっとして。なんべん呼ばせんだよ」

呼んだ？ と聞き返しかかったのを、イルは喉で押しとどめる。

それを言ったら罵倒が三倍になって跳ね返ってくるのは明白だった。

「ごめん」素直に謝るに限るのだ。「なんの用？」

「南方隊長がみんなを集めてる」

くい、と親指で背後を指し、アーテスはぶっきらぼうに用件を述べる。それでイルは、自分が本隊から結構な距離を置いた場所に来ていたことを、今さら知った。ふらふら出歩くな……先日、こっぴどく注意されたばかりだというのに。

「ああ。ありがとう」

「礼はいいからさっさと来い。対^{ユミ}の怠慢は連帯責任だ」

腕をふん掴まれ、ぐいぐい引っ張られる。引っ張られるままつんのめり、イルは改めて周囲を見回す。木々もすっかりまばらになった、国土の南の端の端。南の国境は長いこと『中立の盾』任せにされていたので定かではないが、ひょっとしたらここはもう、ザファイ

アに属す土地なのかも知れない。呪いに染まった戦場は背後に遠ざかり、時折飛ぶ鳥や獣の爪痕を見る。秋の高空に薄い雲が流れるうららかな午後、久しぶりに見た青い空に心惹かれたからと言って、気も付かぬ内にこんな距離を移動したりするだろうか。みずからの足で。いつ黒い集団と出くわすかも知れない時に。

「またなんか、聞こえてるのか？」

「へ？」

目的地向いたまま、アーテスがぞんざいに核心を突く。胸のあたりでひよこひよこ上下する金糸の艶を見るときもなく見下ろしていたイルは、体裁を整える暇もなくおかしな声を上げてしまった。

「いや……うん」

「どっちだ」

「この辺はもう……声は、しないよ」

「じゃあどうしたんだよ」

さっさと来いと言ったくせに、アーテスは自分で立ち止まり、こちらを向いて腰に手を宛てがった。

「前くらいの調子なら、ちょっと間抜けな性格なんですでも通るけどな。あんだだけ嚴重注意受けてまだやってたら、それじゃ済まねえぞ。なんだってんだ、ほんとに」

ひどい言われようだったが反論の余地もない。

思い返せば彼女は、ふたりがこの森に来た当初から何かにつけてこの指摘をしていた。当時イルには自覚がなかった。けれど確かに、最近では自分でも不安になる。注意がふつと現実を離れる、胸の内がざわざわして落ち着かない時もある、何かに誘い出されたように行くつもりもない所へ足を向けていることもしばしばだ。この間こっぴどく叱られたその折りには、ロンたちばかりか養父とその両脇を固める老人ふたりまでもがアーテスの肩を持った。後ろ三人が加わったおかげで、仲間内の注意と言うよりもほとんど懲戒であった。

「前言ったとおりだよ」イルは情けない声でその時の弁明を繰り返す。「ぼくにも分からない」

「……まったく」

アーテスは言いたいことをたくさん残したらしい不服そうな顔を
して、それでも全部を嘆息に込めて歩みを再開した。招集がかっ
ているから、彼女の満足いく追及をする時間はない。

ところがイルは、ぴたりと止まったまま歩き出さない。腕を引か
れなかったからでは無論ない。表情のない顔をして西の空を見上げ、
胸騒ぎを掴み出そうとするように服布を絞る。

「イル！」

ついて来ていないことに気付いたアーテスが、今度こそ叱りつけ
る。

呼ばれているのは分かるのに、イルはどうしてもその青空から目
を離すことができなかった。目を離すと二度と捕まらなくなっ
てしまうのではないか、というその感覚は、遠い子ども時代にも幾度か
覚えのあるものだ。しかし、この向こうにあるものが、昔とはまっ
たく違う。それは人々の中に燦る漠然とした感情ではなかった。も
っとはっきりした、確固たる個が持つ烈しいもの……ちょうど、炎
使いのジフォイラの背後に見たようなものが、ただ一点からまっす
ぐこちらを指している。

「誰だ……？」

誰何は、それが人であるという直感に基づいている。

ますます彼を混乱させることには……イルはその誰かを、知って
いるように思えてならないのだ。はるか昔から。当たり前のも
のとして。

ただ、知っていたという事実そのものを知らなかったような、嵌
らない感触に気分が悪くなった。いやになる。いやになる、いやに
なる。名乗らないなら消えて欲しい。消えてくれないのなら早く現
れて欲しい。イルは泣きたいように目を瞬いた。知らない土地の見
慣れた空の色が、他人行儀で気味悪かった。

風の前11年 秋 未踏の地 へ拒絶へ

進路の決定権はユーシアにある。途中までどこそこ指示して部下に先導を任せていたのが、今ではユーシアみずから先陣を切っている。指示のしようがなくなったのだ。感覚頼みの進軍は、部下たちに不満を抱かせている。それは承知であったが、ユーシアはそれらを敢えてどうにかしようとは思わなかった。彼らとは元々、仲良しこよしともいかなければ、健全な主従関係というわけでもない。加えて、構っている余裕がない。

必要ねえんだよ。

それが偽らざる気持ちだった。

クフリラはユーシアに、ユオに加えて一個中隊をつけた。彼らはユリアの制御下にある。傀儡というのがどういう仕組みで成っているのか、詳しいところを彼は知らない。普段は影響を受けないらしく、いつもどおりの個々の性格を発揮しているが……ユリアの力が及んだらどうなるのか、正直それさえ聞いていない。

つまるところ、彼らをユーシアに任せる気など始めからないのだ。ついて来るなら勝手に来ればいいと思う。どうせ彼らにできることなどたかが知れている。が、ユオが朝からびったり隣について来るのは少々いただけない。この男は先日やりあい以降、行動で弁明しようとするかのように、ますますユーシアを構うようになってしまった。

「嫌がらせとしか思えない」ユーシアは長い沈黙をとうとう自分から破った。「用がないならどっかへ行け。用があるならとっとと済ませろ」

左を歩くユオは声をかけられたことに驚きを見せ、如何ともし難いと言ったふうに唇をひん曲げる。

「用があるからどっかへは行きません。済ませろと言われてすぐ済むものでもないで、どうにも」

「済まないんなら魂胆を見せろ。気色悪くてかなわん」

「もう見せたつもりでしたかね」ユオはやはり、悪態に恬然として動じない。「どうせ信じてもらえないと思ったらいいたくなくなるでしょう？」

「信じるか信じないかは俺の勝手だ。言えと言われたら言えればいい。それとも命令に背くのか」

「滅相もない」

頑是無い相手に調子を合わせようとする大人の口調が、いよいよ癪に障る。

「前も申し上げましたがね。気になってしまってますよ。そう恍惚となさって一点ばかり見つめて、他の誰に説明もせず迷いもなく一方向に向かって行かれると、五つばかりのころのユリアさまを思い出します。こと今朝からは昨日までに増して様子がおかしいので、こうして付き従っているわけですよ……そんな目で睨まれても私の心づもりは変わりませんよ」

ユーシアは自分の腹の内を見抜かれていたことに……ユオが見逃すとも思えなかったものの……憤り、ひとしきり忌々しげな視線を送った。確かに今朝から、周囲の気配が先日までと変わっている。まばらになった木々の間が、きらきら瞬く。それは何者かの手招きだ。ユリアが語るところの、扉の向こうから漏れる光が、とうとう自分の目にまで映るようになったかと、ユーシアは不安を募らせていた。

「お前は、全部分かってるのか？」

「何をでしょう」

「俺たちが、なんなのか」

ユーシアはユオの言う一点をじっと見る。他の者が招かれることのないものに招かれ、衝動に駆られ動いていく自分。うまく会えるといいわね。顔も知らぬ何者かと巡り会うことを確信していたかのような、ユリアの声。

「おかしいだろこんなの。俺は今までどうして疑問に思わなかった

んだろう。俺とユリアは一緒に生まれたかも知れない。だからって
こうまで繋がってしまうものなのか？ ジロンには他にも双子も三
つ子もいるが、こんなことはないだろう？ お前は気になるとは言
うが、不思議だとは言わない。お前は俺の知らないことを知ってい
るんじゃないのか。ユリアも、母上も、みんなして」

ユオの顔が、興味深そうにこちらを向いた。

「よほど共振が強いと見える。純真のユーシアさまがそんな懷疑を
なさるとは。私にも余波のくるわけですよ」

「あ？」

予想外の回答にユーシアは不機嫌を露にしたが、それ以上追及は
できなかった。

「……どうしました？」

動揺を、ユオもまた感じたのだろうか。足を止め、臆病な動物の
ように耳をそばだてて気配を探るユーシアに、囁き声で問う。

ユーシアはしかし、完全に問いかけに背を向ける。進軍を阻む長
に不平たらしい視線がいくらか注がれるが、彼の目にはもはや何も
入らない。そこは閑散とし出した木々が再び寄り集まったひと群れ
の森林だった。隠れ潜むにはいかにも都合のよさそうな場所に、駄
目を押すように日が陰り、ずっと視界が暗くなる。ひらひら気まま
に空に乗る落ち葉がいつ地に着くかと見守るような、変に緊迫した
空気を割いて、怒号が起こったのはその直後だった。

最初の衝撃は最後尾から、続いて八時、十時方向から。呪術の衝
突に特有の耳底に残る高音が、一時にいくらか重なる。不意の攻撃
に誰かがでたらめな防御を敷いたのか、とぼっちりに巻き起こる突
風がユーシアの裾にも届いた折柄、敵の姿が視認できる位置に現れ
る。

「これはこれは」

油断なく刀剣の柄に手をかけて、ユオが大仰に述べた。

「主力部隊のご光来だ」

互い高い位置で力が拮抗すると、勝負のつかぬまま別れることが

多い。エンドの軍隊は平服で顔を隠す気もないから、奇妙な顔見知りがいくとも出来る。かつてユーシアが前線にいたところから今に至るまでジロンとロイセンを行き来してきた彼には、それがエンド南方を守る中心戦力であることが何とはなく分かるらしかった。

「……汚い連中だな」

「寝込みと背後は狙い目としては常套でしょう」

焦点を巧妙に外されたようなすっきりしない表情のユーシアに、杖を握った数人が襲いかかる。ユオは無言で、それらを一刀の元に切り捨てた。術でなく刃物の力で切り裂かれた人間から散る赤いものが、ぴつと白い頬に飛ぶ。

「……正面から来ればこうなるものです」

「お前の戦い方は汚れるから好かん」

だから離れるとでも言わんばかり、ユーシアはざくざくと土を踏み、肩で空を切って敵味方の乱然入り交じる中へ踏み込む。引き下ろしたフードの下から観察する……無骨な体格の東の人間ども、杖、剣、鞭のようなもの、防具らしいもの……道具に頼っているような低級の術師に、ユーシアは決して傷つけられない。中には徒手の使い手もなくはないようだが、術式繰りの稚拙さは無駄な音や破壊にありありと表れる。戦いの中を歩き抜けるのに、一抹の恐怖もなかった。それよりも、引つかかることがふたつある。戦いが始まってユリアが手を出さない。そしてその理由を示すかのように、ユーシアを招く何者かはまだ、ここより他にいる。

「どちらへ」

ユーシアはもう、来るなどと言わない。実際、彼はすべての音から切り離されつつあった。部下たちの声も敵の雄叫びも、呪術のぶつかる金属音めいた協和音も……歩けば歩くほど背の向こうに遠ざかって自分ひとり突出していく。誰かが吹っ飛ばされ、誰かが叩き付けられ、誰かの腕が断たれ誰かの骨が折られても、半透明の幕の向こうの出来事みたいに現実味がない。違うのだ。こんな低俗で野蛮な情景の中にはそれはない。無謀にも立ち向かってくる者たちを

片手で払いのけること、もう何人目かも分からなくなった時、ユーシアはついに、招く手の差し伸べられるのを感じ取った。

雑踏を突き抜けて届いたひと渡りの風刃が、ユーシアの防御をわずかに脅かす。先ほど他人の血に塗れた場所に、今度はユーシア自身の血が浮かんだ。ユーシアが防御し損なったことにユオが喉声を漏らす。

最初に目に飛び込んできたのは、ひとり。そいつは素手でユーシアに殴り掛かるという蛮行に及んだ。ユーシアはユオを制すために片手を使ったきり、身じろぎもしない。軍人に備わる勘で何かを察したか、敵は寸前で手を引っ込め、信じ難いばねで身を翻した。殺す気で発した力はその着地をわずかに狂わせるだけで散っていく。その後ろから、帯剣の女がひとり、あちらの樹上に『輪郭』がもうふたつ。女の方が、さらに後ろに向かって何かを喋る。言葉は分からないものの、抑揚から何かを尋ねたらしいと知れる。それに答えて暗がりから現れた者が、女に向いていた目をこちらに向けた。敵の様子を探るための目視だったのか、何の気なしの一瞥であったのか……どちらにしろ、それがきっかけだった。

ユーシアはその時、完全に切り離された。

それは、自分を外から見たような奇観である。自画像や鏡像の類を見た時とは違う、自分そのものと目を合わせる感覚。現実にはあり得ないことであり、自然ユーシアは現実のすべてから隔離されていた。踏みしめていたはずの地面も、そこへ影を落としていた木々も、周囲に溢れていた人間たちもそれらの発する音にもおいもすべて、完全な無に還る。ユーシアはぬばたまの虚空にある。無であるがゆえ、自分が今日を開いているのか否かも分からない。呼吸していると思っっている空気すら、その存在は定かでない。

何も見えず、何も聞こえず、浮遊しているような溶け出していくような感覚に支配される……しかしユーシアは、それがどこなのかを明確に把握している。そこにただひとつ、確かにあるものを認識している。

光る闇。

「これ、が……」

これがそうだと言うのか。この存在が。

自分の名を呼ぶ鋭い声で、強引に現実引き戻される。その瞬間、戻ることを拒む自分を知る。動かす必要のない体を思うさま動かして、ありったけの感情をぶつけんとしている自分を知る。理性の声、が、まずいと告げる。けれどもう、止まらなかった。

ずっと不思議だった。ユリアがどうして、セントラに囚われてしまったのか。彼女は賢い。無益な愚は犯さない。その彼女が正に人生を賭して追いかけているものが、漠然としか感ぜられなかった今までは理解できなかった。

今それを理解した。長年の謎が一瞬で解けたのだ。だのに喜びは欠片もない。理解してしまったことが、容赦もない現実感を持ってユーシアを打ちのめした。

強制的な解放と安堵。暗闇に放り出されて感じた、温かい抱擁。

ユリアはこれに囚われた。

彼女はこの温もりの虜になったのだ……！

「うわあああっ！」

ユーシアは振り上げた右腕を、世界のすべてを拒絶するように振り下ろした。徒手の使い手は呪術の使役に道具や動作を必要としない。なくても問題ないのであって、あってもまた問題ない。どこるか、特に攻撃の術は動きによってイメージが確立される特性が強いから、出力は倍加される。結果は、長く呪撃師としてあったユーシア自身、体感したことのない強力な術式となった。嵐が逆巻いて、風に押さえつけられた空間がさまじい重力を生んで大地に伸しかかる。彼はただ出し抜けに迫り上がったものを吐き出そうとしただけだった。周囲に人がいること、敵のみならずユオが控えていることに、考えが及んでいなかった。百年踏破されずにいた生々しい大地の、意外なほど脆いことなど、思いつくはずもない。

足場のなくなる、魂の浮くような感覚と同時に、ユーシアの生んだ

嵐を抜けて鋭利な風が吹き抜ける。それはまっすぐにユーシアを狙い、嵐の力を削り取ってみずからの力と成して襲いかかった。自分の限界に挑むがごとき力を発揮した直後、一瞬の虚脱状態にあった彼には咄嗟に身を守ることができない。風と風とがぶつかりあいながら向かってくるその光景は……ユーシアの右目の見た最後の光景となった。

すさまじい熱が顔の半分を過る。ユオが自分を呼ぶのが聞こえ、それを皮切りに遠ざかっていた音が怒濤となって流れこむ。阿鼻叫喚は敵のものか、運悪く近くにいた部下たちのものか。浮いた体が重力に従った瞬間に、再び浮遊するのを感じ、次には勢いよく投げ飛ばされる。

いったい何が起きたのか、整理するには少しの時間を要した。

風の前11年 秋 未踏の地 〱 橙色の一点〱

目覚めると、知らない男が至近距離に詰め寄っていた。飲みこんだ息を吐く暇もなく、鞘を払った短剣が首筋を脅かしていたりすれば、全力で逃亡を図るしかない。イルは痙攣するみたいに体を跳ねさせて逃れようとした。が、右腕に何かしらの拘束があつて果たせない。いよいよ混乱する頭に、聞いたこともない言葉が追い討ちをかけてくる。

「動かないで！」

この状況でそう言われては従わざるを得ない。完全な脅迫に晒されてイルが肩を強ばらせると、要求を飲んだにも関わらず剣の先が肩口にゆっくりと降ろされる。わけが分からず、ぎゅっと目を閉じる。

「大丈夫です。私を信じて」

人を押さえ付けた上凶器を突き付けておいて信じるもくそもないものだ。いくら丁寧に言われたところで、無茶な要求には恐怖を通り越して怒りさえ湧いてくる。何がどうしてこんなことになっているのか、こんがらがった頭では整理もままならない……視界を閉ざして震えている内に、とうとう切っ先が肩に触れた。強烈すぎる感覚は最初の一瞬判別できない。触れたまま切るでも刺すでもないその感触が、とんでもない「熱さ」なのだと感じ取った時には、そこはとつくに焼かれていた。驚愕が過ぎて声も出ない。無意識下、脅迫者の腕に左手が縋る。熱した金属を執拗に押しあてられている間中、爪を立てる勢いでそれを握り締めていた。涙の浮かんだ眼裏に電気めいた光の筋がちらつく。イルは悟った。自分は痛みのあまり目を覚ましたのだと。

「……これでいい」

ようやく解放された瞬間、すべてを放棄してくたりと倒れた。肘や肩や、頬の下にごつごつと剣呑な感触がある。朦朧目を開けば、

視界の端に一点橙色の部分があるだけで、あとのところは暗闇だった。

「包帯の持ち合わせがありますか。なければお譲りしますが」

疲弊しきったところへものを尋ねられても、返答するゆとりがない。少量の薬と布なら携帯しているはずだが、なぜ今そんなものを欲しがるのだろうか。怪我でもしたのか……漫然と相手の様子を伺って、そうは見えないがと適当な判断を下す。その間に激痛が余韻となって次第に堪えられる程度に落ち着くと、ようよう身の上が把握されてきた。

自分は落ちたのじゃなかったろうか。

あの「誰か」が何かに怯えたように叫び出して加減なく大地を抉ったら、堅牢に見えた地面があっけなく崩れ落ちた。先頭にいたアーテスが足を取られた瞬間が、くつきり目の奥に焼き付いている。体勢を崩された彼女を、「誰か」の放った術式が飲み込まんとしていた瞬間も。

思わずかばってしまった。

咄嗟のこととは言え、彼女はきつと目くじら立てて怒るだろう。このまま生き別れたりしたら死んでも許してもらえないに違いない。とにかくなんとしても生きて出なければ。そう、ここがどこであろうと、この男が誰であろうと……。

そこまで思案して、途端イルは横たえていた体をがばっと起こした。

「いっ！……て……」

「動かさないがためですよ」

男は収めた剣を置き、不用意に動かした肩からきつい反撃をくらって身悶えるイルに、宥めるような手振りをした。が、大人しくしているわけにもいかない。何しろ相手の身元を思い出してしまったのだから。

地面を崩したあの「誰か」のそばにいて、長剣を操っていた男。要するに、敵だ。

「落ち着いて下さい。危害は加えません。でなければ治療なぞしませんよ」

治療？

そぐわない言葉に戸惑う。見れば男は、短剣を放した手に包帯を取っている。

「固定しますから、動かないで……ああ」

怪訝を露に包帯と相手の顔とを見つめていると、言葉は途切れて力の抜けたため息になった。

「参ったな。言葉が通じていないのか」

そんなことを言って、包帯のない方の手で頭をかく。つるりとした禿頭である。見慣れないその光沢に瞬時意識を奪われたせいだから、すうっと頭の一部分が冷静になる……それはまた、別の部分をさらに混乱させた。

言葉が通じない、なんて言葉が、通じているのはどういうわけだろう？

「……分かる」

イルが言葉を発すると、男は思案に従って斜め下に逸れていた視線をはたと引き戻す。

「……今なんと？」

「言葉は……分かる」

繰り返すと、聞き違いでないことを確かにしたらしく、ますます気配を張った。

「これは驚いた」薄明かりを背に、じっとこちらを見下ろす。「話せるのですか。こちらの言葉が？」

イルが、自分が普段と違う言語を口にしたことに気付いたのは、その指摘の後だった。

イエンゼンは、数千年もかけて作り上げた独自の言語を持っている。文字から発音から語順から、ことごとく同大陸内の他言語とは異なる非常に特殊なもので、長い絶縁状態による互いの言葉を学び合う環境の崩壊も手伝って、かの国との意思疎通をほぼ不可能とし

ているのである。戦況を左右する情報という武器を手にするべく読み書きまでならば通曉している者もあるが、彼らとてさあ声に出して読んでみると言われたら大人しく引き下がる。

真意を尋ねるように自分の唇を左手指で辿るきり、何も言えないイルを見て、

「そうですか」

相手は勝手に得心していた。

「そうですね。むしろ当然だ。そこまで進んでなお、自分を保っていらっしやる方が驚嘆に値するということですか」

「……なんの話ですか？」

「それ、の話ですが」

指示語を口にしながら、男は淡々と手にした包帯を解き始めた。示す先を表したのは刹那の視線の動きだけだったが、イルはすべてを理解する……父の他には誰にも知らせていない、父にだってつい最近見せたばかりの秘密が、見も知らない人間に晒されていたのである。

「隠さなくても結構ですよ」

懲りずに動こうとするイルに先に釘を打とうと、男がふいに胴間声を出す。有無を言わせぬ何かの圧力に負け、せめてもと恨めしげな目を向けると、

「と言うより、もうひととおり観察させていただきましたよ。あなたが気を失せている間に」

ほとんどむりやり右肩の固定にとりかかりつつ、さっぱり悪びれもない語調でとどめを刺してくる。おまけに……動かさない気遣いのある、体格に合わせぬ繊細な接し方だったのに……ちょっと腕に触れられただけで肩口が痛烈に引き攣れる。今度は辛うじて声は上げなかった。

「血は止めました、骨に異常があるようですから。強めに固定しますよ」

事ここに至り、奇妙な状況が飲みこめてくる。先ほどから惨たら

しく右半身を苛んでいるこの痛みは、外傷によるものだ。眼前の、敵であったはずの彼は、その手当をしてくれているらしい。

「仕事なのでね。感謝等は無用です」

飲みこめるごと増えるような疑問符に対し、男は答えを投げて寄越した。

「我々はあなたをジロンへ連れ帰らなければならない。少なくとも、到着までは生きていたただかないと困ります」

「大人しくついて行くわけないと思うんですよね……」

実直すぎる口述に思わず真顔で突っ込みを入れる。

「こちらも連行方法については特に命令を受けておりません。従っていただけないのであれば、相応の対応をいたします」

「そうでしょうけど……ぼく程度じゃ大した情報は持ってませんよ。無駄な労力だと思うな」

「これはこれは。まるでご自分を単なる捕虜のように思っておいでだ」

呆れ返った口調の意味を、とくに当てもないまま考えてみる間に、右の二の腕はあらかた胴に結わえられてしまった。こうした事態や処置には慣れているのか、妙に手際がいいし、不快な締め付けのない割にぬかりなく動かせない。

危害を加えないと言われたものの、敵前で一部でも体の自由を奪われるのはいかな状況なのだろうと、今さら致し方ないことも考える。

「さて」

余った包帯を歯でちぎると、男はさっさと立ち上がった。その行方を目で追い、橙色の光源を見つける……中空に浮かぶ炎の球である。

「……呪術師なんですね」イルは思ったままを口にした。「剣を使うから違うのかと思った」

照り返しを受けてようやくはっきり陰影の見えた相手の顔は、声や言動から察するより若い。イル自身よりは年配らしいが、ロンと

同じくらいだろう。

「あなたもなかなか、一筋縄でいく御仁じゃありませんねえ」笑うとますます若やいだ。「それとも恐怖心というものをお持ちじゃないのかな」

「さっきまでは死ぬほど怖かったですけど。気にしてられないですから」

内容の是非も問わないまま浮かぶことを全部言葉にしてしまうと、男は今度こそ声をあげて笑った。緊張感のないことを彼に指摘されたくはないと思った。

「呪術師なのなんか、見ればお分かりでしょう。私が剣を使うのはね、ただ剣が好きだからです。世間からの需要と本人のしたい供給はちぐはぐなものですよ。あなたには分かっていただけのような気がしますがね。呪術の使い手のくせに、剣をお持ちのようだから」

イルははっとして左手で左の腰骨辺りを探った。探し物は、光の球の下から男が拾い上げて見せた。

「さすがに武器の類は没収させていただきましたよ。けれど異なものだ。あなたはこれを抜かなかった。かと言って、あなたが術式にこんなものを使う理由も見当たらないが……いったい何用で携帯されているのか、教えていただきたいものです。ねえ、ハーター・イルオール」

逃がしたはずの緊張が、再び体に巡る。

その名前は確かに、国境を越えて知れ渡ってしまったかも知れない。けれど、今のイルから入手できる情報だけで、それとイルとを結びつけることはできないはずだった。

「ご安心を。鎌をかけたりはいたしませんから」

しかし男は揺るぎない調子で、あらゆる否定を先回りに封じた。「さしずめ、『輪郭』のないのを頼りに隠してこられたのかな？

なるほど、確かに『輪郭』は呪術師であるか否かの判断材料として絶対的な説得力を持つものです。しかし、今回ばかりは相手が悪い。我々にとって、『輪郭』があることは、あなたがあなたであること

の必要条件ではないのですよ」

光源の周囲に散らかしたもののどもを片付けてしまうと、男は最後に手に残ったものをこちらに差し出した。警戒を解かぬイルは、なかなかそれに手を出さない。だいいち、なんなのか分からなかった。丁寧に畳んだ布切れのようだが、薄闇の中でもなお黒々とする色には心当たりがない。

「いいりませんか？」

くいと押し付けるように手を動かして、男はちょっと首を捻った。「当初の止血に使っちゃったのでね、ちと着づらい色には染まりましたが。不可抗力というものでしょう？ 他にお貸しできる服もないのですよ。それとも、そのままでもよろしいですか」

どうやら上着の成れの果てらしいと、ようやく思い至った。どうも頭の中が頼りないと思えば、失血が度を越えているのだということにも。

イルは無言で、そっとそれを受け取った。どこかも分からない暗闇の中で半裸を晒しているよりは、血なまぐさい方がいくらかましだ。

風の前11年 秋 未踏の地 へ翻る影へ

「立てるようでしたら参りますが」

ここに落ち着いているつもりはないらしく、男はつつ立ったまま
でイルを見下ろした。参りますと言うのをここを出るという意味に
取り、のろのろと問い返す。

「ここは……？」

「さてねえ」

返事はあつけなかった。

「もともとどこか分からない場所の、さらに地下に潜ったところで
す。覚えていないのですか？ ご自分に起きたことを」

「落っちたのは、覚えてます……」

だが釈然としない、という内心を、相手は的確に読み取った。

「上をご覧なさいよ」

上、とおうむ返ししながら、振り仰ぐ。

歪な月が見えた。

「あそこから落ちたんでしょねえ」

気のない声で、それがはるか上方にぽっかり開いた穴と、そこか
ら指す外の光であるのに気が付いた。イルは見上げた時の数倍の早
さで視線を振り降ろし、再び痛みに襲われて自分の迂闊さを呪う。

「……あの高さから」いい加減、頭もくらくらしってきた。「助かる
わけない」

「同感です」

いい加減、どうでもよくなってきた。

「さ。行きますか。もう少し休まれますか？」

「……行きます」

イルは若干の不平を込めて、低く答えた。男は、あなたがそう言
うならと言った調子でひよいと肩を竦め、光の球に消失を命じた。
灯りと熱が一時に消え、身を潜めていたヒカリゴケの青い光が、水

底から浮かび上がるようにして辺りに溢れる。

立ち上がると、本格的に頭がぐらついた。むりやり足を踏み出し、さっさと歩き出す男の後を追う。横に並んだものか、このまま縦並びでいたものか、霞がかった頭で思案する。前に行く男の腰の辺りで、元からさしている長剣に重なって、奪われた剣が下がってかちやかちやと鳴っていた。

グレーテ、と呼ばれるその剣は、帝国軍のもっとも標準的な武器で、剣士隊では最初に支給される基本装備である。長さは振るう人間の腕の長さの八分から十分ほど、幅は若干広く取っており、その分重みがあつて臂力ひりよくを要する……うっかり仔細まで諳んじてひとりで首を振った。

武具としての特徴などこの際どうでもいいのだ。重要なのは、軍の支給品を略奪されたという事実。このまま取り返せずに戻れば、弁償は免れない。たとえそれが、必要もないのに強制的に持たされたものだったとしてもだ。

剣を持てと言ったのは、アーテスだ。

今回初めて大掛かりな戦闘に駆り出されることが決まり、にもかかわらず日に日に気の抜けるようなイルを見るに見かね、彼女からとうとう許可が出た、と言うのが、より正しい。もともとイルは自分を呪術師だと思っていない。剣士だと思っているわけでも無論ないが、職業柄副産物的に身に付いただけのものではあるにしろ、もっとも慣れた護身の術は何かと言われたら剣術だ。ただ、剣一本に誇りをかけているアーテスが、イルが剣を持つのをはつきりと嫌うのだ。

いつからか、イルは自分の剣というものを持たなくなった。それは、彼女の機嫌を損ねてまで身につけ続けなければならないような大切なものではなかった。街で護身する機会のあるわけもなく、南へ来てからもずっと本当に戦っていたのはアーテスの方で、必要もなかったと言える。それがここへ来てこんなことになるとは。逃さず許可を与えたアーテスの鋭さには脱帽である。

結局奪われてしまつてなす術もなかったなんてことがばれたら、脱帽したところをそのままぶん殴られそうだが……。

「……あの」

云々考えながら後ろからふた振りの剣をぼうつと眺めていて、イルはふと違和感を抱いた。

嫌に早足に、さくさくと歩いて行くが、彼は出口の見当をつけているのだろうか？

「今、どっちへ向かってます？」

「分かりません」

やっぱり、と思わず呟き返すと、

「仕方がないでしょう。居場所が把握できていないのですから」

思いがけず、反論があつた。

「救助の当てがあるなら動かず待つのも手ですがね。ないのだから体力のある間に歩いてしまふ他ありません。運が良ければ生きている内に外へ出られましょう」

話す間中前を見たままだったから、イルはその背をじっと見ているしかなかった。腕や足の長さはセン族の特徴を表しているけれども、ずいぶん幅のある背中だ。軍人らしく背筋が伸びているのに、やや猫背に見えるほど筋肉がある。洞窟の青い闇のせいではないが、その背は何かとても暗いものを背負っているように見えた。

「ぼく、何か、気に障ること言いましたか？」

「……なぜそんなふうに思われます」

「なぜ？ うん、なぜだろうな」

普段どおりにありのままを答えても、初対面のこの男には理解されないだろう。そう思つてもっともらしい理屈を探してみたが、

「そんなふうには、見えるから」結局ありのままにしか言いようがなかった。「何か怒つてるよう……焦っているような感じに」

男が、速い歩みを突然止めた。

「あなた、いつもそんなふうですか」

「何がですか？」

「そうやって、人の心を取り込んでしまうのですか」

言われた意味が分からずに黙り込むと、男は体を返した。ロンさえ目線の下になってしまった今、人からはっきりと見下ろされるのは希有なことだ。

薄暗くて色のよく分からない瞳は、のっぺりとしていて、作り物の球のように見える。

「そうですね」

なお黙っているイルに、どこか苛立たしげになった声が降ってくる。

「怒っているし、焦ってもいるでしょう。加えて今は、他人からそんなことを言い当てられたことに驚いてもいますよ。それもこれも全部、あなたのせいだ」

「ぼく、何しましたっけ……？」

「あなたは私の主人の目を抉った」

本人がそのつもりで作ったのか否か、その声はあんまり冷々淡々として、首筋をぞくりとさせた。

「もつとも、同時にあなたもその傷を負わされたのだから……見てはいなかったかも知れないですがね」

みずからの負傷と結びつけられて、はっと思い出す。彼が主人と呼ぶ「誰か」がとんでもない力をぶつけてきた時、アーテスが咄嗟にそれに対抗した。けれどイルは、それに『ジャッジ』を加えることができなかったのだ。一瞬、力が抜けて意識がとんだ気がした。まるで、「誰か」の放ったはずの術式を、そのまま自分が行ったかのように。

我に返ったのは右肩に走った激痛のため。

イルは、左手でそろそろと右肩に触れた。痛むけれども、むしろその痛みを確かめたかった。途切れてもつれた記憶が徐々に整列していくにつれ、顔から表情が抜け落ちる。

イルはいまだかつて、誰かの呪術に脅かされたことがない。

しかしこの傷は、どうだろう。これはあの術式によって負ったの

ではないのか……？

「誰、なんですか」論旨のずれにも気付かず、イルは口走った。「……彼女は」

「……」

温かみの見えない目がこちらの目の中を覗きこむ。それをまともに見返して、イルは確信した。

彼も同じだ。ジフォイラと相対した時とほとんど同じ。鏡を見るようで心許ない。自分自身ほどではないが、いつも他の人を相手にする時のような分かりやすさがないのだ。

「危険だな」

分からない相手が、ふいに動く。

「あなた」それは音もたてない滑らかな動きで、剣を抜き放っていた。「やはり、ここで死んでおいて下さいませんか」

目に止まらないほど速かったわけでも、気付かなかったわけでもないのに、イルはまったく動けない。喉にぴたりと据えられた切先に動きを封じられる前から、その気迫に封じこめられた。

「戦闘中不慮の事故に巻き込まれて行方不明、そのまま死亡扱い。それで手を打ちませんか？」

「……生きててもらわないと、困るんじゃないかもしれませんでしたっけ？」

「そう」わずかに眉をひそめ、男は呻くように言う。「私の主は、あなたに会いたがっているのですね」

「ぼく？」

「しかし私は、あなたを主人と会わせたくはない。たとえ命令に背くことになってもです。実際のあなたを見て確信を得ました。あなたは……危険だ」

彼が何をもってそんな結論に至ったのか、イルに心当たりはない。ただ、相手が本気であるのがおぼろげに伝わってくるばかりである。互い出方を伺うように、無言で睨み合う。強い、と、イルは断じた。

風の前11年 秋 未踏の地 ㄱ嘲笑ㄱ

相手が自分より強いかなそうでないか、それを見破る力は腕前そのものよりも重要と言われるが、戦いを本職としなかったイルにはそんな能力はない。イルの目には、剣と使い手の馴染み具合が映るだけである。長く重量感のある剣は、体軀に恵まれた男の手にしっくりと収まった。あの剣は彼によく従うだろう。彼もまた剣の意をよく汲んで、その力を最大限活かすだろう。

今もまさに、剣はその威力を存分に発揮している。空間の中にただひとつ存在する、イルの動きをぴたりと制する点。剣先はそれを正しく押さえて微動だにしない。

「……受け入れていただけたのですかね？」

その自覚がないのだろうか、つつ立ったまま動かないイルを怪しむように、男はまた口を開いた。

「そんなわけないでしょ」

声が震えないよう、小声で返す。

「ただ動けないし、動けてもこれじゃあ痛くて派手にはできないし……できたとしても、手ぶらでばくにできることって、あんまりないし」

次第に、聞き届けられる見込みのない苦情を述べるような投げやりな口調になる。男はますます訝しそうに目を細めたが、長くは探らなかつた。

「呪術師であるあなたにどうしてできることがないのか、理解しかねますが。抵抗のない内に済ませられるなら、それに越したことはありません」

イルは、知らぬ間に溜めていた唾をこくりと飲み込む。

死ぬかも知れない。それは生まれて初めての感覚だった。

「会わせたくないと言うんなら、会いませんよ」擦れた声で言う。

「そんな理由で殺されたって、納得いかない」

「納得いけば死んでいただけるのですか？」

「……あるいは」

どんな理由を並べられたって、自分が消されることに納得いくな
んて展開はあり得ない。そうは思ったが、イルは口を濁して発言権
を移した。相手の豹変した理由を探りたかった。その根っこには、
「彼女」の存在があるに違いないからだ。

「あなたに会う気になろうと、主人は必ずあなたを探します。そ
うさせないためには、ここで消えていただく他ありません」

「主人、と言うのは、あの、あなたの隣にいた？」

「……いいえ」

一瞬躊躇したように見えたが、声は揺らがない。

「あの方もまた私の主に違いない。ですがあなたを探しているのは
あの方ではない」

「では、誰が？」

「それをお教える義理はありません、と言いたところですが：
…わざわざ私に聞かなくても、あなたには薄々感じられているはず
です」

無表情の下で、恐怖心と好奇心のない交ぜになったものが膨れ上
がる。

彼は偽りを言っていない。真実を語る口で言い切ったのだ。他の
誰にも分かってもらえることのなかった、イルに巢食う感触を。

彼は知っているのか。

この焦燥の正体を。

「何を、知ってるんですか、あなた」

「あなたの知っていることを」

柄が握り返され、鏢が重たげな音を立てる。

「ただあなたには、まだ自覚がないようだ……自覚なさる前に、け
りをつけるとうましよう！」

望む答えの得られないまま、問答が打ち切られる。イルは反射的
に相手の目の動きを追い、突きを見越して横飛びに身をかわす。体

の横を掠める、金属の質感。速さの代わりのように、びしりと響く重み。そして、動かされたことに盛大に反旗を掲げる右肩。

速さの勝負に向かないことをじゅうぶん承知しているらしい、男は攻撃を連ねず、機を作るための動きと殺傷能力をこめた一撃とを巧みに使い分ける。体格差を使い、右半身を補って手一杯の左手側を封じて徐々にこちらの動きを押さえ込む。痛みが誰か別の人の手に変わって頭の中をかき回し、疲労のせいでない息切れが起きる。

集中力が切れ、平衡感覚を欠く。その瞬間を、大剣の先は逃さない。傷の生む熱に火照って歪んだ視界の中で、黒ずんだ灰色の刃だけが直線を持って見える。自分の次の行動が間に合わないことを、頭の右側が奇妙に冷静に悟っている。その差はほんの一瞬だが、決定的な一瞬だ。体が避けるよりも、鉄の先端が肋骨の間に滑り込む方が、わずかに、しかし確実に、早い。

胸を貫かれれば死ぬ。

人がそれを察する時は、もっと怖くて、浮ついて、それでいて重たいものだと思っていた。現実には想像していたより、よほど平坦で無色透明なものだ。

そんなふうだったから、イルはその先のすべてをまた具に見届けた。

柄を握る手から腕全体が棒を通されたみたいが強ばり、岩壁に響く鈍い音をたてて、長剣が地に落ちる。自分の腕に引きずられて男がこちらに倒れ込む。その顔は青い闇の中で、何か見てはいけないものを見たかのように青白く冷めている。

「え」

イルは、今しも自分を刺し殺そうとしていた男を、正面から抱きとめる恰好になった。

「ちよっと、うあっ」

背後の壁に押し付けられ、節くれ立った岩に右肩をしたたかぶつけてしまう。さすがに耐えきれず、悲鳴をあげて踞るのと前後して、男が金縛りを逃れてばつと身を引いた。取り落とした得物を拾いも

せず、大きく距離を取る。

「こ、の……！」

牙を剥く蛇を押さえつけるように、自分の右腕を左手で握りしめ、男は吠えた。

「……ユリアさま！」

文字どおりに傷を抉られてもはや声も出ないイルは、内側から膨らんだみたいにはうっとした耳でその言葉だけを確かに聞き取った。それは、激痛に蝕まれた頭を中心に刹那の空白を生む。

何かを見定めようとして顔を上げると、男と目が合った。色の分らない瞳が、剣よりも危険に閃いている。彼はイル自身よりもお苦しげな息をつき、自分の右腕を全体重をもって押さえ込むような体勢をして、少しでも目を離せば取り返しがつかなくなるとも言いたげに、目だけをひたとこちらに向けているのである。どうやら命の危機はやり過ぎたらしいが、尋常ならぬ男の様子はまったく理解できない。ただ、くっきりと死を感じた先ほどよりも、視線に射抜かれているだけの今の方が、なぜか異様に総毛立つ。

ユリア。

いったいどこで聞いたのだっただろうか。誰のものとも知れない、その名前を。

「オイタはだーめ」

ユリアは自室にいて、ひとりで目を閉じていた。深紅の唇で上開きの弧を描き、ゆったりした音楽に乗るように体を左右に揺すっている。

こここのところ、彼女は終始この調子だ。

ユーシアとユオが、とうとう接触を果たした。それはユリアに、赤い陣の力を借りずとも察知できるほどの強烈な揺さぶりをかけたし、またあちらのふたりにとっても相当な衝撃をもたらしたようだ。ユオは十年以上も培ってきた鋼の忠義心を失い、そしてユーシア

は。

「……そろそろかしら？」

ユリアはそっと、開いた右目に右手を添える。何度そうしてもそこはなんともないばかりなのだが、熱と冷気のせめぎあうような疼きが消えない。しかも、徐々に強まりつつある。

ユリアはすくと立った。

ユオでは足りない。早く。早くユーシアの隣に来て欲しい。そうしたら……今の自分なら……すぐにでも、そのそばに飛んで行ける。ひとたび見^まえれば、夢を叶えるのは容易い。

ユリアは顔が勝手に微笑むのを止められない。それはもう十年前に彼女を捕えた、狂気の笑みである。

風の前11年 秋 未踏の地 〽秋の空〽

生き物が暮らす場所には、完全な静寂は訪れない。何かの動く気配がし、葉ずれと溶けあうようなささやかな鳴き声がし、時折激してすぐに退く。それはなんだか、人の暮らす街の雰囲気と似ていた。アーテスはひとりになりたくてぶらりと出歩いたのだけれども、この場所では姿なき何者かが決してそれを許さないと知り、そう悪くないと感じている自分を知った。

彼らはひとりにしてはくれないが、干渉してくることもない。

図々しく後を追ってきて、ずけずけと人の顔を覗きこんだりはしないから。

「俺確か、今年二十一になったんだよな」

「……」

「つうことはお前、十九だよな」

「……」

「そこまで泣くかあ？ その歳になっ」

「黙れ」

泣きたい時は多々あれ、アーテスが涙を流して泣くことはあまりない。その数少ない機会のほとんどすべてに、この野方図はついて回っている。一喝すれば黙るが、それも一時的なことだ。

人がひとりになろうとしているのに、それが分からないのだろうか。面倒見もここまでいいと、ただの。

「おせっかい男」

「語彙の貧弱なお嬢さんだな。毎回言ってるぜ」

「毎回つきまといてる自覚があんなら少しは自重しろ！ いつもいっつ、も……」

頑に合わせずにいた顔を勢いよく振り向けると、そこにはあまりにも見慣れすぎた幼なじみのひとり、ロンが立っている。アーテスが畳み掛ける言葉を失したのは、彼が近來稀に見る疲れた表情をし

ていたからだった。

「まあ、そうだが」ロンは頭痛のするように目を細め、もごもごと呟いた。「いちおう今、対^{ユミ}なんだ。こんな時にひとりにしておいて、何かあったら俺が困る」

「なめんな。お前なんかに守られるあたしじゃない」

「ばーか。あいつと一緒にじゃないお前なんか一秒でやられら」

ふいに口調が強まったので、アーテスは不覚にもぎくりとした。そのとおりなので言い返すこともできないし、そうでなくても言い返させない圧力を感じる。

「ひょっとして、怒ってんの、お前」

「当たり前だろ！」

ロンは瞬間的に声を高めて、自分を落ち着けようと関係ないところに視線を彷徨わせる。

辺りは、森と呼ぶには少々寂しいような、木々の群れ。夜が明け、既に数刻。長いこと雨の領分にいた呪術師たちにとって、いとも懐かしい色に染まった空。朝の周回行事を終えたらしい鳥たちがそこを横切り、祖国の秋と似た涼しい風が渡る。

『中立の盾』を踏み越えた不法入国者の集団と相對してから一夜。その場所から、彼らはまだ移動していなかった。事後処理の必要も発生した上、隊員がひとり戻っていないからだ。

「あいつはもともと、誰かと争うような性分じゃないんだ」

言うか言わないか迷っていたようだったロンは、結局よそを向いたまま口を開いた。

「何もなければこんなところへは来なかったはずだ。力だってなくしたと思ひ込んでたんだからな」

アーテスの頬は紅潮した。何を言われているのか分かったからだ。「イルは」ロンが、震える拳にぐっと力を込める。「お前の家出に付き合わされてこんなことになったんだ！」

イエンゼンと接触して数分、事件は唐突に起きた。

アーテスはふたりの対^{ユミ}と、カシーとヨウと共に、その中心に居合

わせた。むしろ、それは彼らがある人物と対峙したゆえに起こったと言った方が正しいのかも知れない。その人物は、他の術師たちと同様黒い頭巾で顔を隠していたが、明らかに他の術師たちと異なっていた。アーテスの目には少なくとも、「彼」は自分たちだけを見据え、自分たちの居場所を目指してやって来たように映った。他の者たちが自分に降り掛かる火の粉を払うことに懸命な中、唯一みずからの意思で選んであの場にやって来たように。

気味が悪いと感じ、アーテスはほとんど無意識にそいつに向けて剣を振るっていた。そこから迸る刃を、どう使うか決めているのはイルである。アーテスは放ったものの先について意識したこともなかったが、それが人を切ったことがないのは知っていた。この剣が切るのは人外のものだけ。アーテスが人に向けてぶつけても、敵は『ジャッジ』を外されるか、圧力による打撃を受けるのみなのだ。だからアーテスは、ある意味で安心して剣を振ってきたのだが、あの時、風刃は「彼」を切った。頬にたった一線だったけれども、遠目にもはっきりと見えた。

イル？

驚いたアーテスは、咄嗟に背後を振り向いた。そこにはいつものようにイルがいたが、痛むように片手で胸を押さえて息を詰めていた。異変を察したらしいロンが先頭を代わる。アーテスはイルに駆け寄った。イルは口先でだいじょうぶだと言うばかりで、何を感じているのか……ほんとうに痛むのか、また妙な感覚に囚われているのか……を語らない。吸い寄せられるみたいに足を進めていく。

あいつか？

切られた頬を気にも止めないでこちらを凝視している、「彼」を指してアーテスは問うた。イルはちよつと意外そうにこちらを見、肯定なのか否定なのかはつきりしない返事をした。それで、今が最近の徘徊と似た自覚のない時間に違いないと思った。時が時だったから、殴ってでも正気づけてやらないといけないと思った。が、アーテスは考えたいずれの手も実行できなかった。

イルがこの世ならぬような不安な視線を据えた瞬間、「彼」が激昂した。敵も味方もなかった。その場のすべてを拒絶するように、一切を吹き飛ばしたのだ。

考えたのは、守らなければということ。

アーテスはイルを庇うように前に出て、剣を振り上げていた。それがいけなかった。剣に宿った力は呪術自体は退けたが、その衝撃が他に向かうのを止めることはない。

アーテスは、落ちた。と、思った。

実際落ちたのは、守りたいと思ったはずのイルの方だった。

圧はよほどの一点に集中していたのだろう。大地は広く挟られていたが穿たれた穴そのものは小さく、そのくせ深さは測り知れなかった。この土地に明るい者はひとりもない。ただ、不自然すぎる深い縦穴の様子から地下空洞の存在が推測されるばかりだった。

こちらから潜って行ける深さではない。無論、落ちた者が自分で上ってこれるはずもない。

イルの行方は知れないままだ。

「……分かってるよ」

長い沈黙の後、アーテスは低く答えた。

言われなくたって重々承知だ。最初から、自分にはイルを守ることもなかできっこなかったのだ。エンド皇帝さえはじめからイルに言ったのではないか。世間知らずのお嬢さんを、鼻っ柱をへし折られて帰ってくるまでしっかり守ってやれと。

改めてそう考えたら、また鼻の奥が熱くなる。

「分かってるけど……」

上ずった声での逆説の接続詞に、ロンが気に食わなそうに眉を聳やかした。

「けど？」

「あいつだって、自分の意思でここまで来たはずだ。でも分かんねえよ。あいつがやりたいことってなんだったんだ？ あいつは争わない。絶対人を傷つけない。自分の国を守りたいのとも違うし、自

分で言ってた呪術師としての義務感ともなんか違う。最近では知らねえけど、最初は父親を追ってきたかったわけでもなかったはずだ。それでも、あたしが誘った時は何も言わなかった。当たり前みたいについて来た。分かんねえよ。なんで」

「そんなの決まってるんだろ！」

しどろもどろの主張を、ロンはそこで断ち切った。怒りはもう隠されることなく声に乗せられている。

「知ってるのか？」

「分かるだろ！」

「なんだよ。はっきり言えよ」

「言わすな！」目を瞬くと、いよいよ怒り心頭の烈しきで罪もない幹を蹴る。「本人が分かかってねえのもむかつくが、お前が分かかってねえのはもつとむかつく！」

どうも自責していたのとは別の次元で怒られているようだ。では何に、と考える。言わすなど言ったまま、本当に何も言わなくなってしまうたロンを他意なく見つめると……出し抜けに、その顔が赤らんだ。

単にそう見えただけかも知れない。が、アーテスの思考回路もまた、そのおかげで出し抜けに繋がったのだった。

「そんなわけ」

「あるね」

ロンはたったの五文字でアーテスに察しがついたことを理解し、即座に被せてきた。それだけ彼の中でごく当然の、言うまでもない事実だったということか。

二十一にもなって子どものように不貞腐れ、こちらを見ないロン。
「……迷惑だよ」

濡れた頬を震わして、アーテスはにわかには浮かび上がってきた気持ちを出した。

「そんな理由で来られたって、責任負いきれねえよ。なんにもはっきり言わねえから全然分かんねえ。あいつ自身、多分分かかってねえ

し。ガキっぽいかと思うと全部見透かすみたいなこと言うし。へんてこだし挙動不審だししゃきつとしねえし……」

言っている内に次々飛び出してくる、不可思議な思い出。

幼い時は、その幼さゆえに分からないのだと思っていた。しかし、イルはもうすぐ十七だ。自分のことは自分で説明する責任がある。そうしないのは、イルがほんとうに自分のことを理解できずにいるからに他ならない。そんな人間を、周りが先に理解できようはずもない。

「お前の方が分かりやすい」

怒りに恥じらいと悔しさと焦りと憂いをひとつまみずつ足したような顔を、今度は敢えてじっと見つめる。

そこに明白な驚きと恐れが加わったが、アーテスは構わなかった。

「あたしには、お前の方が」

「何言い出す」

再び被せられた声は、先ほどよりずっと静かでありながら、先ほどよりさらに強い怒りを表していた。

「ほんとだよ。こんなのまっぴらなんだ。あたしのせいで、人ひとり、ど、どうにかなっちまったんじゃないかなんて。後から思うのなんかほんとにまっぴらだ。一緒にいる間に分かりあえないで、後からいくら考えたって、そんなの」

「滅多なこと考えるんじゃないやねえ、ばか。お前は待ってりゃいいんだ。待って、あいつが戻り次第蹴りの一発でもくれて、説教のひとつもかましてやればいいんだよ。あいつだって今ごろそのつもりで、必死に帰り道探してるよ。いつもどおりじゃねえか。何言い出すんだよ、ばかだな、ほんと……」

ばかだ。最後にとどめのばかを継ぎ足すと、それ以上言うことも尽きたようで、口を閉ざし、会話の意思がないことを体の向きで示す。アーテスは言葉を連ねるにつれ流れ出した涙を拭おうとして、今さら、自分がしっかりと両腕に抱えているアルトレットに気がついていた。

風の前11年 秋 未踏の地 青い右目

「いましたよ。ふたり」

アーテスとロンを連れてヨウが戻ってきた時、その表情があんまり冴えないのでカシーはちよつと面食らった。

「なに。アーテスと喧嘩でもしたの。この短時間に」

「当たらずも遠からずです」

「はっ？」

すげなく一蹴されるかと思いきや、遠くないとくる。後ろにいるロンも当のアーテスも、カシーどころかお互いも見ない。カシーは額に人差し指の先を当て、分かりっこないことをしばし考えた。

「そんなことより。どうになりました？」

「ああ、えと」

どこか関心なさそうに尋ねられ、おでこの上でぐりぐり回していた人差し指でカシーはある方向を指す。

「てこずってる」

そして様々な説明をすべてそのひと言に込めた。

カシーを先頭にして、四人は、第一大隊の術師たちが一夜を明かしたのとは離れた場所に向かう。精鋭部隊とはいえ距離を置くのは当然だった。彼らがそこで管理しなければならなかったのは、一匹の猛獣なのだから。

「いい加減にしなさいよ！」

とは言え陣を張ったわけではないので、隊員たちの寝床も猛獣の囿いもすべて青空の下にある。少し近づけば、そこで交わされる会話を聞くのは難くない……がしかし、その時間こえてきた声は少々はつきりしすぎていた。と言うより、明らかな叫び声だった。

二者の言い争いのようであるが、片方が異言語であるので一方的にしか分らない。

「そっちの言葉なんか知らないってのよ！ 無闇にしたら死ぬっつ

ってんのが分かんないの！」

一方的にもほどがあるので、カシーは挨拶代わりに指摘した。

「そりゃないでしょ、サザンさん……」

「なんでよ！」

「こつちが分かんないんだから、あっちだって分かんないんじゃないの？　うちの言葉は」

「……」医療班員サザンは、カシーと猛獣を均等に見比べ、「そういうこと？」

今気付いたと言わんばかりに声をひっくり返す。

「最初に言っただろうが……」

うるさいのがようやく収まったと、アマルナが息を吐く。

そして彼が羽交い締めを押さえ込んでいるのが、猛獣、ならぬひとりのセン族の呪術師。アマルナを腕力で退けようとしてめっちゃくちゃに体を動かしながら、しきりに何言かを喚いている。黒装束の下から露になった顔の右半分には、染み出した赤の生々しい包帯。左半分に浮かべた表情は、恐ろしく切羽詰まっていた。

セン族の顔をまともに見たことがある者は少ない。肌の青白いのは手先や頬などで知れていたが、髪金色や瞳の青には非常な違和感がある。この場の四人に至っては、その色合いは異国の民族よりもアーテスに馴染んだものである。

強気を感じさせながらも繊細に整った容姿が、ますます他人と思えない。

「女、だったのか」

初めてその姿を改めたアーテスが、呆然と呟いた。

顔が見えなかったことに加え、戦闘服の割にゆとりのある装いと大雑把で荒っぽい仕草が、何とはなく男性を感じさせていた。しかし目鼻や華奢な首筋は女性のものであるし、声を聞いてみれば、むりやり低く作ったような不自然な掠れを交えつつも、どうしようもなく高い。

「下手な男より余程体力があるよ」と、アマルナ。「目を覚まして

から暴れどおしだ」

「命がいらないのかね。言葉は分からんでも自分の体のことくらい分かるだろうに」

苦々しく言い放ったサザンの白服の前面には、包帯ににじんだのと同じ色が派手に散っている。時間を経た赤茶けた染みと、真新しい鮮やかな赤い点が混在していた。

「まー実際いらんのかーもねー」

生臭いのを単純に嫌っているカシーが、それを見て眉を寄せながら言う。

「助けたのはこっちの勝手。その人がいるかいらんかなんて聞いてないし」

「なーにを言うのかこの娘っこは。いらんいわけないから医療があるんだ」

「受けるかどうかは人それぞれじゃん。いいからそのカッコであり近寄らないでよ。ていうか着替えたらー？」

ぺっと舌を出す娘っこにそれ以上の議論をふっかけることなく、サザンは数秒猛獣の様子を見定め、ぷいと従った。

「落ち着いたら知らせてちょうだい。今処置したって無駄にされそうだからね」

「ああ。そうしよう」

アマルナが請け負うのを背中で聞き、さっさと呪術師たちのいる方へ消えていく。まだどこか冴えきらぬ表情でそれを見送ってから、ヨウが上司を氣遣った。

「アマルナさんも、少し休まれたらいかがです？」

サザンもそうだが、アマルナも昨日以来休息を取っていないはずである。責任上、危険物の監視を怠るわけにいかないとは言え、休まずそんなことをしていたらかえって集中力が切れて危うい。

「仮眠ならもらった。我々は三交代でやっているからな」

「て言ったって分単位でしょう？ 事後処理が挟まりましたもんね」予想どおりの返答にすかさず返す。

事後処理、というのは戦闘の後片付け。要するに、犠牲者の始末のことである。

それだけならば、いつものことと割り切るのも容易だったかも知れない。先日はそこに、あまりにも後味の悪い謎が残ったのだ。

巨大な篝火は夕方に起こり、星空と東雲と朝の薄青い空とを舐め続けた。術師たちはその炎の中に、決して解決されないその疑問を投げ入れて一緒に燃した。ひととき大きな力の衝突と、地響きらしいものが鳴り渡った後、いつそ弱腰にさえ見えていた敵が豹変したのはなぜだったのか。凄まじい剣幕でやたらに襲いかかり、こちらの反撃にさしたる抵抗もせずに屠られていったのはなぜだったのか。そしてそのすべてが、絶命と同時に砂のように細かく散って消えてしまったのはどういうわけなのか……。

恐怖にかられて目を閉じたまま突き出した凶器があっさり相手を貫く、そんな気色の悪い感触が、どの手にもこびりついて離れない。「眠れんのだ。気にせんでくれ」

事後処理に加えてそんな不可解な事象の調査に追われ、その上ひとり息子に行方を断たれては、さしもの年の功も敵わないらしかつた。

「お前たちが最後に対したのは、この女で間違いないのだな」

「と言われましてもねー。顔は見ませんでしたし」

「『輪郭』は同じだと思えますが」

カシーとヨウが口々に答えると、押し黙ったままだったロンが初めて開口した。

「そいつで間違いありません」

「あたしもそう思います」アーテスが同意する。「その右目、あと鼻の横のも……切ったのは、イルだ」

その言葉を理解したかのように、敵がまた何かを叫び出した。激しく体を揺すり、拘束を逃れようとする。包帯の赤が、水気を帯びて広がっていく。

四人はそれで、同時におかしなことに気がついた。

「そいつ、ダイレクトだったと思うんですが」

「そうなのだ」全力で動きを封じつつ、アマルナも首を傾げている。「術は使ってこない。一切な。だからお前たちを呼んでもいいだろうと思ったのだが」

「呼んでいただいたところ恐縮ですけど。どうするんです？　これを」

肩を竦め、カシー。

「事情を聞き出したいのは分かりますけど。通じないもんはどうしよもないですよ。筆談に応じてくれそうには見えませんか？」

アマルナはじめ上位幹部のほとんどは、文字でならイエンゼンの言葉を多少解すことができる。けれどこの手合いに敵の立場で紙とペンとを送っても、手ひどく払われるのは目に見えていた。

「だからと言って捨て置けるか。唯一残された手がかりだ」

「そうですけどー」

手がかりとは手がかかるから手がかりなのであって、つるつる滑って爪も立たないのではどうしようもない。

「筆談しか手がないのなら仕方がない」アマルナの声がつと緊張を帯びる。「どんな手を使ってでも応じてもらうまでだ」

南方隊の長には規律違反を許さぬ厳しさはあるが、叱るのにかこつけて感情をぶつけてくるような面倒がない。と思っていた分余計に、その響きは本気を感じさせた。若い部下たちは、まるで自分が叱られたように竦み上がった。

「……実はそーとーキレてると見た」

「同じく」

前列でカシーとヨウが小声を交わす。その後ろで、ロンも心中同意する。アーテスは、寝不足の顔にわずかな不快らしきものを浮かべた。どちらからも、言葉は出ない。

風の前11年 秋 未踏の地 呪術師と刀鍛冶

ヒカリゴケの光に目を凝らして見ると、刀身は広いが隅までよく手入れされていて、ひと目で愛着を感じた。

剣を大事にする人間に悪人はいない、というのはバンスの持論だが、イルの長くない人生の中では今のところ裏切られていない説である。

「どうですか。気分は」

丈がありすぎて自分には振り回せそうにもない長剣をぼうっと眺めていた目で、隣で踞る男をおずおずと窺う。イルがこの機で様子を尋ねたのは、彼がふと目覚めたからだ。イル自身はさすがに気が張ってしまって、浅い眠りをいくらか繰り返しただけで終わったが、男の方はまるで気絶するように眠りに落ちて、今まで一度も目覚めることはなかった。

殺されなかった相手を気遣うのは我ながら奇妙だ。

男も寝起きの頭で同じことを思ったのだろう、声に反応してこちらに向けた顔になんとも複雑な面持ちを浮かべている。

「急に倒れたから」イルはのろのろと言いつつ口にする。「心配せざるを得ないでしょ」

答えもないし、その他の反応もない。横目に目を合わせると、男は相変わずこちらに見入っている。

「……ハリバルですね。ちよつと反りがきついけど」

剣に話しかけるようにして、イルは言葉を置き続けた。

「本物を見たのは初めてです。使いこなすのは相当難しいって聞きますけど、見た感じ、かなり長いこと使い込んでるみたいだ……」

再び窺った表情が不思議そうな色を帯びているのに気づき、

「刀剣鍛冶なんです。手伝いですけどね」

造詣の理由を述べると、男からようやく言葉が返る。

「鍛冶？」

単なる繰り返しであつたけれども、イルはそれでいくらかも安堵した。

「……あなたが？」

問いかけには思わず苦笑した。

「そのところが、聞きたいな。あなたはいたい、ぼくをなんだと思ってるんだろう。ぼくに会いたがつてるっていうその人は、なんでわざわざぼくに会いたいんだろう？」

「それはあなたが」

男は至極あっさり答えようとして、ぎりぎりで踏みとどまった。頭を抱え、疲れ切った息を吐き出す。

「やはり危険すぎる」

「何がですよ」

イルはまた笑って、なんの気なしにハリバルを返した。男は驚愕のあまりすぐには手を出さなかった。

「あなたには危機管理能力がないのか」

「願望はありますが、能力はないですね。どの道、敵う道理がないです」

理解できないという沈黙で答えられ、長剣の柄をぎこちなく掴んだ左手をちらりと見、こぼす。

「右使いなんですよ、ぼく」

だから現状、剣を持っても意味がない。互い武器のない状況を作っても、力に訴えられたらどちらに分があるかは火を見るより明らかだ。

「……あなた、呪術使いでしょう」

「だから鍛冶屋ですってば。手伝いの」

剣を押し付ける。男は警戒する手つきでそれを受け取った後で、自分の剣の鞘も取り上げたグレートも傍らに置かれてあるのを見つ、また暫時両目を瞬いていた。

「なるほどね」 ほどなくして、ふざけたような声が言う。「要するに、私を荷物持ちにするつもりだ、と」

「間違いじゃないですが」

無闇にぶらさげていても、動きを鈍らせる不利益の方が圧倒的に大きい。グレートを取り返そうとしないのには、そうした思惑もなくはない。たとえ命がかかった場面に陥ったとしても、この右腕はまともに鞘を払うこともできないという悲しい確信があった。

「別に捨てて行かれても何も言えないです。でも、よければ持っていてもらえると思う。いちおう、それ、要返却なので」

できれば弁償は逃れたいという正直な気持ちを敢えて伝えてみると、男は存外即断で二本の剣を取った。敵であろうとしているが、基本的に親切なのだなとイルは見た。相手の行動の矛盾に内心首を傾げつつも、心から礼を述べる。

「じゃあ、行きましょう」

「どこへ、です？」

「ああ。だいぶ北へ逸れるみたいですけど、地上に通じる洞窟につながっているそうです。生きてる内にそこまで歩いて行ければ、出ることができますよ」

「……なぜ最初から言わなかったのです」

「だって。さっき聞いたんだもの」

聞きたいことは分かっているという声音を作り、イルはちよつと企みめいた瞬きをした。

洞窟運が悪いのは子どものころからだ、彼らと縁が深いのもまた変わっていないらしい。

「人によって見える時と見えない時があるらしいですが。今は見えませんか」

自分の膝の上を指して聞く。そこには、やや向こうが透けて見えるほどの色の薄いふたりの小人が、並んで膝を抱えている。

彼らスアンと呼ばれる種族は、エンドでは「魂喰い」と言われて恐れられている。人間の一種族でありながら、同じ人間であるヒトやエルフの魂を喰らうためだ。人の魂を喰うとはいったいどういう意味なのか、小さい時分に大人たちにひととおり尋ねて回ったこと

がある。結果、彼らが現れるところで人が死ぬからそんなふう言われるだけで、魂を食べるなんてことが本当にできるのかどうか誰も知らなかった。

「それは伝説上の存在です」

そんな話をすると、妙なことに、男は首を振ってそう断言した。

「人は百年前にはセンとトの二種を残すのみにまで減りました。センは西に、トは東にと別れてほぼ現在と同じ分布が出来上がり、それ以降変化はありません。スアンもハハラもフリーエンも、もう皆、伝説の住人だ」

スアンのひとりと指先を突き合わせながら……男には、イルがひとりで空中を指差しているように見えたろう……イルは感心した。

「へえ……イエンゼンではそんなふうに言うんですか？」

「東の人間はまだ彼らの存在を信じているのですか」

「信じるものにも……ぼくにはハハラの主治医もフリーエンの知り合いもいるし、こわーいエルフもたくさん見たし、何より目の前にスアン族がいるし」

驚かれたことに驚きつつ、イルは異種族の知った顔を思い浮かべて指を折る。彼らのほとんどはヒトとは別の集落を作って暮らしているが、事情なり目的なりを持ってヒトと共に暮らす者も少なからずいる。中でも秀でた能力を示して皇帝に召し抱えられた者たちが、イルの知り合いの主立ったところである。

「いないと言われても、いますとしか言えないな。ああ、「ト」つていう種族は、聞いたことないですけど」

「国の名に冠しているでしょう」

「え？」

「あなたが今我々の言語で思考しているのなら、分かるはずです」男は何かを探り出さんとするように声を落とした。「あなたの国は西から離れて行きながら、西の言葉で国を名付けているじゃないですか……トの国、エンドと」

言われて初めて、それらの言葉が繋がる。イルは素直に目を見張

ったが、その説には疑問を抱かざるを得ず、小人と戯れるふりで思案した。

勝手に自分たちだけで固まって国を造り、言葉を分かったのはイエンゼンの方であるはずだ。エンド建国時にはまだ、大陸中が現在のエンドで公に使われている言葉を等しく使っていたはずなのだ。

でも、と、思案は続く。

それは紙の上で文字が語ったお話に過ぎない。それは違うと言われたら、反論する術が自分にはない。

ひょっとしたら、別の国では。国でなくても、砂漠や北の山岳地帯なんかに行くだけでも、まったく違う歴史を語っているのかも知れない。周りに当たり前にいる種族を既に見ないものとしていたような差異が、歴史のあらゆる場面で生じているのかも知れない。

今日まで、そんなことは考えたこともなかった。教えられた歴史を、頭から信じていた。

「不思議な話です」

笑みかけながら、イルは言った。

「ぼくはスアンの言うとおりに歩いてみようと思っています。いないと思ってるものの案内で行くのは不安でしょうけど、もしついてきてくれるなら、道々、イエンゼンの話を聞きたいな。話せる部分だけで構いませんから」

男の大造りな顔が一瞬恐ろしい形相を浮かべてこちらを睨む。かと思うと、次第になんとも情けない形に歪んだ。

「呆れ返りましたよ」

どこか笑っているようにも見えるその顔は、言葉のとおりな感情をよく表している。

「呑気もそこまで行くと才能にさえ見えてくる。本当に危険極まりないですよ、あなた」

「だからその、危険ってどういう意味なんですか？」

「それは」

彼はまた、ぎりぎりで発言を踏みとどまったようだった。がしか

し、今度はそこから一步を踏み出した。低い声で、手探りするようにして。

「あなたに囚われて抜け出せなくなった人間を、私はひとり知っているのです。その方がそうだった理由が、あなたと共にいると分かるような気がする。だから、危険なのです」

「あのう……さっぱり意味が分からないんですけど」

「分からないで結構」

帯で締めた二本の柄にだらりと腕を預け、男は諦めたように分厚い肩を落とした。

「さあ。大陸の歴史くらいならいくらでもお話しますよ？　それこそ、一の世紀の第一年目からでもね」

イルはそれを聞くと、不明点を全部棚に上げて破顔した。受け手の表情はますます曇った。

風の前11年 秋 未踏の地 作り話の礎

時代の始まりから四の世紀の半ばにかけ十と四つにまで分裂した国々は、それを峠に徐々に統合されていく。最初に国土争いを抜けたのは、現ザフィアの流れを汲む三つの国。その後およそ三百年、残った国の間で戦いが続いたが、五の世紀の初頭、国境を越えた大転機が訪れる。単一民族国家イエンゼンが、世界中に散っていた血族たちを統合したのである。

「セン族の一部は選民意識が異常に強いですからね。自分たちが本来の力を合わせれば負けることはないと思っているのは今だってそうです。混沌の時代に民族を招集したのは当然と言えば当然……それまでまったく別の国の民として敵対していたことはさて置いてね」大陸中のセン族たちが西へ集められ、西にいたセンでない者たちは東へ追いやられた。東に集結した人間たちは恐怖する。センの末裔たちが本気で呪術を駆って戦場に臨んだとしたら、東側に勝ち目はないと。

なぜなら、セン族こそ、ヒトの最強の戦術「呪術」の生みの親だからだ。

「その恐怖が接着剤となって、東もまたひとつの国家となることになったのです。最後まで渋っていたハハラの国が併合されて完全にひとつとなったのが、七の世紀。以来、この大陸の戦争はたった一本の国境をめぐるものとなった」

聞きながら、一致しているな、とイルは思った。鍛冶場に預けられる前、宮殿の呪学者の長エンデルから叩き込まれた世界の歴史と同じだ。

当時のイルはまだ宮殿内の人間関係などまったく知らずにいたから、エンデルも単なる養父の知り合いの物知りのおじさんに過ぎなかった。今思うと、個人授業を受けるには少々贅沢すぎる相手だった。

「次の大転機は」

男が淡々と続けたので、イルは回顧を中断する。

「およそ百年前です」

百年前。それは忌まわしい惨劇の時としてしばしば語られる節目の年だ。

「ほんの十年前までは最後のハーターと呼ばれていた男の、逝去年です。それと前後して、セン族の一部が東へ渡っています。移動の理由は定かでないが……それが戦いが激化するきっかけになる」

イルは黙っていたが、必死で考えていた。八千年の歴史の端っこに、最初の相違点が現れたからだ。

二国は、歴史の中をたゆまず戦い抜けてきたわけでは無論ない。押しでは止まり、返しては休む。むしろ、その間隔が急に狭まったのはここ百年のことなのである。

けしかけてくるのは常にイエンゼンだった。だからだろうか、その理由がエンドには伝わっていない。百年の昔、前触れもなくと思われた彼らの攻勢には、何かきっかけがあったのだ。

先に続く言葉を、イルは待ったが。

「とまあ、お話できるのはこの辺りまでです」

「ですよね……」

近代史は得てして、国家機密を孕む。道連れになったとは言え仮にも敵対している国の人間に、おいそれとは語られないだろう。

「そうでなくても」が、男はさらに意外な意見を述べた。「本当の歴史は最初から最後まで、お話するわけにいかないことだらけですがねえ」

「本当の歴史？」

「今の話は、我が国に伝わる“歴史”という名の物語です。作り話ですよ。みんな知っています。知っていながら、それをあたかも昔あった事実であるかのようにふるまって、生きている」

少し高い位置にある横顔が、唾棄すべき現実を目の当たりにしたようにくつと歪む。

「イエンゼンとは嘘の国だ」

そんな顔を見れたことは、幸運な気がした。西の国の人間は、皆不気味なほど国家に忠実だ。そう聞かされていたから。

「今のお話は、だいたいぼくの教わった歴史とおんなじです」

前を向き、肩に乗った小人と指をじゃれあわせながら、聞いてみる。

「どういうところが、嘘だったんですか？」

「そうですね、たとえば」割合あっさり、答えをもらえた。「クライスが実は病死でなかったというのはどうです」

それも、割合近い年代についての例だった。ハーター・クライスは百年前にイエンゼンに生きた人間だ。名前こそ知られているが、他のハーターのように功績が口承されていないという謎の一面を持つ。また彼の死後今日に至るまで、救い主となる者がぼたりと出現しなくなったことから、最後のハーターと言われていた。世間に見てみると、イルはクライス以来のハーターとなるわけだ。

イルは、そんな例示をした男の真意が分からなかったのと、不完全な返答の補完を求める意味で、ちょっと細めた目で隣を見上げて見せた。しかし答えは、見たのとは逆方向から起きた。

「クライス、クライス。センノヒト」

からからに乾いた赤黒い血の染みの上に、白い人型のものはちょこんと座っている。なんの意図があるのやら、それはちょうど深手の真上だったのだが、不思議なことに……あるいは、彼らには重みというものが無いのか……それが痛みをもたらすことはない。

いつの間にかひとりになったスアンは、相変わらず膝を抱いた恰好をして、独特の詩を読むみたいな物言いで、言った。

「優シイクライス、ボクラ逃ガシタ。優シイクライス、ミンナ逃ガシタ。イエンゼン怒ツタ。クライス殺シタ」

「殺した？」

「なかなか察しがよろしいですね」

スアンに答えたイルの言葉に、男がいつそ不機嫌そうに返した。

小人たちの姿が見えないらしい彼には、声もまた届いていないようだ。

「なんで」右と左に視線を彷徨わせながら、イルは呟く。「そんなことが」

何故そんなことができたのか。

ヒオウ神は言ってしまったえば作り話だが、ハーターは現実にいた救い主だ。彼らを信仰する者に国や時代の垣根はない。イエンゼンでも、ザフィアに属する者たちにとってさえも、ハーターは絶対的な救世の象徴だ。少なくとも、社会の認識の上では。

「あなたたちにとっては、ハーターとは純粋な救い主なのかも知れませんが。われわれにとっては少し違う」

苦い顔のまま、男が答える。

「彼らは籠の中の神だ。籠の中に落ち着き、こちらから手を差し入れた時にだけこちら側に作用する。そうでなければならなかった。しかしクライスは籠から勝手に飛び出し、籠の存在に気付かずにした者たちにまでそれを暴きたて、鍵を壊して扉を全開にしたのです。処刑は当然の結末でした……ましてや」

横顔が、いきなり正面を向く。やはり色の判然としない目が、イルを貫く。

「籠の外で生まれた者の存在など許されようはずがない」

「それ……ぼくの、ことですか」

「他に何がありますよ」

だから探しているのか。現世のハーターを。

頭では理解できるが、やっぱりそれは誰か知らない人の話に過ぎなかった。はるかな昔の偉人伝が突然自分に繋がったことが、イルには現実味がなく不自然なことに思える。自分の名前は確かにイルオールなのだけでも、彼らが救い主の呼び名をくっつけて使うと、それはたちまち自分の名前でなくなるのである。

「ぼくは、別に」

知らないところでのいつの間にか嫌われていたのを知ったようで、

イルは少し悲しくなった。

「あなたたちに何かしたりとか、そんなことは思ってもないし……やろうとしたってできないだろうし……」

「あなたが外の世界で何を成して何を成さないかは、あまり関係がありません」

しょんぼりした子どもみたいな声を、男は無情に遮った。

「われわれの目的は、籠の中に神を置くことそのものです」

無情さは断固たる声の質に起因した。その意志が自身で述べた目的に対するものなのか、別の何かに対するものなのかは知れない。

イルは男のそんな様子に、また矛盾を感じていた。彼は自分を国へ連れ帰ろうとしている。先日はやり損ねていたけれど、ひょっとしたら最後にはクライスと同じように殺す気だっただけであるかも知れない。なのに、その目的を他ならぬ自身自身に話してくれる。さっき語った“歴史”のように、もしも作り話を並べているのだとしたら、イルに逃げ出す気を起こさせかねないこんな話はしないはずだ。で、彼が「われわれ」と呼ぶもの、イエンゼンの目的は分かった。では彼自身は、いったいなんの目的で今こうしているのだろうか？

風の前11年 秋 未踏の地 〽似た者同士の異見〽

「ユオもママの子ども。惹かれていくのも無理ないわ。でも不思議。ずうっと繋がり強いはずのユーシアが、拒絶を続けている」

ユリアは赤い円の外に立ち、その明滅に白い顔をなぶらせている。母の許可なくこの黒い部屋に入るのは初めてのことだ。呪いの陣はいつも、予め母によって宥められていた。ユリアが行くころには眠ったように静かで、むしろユリアが中央に立つことによって揺り起こされ、おっかなびっくり光を放つ。しかし今、陣は丸裸で、本能を曝け出した獣じみて荒々しかった。

「これが、本来のあなた」

今までおとなしく従ってきた主であるユリアを、まるで威嚇するような光の波。

いつも蝋燭を灯して回っている者がいないので、部屋の光源は呪いの赤い光のみだ。その中でいかにも愛おしげに微笑む美しい女の顔は、この世のものとも思えない。

「ねえ、あなたがユーシアを拒絶しているの？ ユーシアじゃ駄目なの？ 私を待っているの……」

いつもの場所に立たぬまま、ユリアは屈み、一番外側の線に手を触れた。

光はユリアを害さない。ただ形のない反発を感じる。この光は、この赤は、ユリアと相容れない。

陣を成す古い血が、ユリアに流れる血を許さない。

「……私も駄目なの」

言葉に反応したように、光が和らいだ。ユリアは一瞬沈んだ表情を浮かび上がらせた。

「優しいのね」

初めて会った、母の抑制を受けない赤い陣は、どこか胸の温かみに似ている。心地よいそれに浸って目を閉じると……右のそれが、

ずく、と疼いた。

それは、ユリアが温もりに浸ることを阻んだ。

「俺はどこからつつこみを入れたらいいんでしょうか」

小走りにやって来たロンが目当ての人間を見つけるなり呟くと、

「何も入れんでいい」

普段どおりの落ち付き払った老声で、アマルナは即答した。

服の暗い色の上でも見分けがつくほどの血糊と、それがまだ新しいことを示すにおいが、平常どおりに会話を始めるのを困難にしている。アマルナとてそれは同じで、ちょうど着替えようとしていたくらいだったが、見てしまった以上疑問を抱かざるを得ない。

「……了解」

今はしかし、誰の血だか下手に想像がづくだけ掘り下げたくはなかった。何より、一刻も早く伝えなければならぬことがある。

「何かあったか」

駆け寄って来た様子からそれは分かっているようで、着替えを止めた手のやり場をあちこち探しながら、アマルナの方から尋ねてきた。

周囲にはカイロとエルがそれとなく散っているのみで、隊員たちの声は遠くからちらほら聞こえるばかり。ロンはひとりで来た。仲間たちに伝えるかどうかを含めて、どうしていいか困ってしまったからだ。

どう切り出せばいいのかわからなかったこともあり、反応を窺う意味も込めて、ロンはそっけなく結論だけを述べた。

「イルは、無事だそうです」

アマルナだけでなく他ふたりの視線までもを集めることになった。

「……だそうです？」

ロン自身が意識して強調した部分を繰り返したのは、カイロ。だそうです、というのは伝聞表現であり、文字どおり伝え聞いた

情報であるということであり、それを知る他の誰かの存在を示すものであり……あり得ないのだ。

さらに言えば、そんな不確かな状態で、イルに関する情報をアマルナに報告するというのは、今この時に限っては不注意極まりない。いち隊長としてどう動くかはともかく、いち父親としての動揺は計り知れない。

三人の老人は総じて、ロンはばかな男ではないと思っている。これらを考慮した上で、その言葉を選んで報告してきたのだと考えると、導き出される答えはひとつ。だそうです、と付け足しつつも、ロンがこの情報をかなり確かなものだと思っているということだ。

「さっき、俺のところに」

相手がなんらかの結論を出して自分の次の言葉を待っているのを見て取り、ロンはゆっくりと続きを述べる。

「小人が、来まして」

三人の幹部は、今度は互いに視線を交わらせた。

言うべきなのか否か、ロンをして悩ませたのは情報そのものではなく、情報をもたらした者の方だ。白い小人は魂を食らう……：古くからの口伝である。時と場所によって、見える者と気付かず通り過ぎる者があるようだが、見たと言う者が現れたが最後。そこには必ず人死に出る。紛うかたなき不吉の象徴をこんな時に話題にするのは、いかに吉報を伴っているとはいえ、憚られた。

けれどロンは、口伝よりも確かなことを経験から知っている。スアンは嘘を吐かない。口調がそもそも謎かけめいて時に意味不明だが、恐らく、意図して駆け引きするという発想がまったくくない。単純すぎる子どものようであり、達観しきった化け物のようである。

惚けてとぼとぼ歩いていたひとりのスアンを、捕まえたのはロンの方だった。最初に気付いてしまった時は、ぞっとして動けなかった。が、ふと思いついたのである。あの妙ちくりんな幼なじみの弟分は、同じく妙ちくりんなこの白い小人たちと妙に馴れあっていた。加えて彼らには、ヒトとは違った大きなひとつの意識網を全員で共

有しているかのような、誰が誰だか拘りのない意志疎通がある。

そして、イルが消えたのは古い地下空洞、まさにスアン族が主な住み処としている場所だ。

ひょっとしたら、知っているんじゃないか。

思いついたらもう、行動に移していた。最悪の結果を断言される可能性がさっぱり頭になかったのは、焦りの現れと言う他ない。

「あいつはスアンの案内を得て、地上への出口に向かっていているそうです」

歌のような彼らの言葉を端的な表現に置き換え、報告を続ける。

「出口の場所も分かっているとか。所要時間はヒトの足で一日程度です」

と言っても聞き出せたことは多くはなく、すぐに打ち止まる。寸の間待ったが誰からも意見はない。

「どうするか、ご判断願いたく……」

仕方がないのでそう足して、ロンは直立不動のまま黙った。

立場に伴う責任が重くなればなるだけ、人は思考を長くもしくは深くする。しかしこの時ばかりは、連隊長の第一声は早かった。

「私たちは、何を頼りにその話を信用すればいいのだ」

「はあ……」

それを言われると辛い。

小人たちが彼らの目にも入れればいいのだが、そううまくは運ばない。実際見たのはロンひとりで、一緒にいたヨウには何も見えていなかったし、アーテスとカシーは別行動をしていたから、他に証人もない。ヨウが、普段他の者には見えないものを見るくせに今回ばかり節穴なのには、理不尽と知りながらかすかな怒りも湧いてくる。「頼りと言えるものは、ありません」手を後ろに組み、ことさら背筋を伸ばしてロンは言い切った。「ないのに言いに来たってところで、信用して下さい」

「大した自信だな」

小憎らしそうな呟きを落とすと、腕を組む。

ロンはこの男とはなんだかんだと長い付き合いだ。相手の方にはこちらが生まれたばかりのころから知られている。こちらは何しろ生まれたばかりだったものだから、もう少し後からの記憶しか持っていないが、七癖を把握するにはじゅうぶんな年月の情報がある。だから、彼が本当に熟考し、複数の選択肢からひとつを選び出そうとしているのか、それともただ必要な間を確保するために黙っているだけなのかくらいは、分かるのだ。

今、確実に後者であると踏んだロンは、上司の心情を今さら痛感した。いつもなら、もっと熟慮を重ねる。どんなに難しい局面でも、それこそ同じ部下の片方を確実に見殺しにしなければならないような決断を迫られてさえも、動揺を表面化させない。アマルナはロイセンという土地に足を踏み入れる時、情の一部を祖国に置いてきたのだ。

それが丸ごと、届けられてしまった。約一年前に。

ロンの胸次には、子どもたちの出来事が、ちょうど目の中に差し込んでどうしても避けられない夕日の光みたいに差していた。それはイルがロンの仲間に入ったその日の出来事だ。片言だったイルのとびっきりの笑顔に、それはなぜだか切り離しようのない肉の一部のように括りついている。南方隊長と呼び習わしておおいに恐れていた男の、見たことのなかった類の表情。

今にして思えば、孤児としての葛藤の最中にあつた少年ロンには……はつきりと説明はできないまでも……一瞬で感じ取られてしまったのだろう。それが、今まで持ち得なかったものを持った者の、充実の表情だということが。当時、幼いイルが保護者としての大人を必要としていたのは事実だし、健全な家庭が健全な成長のために望ましいというのも事実だったけれども、同じくらいに、アマルナの方でも身内となる存在を必要としていたのに違いなかった。彼もまた、血族縁の薄い人生を生きてきた人間なのだから。

今だに親や子というものを知らないロンは、あの時のこの男の表情を思い出すと、たまらない羨望に駆られる。同時に、恐ろしくも

なる。

家族とは、こうも人を脆くしてしまうのか。

「行って来い」

「……は？」

「対^{ユミ}の他にも、好きな面子を選んで構わん。一日と言ったか、行き違いと余裕を見て四日間は待とう。物資の面でもそれくらいが限度だ。それまでに戻らない場合はもろともに置いて帰る」

ロンは返事をし損ねた。

「……隊長は」

しばらくしてからぼそりとそれだけ尋ねると、思いの外、背後のふたりの方が苦笑する。

「ご覧なさいよアマルナさん。彼の目にもそう見えるということですよ」

「彼は聡い子どもですからなあ。加えて、知り合って長い」

「お前に案じられるようになるとはな」アマルナはいつそ心外といった様子で、肩を落とした。「私も歳を取るわけだ……いくらなんでも、隊を投げ出したりはせん。それくらいの自制はきくつもりだ。このふたりも黙っていない」

隊を預かる立場としたら当然のその選択が、ロンには極めて不自然に思えて、かえって信用がおけなかった。

「分かるよ、お前が考えそうなことは」

すると、アマルナの方から思いがけない言葉がある。

「不思議と似通っているからな、お前と私の、境遇というのか。持ったことがないから、持ってみたらさぞかし重いのだろうと想像を逞しくしてしまう。だが、まあ、だいじょうぶなんだよ。そう心配することはない。人間は、慣れる。最初は確かにずしりとくるが、持っている内にな、重さが変わるのではなくて、重さに慣れるのだ。それにな、ずしりとくると考えるぞ。この重みに耐えかねてそれまで持っていたものを放り出したとしたら、自分は本当にこいつに潰されるんじゃないかと。結局、天涯孤独と思っていた身の上にも、

何かしらの支えというのはついているものなのだと実感した……お前も大将なら、分かるだろう」

ガキ大将と帝国軍の連隊長とではわけが違う。それに、いささか若すぎる若気の至りとも言うべき、孤児院での来し方を引き合いに出されると、ロンの頬はちよつと赤らむ。けれど、アマルナの言わんとするところは、悔しいことにすんなり腹に落ちた。血の絆にはさっぱり縁がない代わりに、てっぺんに祭り上げられてたくさんの仲間を得ているようなところが……彼も言ったように……不思議と似通っているからなのかも知れない。

「了解」右手を左肩に当て、隊長の命令に沿う。「対^{ユミ}の他に、ヨウとカシーをお借りします。ふたりきりでは危険が過ぎるので」

「ああ。そうするといい」

他に命令もなく、聞くべきこともないことを目で確認すると、ロンはくるりと体を返す。一步を踏み出す前に、やはり気になって口を開いた。

「隊長」

「なんだ」

「どうなっただんです？ あの……猛獣」

「ああ」

最初にこの場に駆けつけた時からをはるかに和らいだ表情で、アマルナは唸るような返事をし、情けないように肩を窄めて自分の恰好を眺めた。

「心配するな。殺しちゃいない」

「……そうですか」

ロンは、もっとも無難な返答を選んで、その場を辞す。

アマルナの言わんとするところは腹に落ちて、その行動から察せらるるものはやはりロンを臆病にする。アマルナは最終的な一線を越えることについては自制しているかも知れないが、かつて自分で引いていたはずの線はとっくの昔に踏み越えて、それに気付いてもないようだった。

風の前11年 秋 未踏の地 望むもの

ロンが選り出した仲間たちに事の次第を告げ、日の高い内に少しでも距離を稼ごうと準備も迅速に出かけていった、ちょうどそのころ、ユーシアは痛みによって失った意識を痛みによって取り戻していた。

一度落ちたせい、頭は先ほどよりひんやりして、物事が冷静に見えるようになっていた。ぐらぐらする頭を支えた右手が、ぐっしより濡れた包帯に触れ、失ったものを強烈に意識する。失った瞬間に起きていたこと、その時の自分でも驚くほどの感情の振れ幅を、ようやく過去のものとして想起する。

どこだ。

記憶を辿って現在に行き着くと、ユーシアの胸を占めたのはそのひと言だった。

早くあいつを探さなければ。探し出して、そして。

そして、どうするのだろう。

思いつかなかったが、とにかく探し出さねばならない。「あれ」を、放っておくのは怖い。けれど消し去ることなどともない。ただ自分の見えるところに囲っておきたい。

目を閉じて意識の内側を確認すると、いつの間にか呪術の使役は許可されていた。ユーシアの呪力はユリアから供給される。なんの理由があつたのか心当たりもないのだが、ユリアが突然それを断つたのだ。おかげで奇妙にしなを作る白衣の男に好き放題ぐるぐる巻きにされても、その後の諸々の不本意な扱いにも、なんら報復できなかった。それが、再開されている。

彼の身の自由を封じているのは、ありふれた縄の類。施された呪術は子どもの遊びのように弱い。これなら、説き伏せるのはそれこそ赤子の手を捻るより容易だ。少し離れたところにふたりで立っているのが見張りのつもりだろうが、東の呪術師など負ける気はし

ない。

許せない、とユーシアは感じた。

こんなにも弱々しい術式しか操れない人種が、下らぬことで自分を足止めする。一刻も早く「あれ」を囲い込んでしまいたいのに、大した考えもなく時間を浪費させる。

邪魔だ。

お前らのような弱者の出る幕は、とっくに終わっているのだ……！

ユーシアはほとんど無意識の所作で、呪縛を解いた。異変に気付いたふたり組が、色めき立つ。

「ロンに？」

イルが嬉しそうな声をあげたら、隣の大男は律儀に怪訝そうにして視線をこちらに向けた。何しろ彼にはイルの話し相手の声がまったく聞こえていないので、唐突に叫び出したようにしか見えないのだ。

「なんです」

「あ、すみません。この子が」イルは右肩の上を指差して、左を歩く男を見た。「ぼくの、友だちと会ったって言うから」

友だち、などという平和な単語にか、男の野暮ったい唇がむずむずと動く。

彼は育った国の言い伝えからスアン族の存在を否定したのだが、イルが主張する存在はどうやら認めてくれているようだった。一人芝居に妄想を続けているとは思ってくれている。その理由の一端は、イルの言うとおりに進んだことによって、確実に足許が上がってきているという事実かも知れない。

「よかった。無事だったんだ。あれであの後どうなったか、ちょっと心配して……」

予想だにしないところから欲しかった情報を得て、イルはおおい

に胸をなで下ろし……足をもつれさせて転びかかった。

「安堵も度が過ぎるとただの刺激だ」

いつものように体を平衡にできないのに驚いていると、見かねたらしい仕草で左の二の腕を掴まれる。

「丈夫なもんだと感心していたのですが、やはり無理がきていますね。歩きとおしてそろそろ半日は経つでしょうし」イルには分からない体の感覚のみで、時間を推測する男。「あなた、少々失血なんですよ。どれだけ休憩しても飲まず喰わずでは補えない。死にたくなかったら適度に気を張っていないさい。他にどうすることもない」しれっと難しいことを言われ、ただでも頭に力が入らないイルは難しい顔で隣を見上げるしかなかった。

「気を、張る？」それも「適度」に？」

「張っていても本当に血が足らなくなれば死にますよ。飽くまでも最大限延命するための原始的手段です」

男は腕を支えたまま目を逸らし、夢も希望もないことを付け加える。イルは自分でも気付かぬ内に陥っていた命の危機に嘆息した。昨日今日と、どうも星巡りが悪いようだ。

「そちらの方によると、道のりはあとどのくらいです？」

「え、と」

左からきた質問を右へ流すと、

「アト？」

白くてまん丸な頭はこくと向こう側へ傾いてしまう。

「ハンブン？」

「疑問形？」

どうも彼らは、全体に対する己の位置だとか、そういう相対的なことへの関心が薄いらしい。ヒトの使う時の刻みなど使っているわけもない。

「まあいいです」

そのまま伝えると、男はさっさと質問をひっこめた。

「私も、あなたに死んで欲しいのか生きて欲しいのかよく分からない

い。先の分からない運命に任せておけるのなら気が楽だ」

返事に困ったので、イルは黙っていた。この男は、今自分が何をすべきなのか、なぜ今みた様な行動をしているのか、自分自身でもよく分かっていないのか。

「あなたは、生き残りたいのですか」

「え？」

不意をつく質問が、相変わらず相手の内側を読み取ろうとする自分自身を客観的な現実に取り戻した。

「生き残りたいか……？」

馴染みのない命題を思わず口にする。うかがえば男はただじっと真剣な顔をして、答えを待つ所存を表明している。薄青い静謐な光の中でそんなふうになされては、凄みのあることこの上ない。

「生き残りますよ、そりゃ」

「生き残る？ 残りたい、ではなく？」

「……ちっちゃい差じゃないですか、そんなの」

「お付き合い下さいよ。それに、喋っていれば気が散って、死ぬのを忘れておけるかも知れませんよ」

「なんですよ、それ」

すると男は、存外つかかった。実にけしからんとも言おうような目をして、責める口調で言う。

「最初、あなたは剣をつきつけてもまったく恐れませんでしたね。」

何か別のところに興味があるようだった。その後も、一度自分を殺そうとした相手に警戒する様子がまったくなくない。あなたがそんなでは、私は」

「……なんですか？」

飲み込んでしまった言葉を吐き出すよう促したが、続きを聞くことはできなかった。男は、自分の中でも整理がつかぬといった落着きのない視線を、ひとしきり天井や壁に彷徨わせる。

「別に、隠すことでもないから、いいですけど」

イルは仕方なく、真面目な回答を用意しにかかった。自分の所感

を文章にしようとするごと、現実の客観性が加速度的に上がっていく。

「ぼくは、ね」

離れたところから、イルは自分を語る。

「友だちが、人と死に別れると悲しんだり自分を嫌ったりするから、死んだりしませんよ。でも、それなしでどうかって言われると、別に、何も無いんですよ。自分が生きるとか、死ぬとか、そういうこと、あんまり考えたくないんです……なんで考えたくないのかとか、ほんとに考えたくないのかとか、もう、いくら考えても分からなくて」

少しずつ遠のいたり近づいたり揺れる足許から、ちよつと目を上げてみる。男は何も挟まず、最後まで聞き届ける所存を表明している。

「人が時々ぼくの考えを聞くけど、ぼくは、聞いてくれなくて構わないのについて、いつも思う……みんなの方から、決めてかかってくれて構わないと思う。そうしたらぼくは、ああそうなのか、と思つて、そのとおりに行動すればいいもの……」

唯一、イルがどうしても避けたいと望んでいるものがあるとしたら、それは痛みだけだ。寂しさという痛み、悲しみという痛み、自責も後悔も怒りも恨みも、全部。それらが人の中に起こることは、どうしても避けたいと思う。

「だから、基本的には死にたくないんですけど」なんだか恥ずかしいような気がしてきて、イルは声を落とした。「この前みたいに、目の前の人がそれを望んでると、こう……ね」

最後まで聞き届ける所存を表明していた表情は、最後まで言い切っても固まったままだった。イルはそれ以上何も足さず、引かず、相手が自分の中で今言ったことを消化していくのを待った。

最初は勝手気ままに広がったり狭まったりして、時に這うようにして抜けなければ通れないような箇所もあった洞窟道は、地上に近づくにつれて大人しくなっていた。今は、足許こそ傾いているが、

立って歩くのに不自由はない。地滑りでできた隙間ではなく、地中に埋まった溶岩の道が長い間に侵蝕されてできた空洞なのだろう。

もう少し、もう少し。繰り返し唱えながら、イルは一步一步を慎重に踏み出す。

みんなが無事だと分かった以上、ぼくも無事に帰り着かなければ、悲しみや苦しみがまたひとつ生まれてしまう。それだけは駄目だ。ちゃんと再会して、いろんなことを、説明して、謝らないとならない。殴られる用事もひとつ残っている。ああそして、先生にも元気な姿を見せてあげないと。きっと心配している。誰よりも心配してくれている。そんなことを、胸の中に繰り返しながら。

男は深く考え込みながらも、変わらず腕を取って支えてくれた。イルの歩き方がよほど危なっかしくなっていたのか、あるいは深慮のあまり手放すのを失念しただけか……何をそんなに考えているのか、イルがそれを尋ねることはなかった。互いの立場も忘れてしまいうようなほどに饒舌だった時間は終わり、スアンの言うアトハンプンを、ふたりは黙々と歩き続ける。やがて最後の分かれ道に達し、ヒカリゴケの灯りがもっと強い光によって次第に輝きを失っていく。長い事薄暗い場所にいた目にその光は痛いほどだったけれど、それでもイルは痛みの何倍も嬉しかった。

地上に出さえすればと自分を励ますあまり、その後のことは何も案じていなかった。

風の前11年 秋 未踏の地 〱 未踏の集合地〱

「ああ、太陽だ」

いったいどれくらいぶりなのだろう。日は真上のようなだが、最後に見てから何巡後の真上なのかは知れない。全体先が読めなかったから時間の感覚は相当に引き延ばされて、何日も暗闇に閉じ込められていた気分になった。林の中の岩山にぽっかり口をあけた洞窟から出ると、イルはいっぱい体に伸ばした。

「本当にだいじょうぶなんですか、あなた」

が、この喜ばしい時に、男の顔色は冴えない。

「暗くて気付かなかった。ひどい顔色だ」

顔色の悪いのは自分の方だと指摘され、イルは微笑んで首を振る。「平気です。あとちよつとでみんなと会えるんだから」

洞窟の中では、本当に自覚がなかった。しかし今、イルの体力は自分でそうと分かるほど限界に近づいていた。息が浅い。手足の先が異様に寒い。健康だった時でさえサザンから「顔色悪い子ども」と言われたイルは、今この状態で色艶が良かろうとは自分でだって思えない。林の木々は気が早く、実をつけたものはないし、折り重なった枯れ葉の中にも茸やヤマタケの姿はないし、つまるところぱつと見渡した限り栄養を補う手段がない。

ならば休んでいるより、進んだ方が絶対がいい。

「ありがとう。おかげで外に出られたよ」

右肩に礼を言うと、小人はおかしそうにきやつきやと笑った。こちらが礼を述べると、彼らは何故だかとてもおもしろがる。と思うと急に肩の上で立ち上がり、ふわっと宙に飛び出した。

「アト、ハンブンノハンブンノ、ハンブン！」

「え？」

頭の上に小さな円を描きながら、スアンが不思議を言い出す。

「半分の半分の……なに？」

「ハンブンノハンブンノ、ハンブンノハンブン！」

どうやらものすごく短い期間を言いたいらしいと、イルは当たりをつけた。が、何への期間だか分からない。もう道案内は終わったのだ。

「ミンナイルヨ？ ミンナイルヨ？」

ふたつの目をくりくりさせて、嬉しそうに繰り返す小人。いつしか、ひとりだったそれは三つに別れている。ひとりが何か言うのをあとふたりが補うように、声を重ねていく。

「イルオール、外出タカッタ？」

「ミンナト会イタカッタ？」

「外出タ」

「ミンナイタ」

「会イタイ？」

「助ケタイ？」

「助ける？」イルは三つの白い人型が形作る円を見上げ、声を強ばらせた。「みんなって？ ということ？」

小人たちはまた、こちらが言葉で何を言おうが、こちらの腹が決まりさえすれば言葉で答えることはない。みんなというのがロンたちではないかと思ったら、イルは一瞬で連れて行って欲しいと心を決めた。その瞬間に、小人たちは円を崩して飛び去った。イルは即座にそれを追いかけて、膝から落ちるみたいにして転んだ。むりやり立ち上がり、むりやり走る。男の制止が聞こえたが、構わない。

スアンの言葉からロンが算出した行程はおよそ正確で、徒歩一日で話に聞いた地形と一致する場所へ行き着いていた。洞窟の出口らしいものを探して、四人は周囲を調べた。もしくは、イルはもう脱出していて、この辺りにいるかも知れなかったから、その姿を探しました。その作業はいずれも半ばで中断させられた。

一番はじめは、ヨウがひゅつと息を呑む気配。カシーもまた何か

を感じ取って顔を上げ、アーテスが不思議そうな顔で同じようにした。ロンが鮮烈な『輪郭』の存在に背筋を凍らせたのと、それを目視したのと、ほとんど同時。それは正に忽然と、その場に生じたのである。

「お前……？」

自然アーテスを背後にする位置に立ちただかつて、ロンは見開いた目でそれを観察した。実際、じっくり観察するまでもなかった。その無造作に短く断たれた鮮やかな金髪は、記憶に新しくもあり、くつきりと焼き付いてもいた。

林の見通しは決して悪くない。だいたい呪術師の接近に、呪術師が三人もいて気付かないわけはなかった。どうやってここまで肉迫した、そもどうやって逃げ出してきた、湧いて出る疑問を転がすことも言葉にすることもせぬ間に、相手の方が首を傾げる。

『あれ。ちよつと早すぎたか』

何を口走ったのか、意味は分からなかったものの、そこには最初に戦った時の忘我の様相はなかった。逆に、恐ろしいまでに冷静で、現状をひどく嘆いているかのような皮肉っぽい笑みさえ浮かべている。解けなかった包帯が、その表情にべったりと張りつく。

『まあいい。どの道、掃除は必要だ』

四人がその笑みから不穏な何かを感じ取ったその瞬間、別の方向からまたしても忽然と、別の『輪郭』が発生する。何がどうなっているのか、皆混乱を来すばかりのところへ、

「ロン！」

現れた者が叫ぶ。

「皆を連れここを離れろ！ 敵う相手ではない！」

「カイロさん？」それはこんな場所にいるはずもない上司の姿であった。「なんです、何があっただんです！」

「命令に従え！」取り乱すロンを、共に現れたアマルナが一喝する。「死にたいか！」

その一部の隙も許さない緊迫感と、エルの姿がないことが、ロン

の脳裏に最悪の筋書きをはっきり提示した。

猛獣は解き放たれ、某かの手段でここまでやって来た。追って来られたのが、連隊長とカイロのふたりだけ。それは、即ち。

「ほらね。気になっちゃうんだから、ユーシアは」

黒い部屋、赤い光の中央に立ったユリアは、自分の許可なく入室してきた者にいきなりそう言った。悪い足を上体で引っ張るようにして、杖をついて入ってきたのはクフリラだ。

「……何をしていますのです」

母は娘に、かつてない感情のない声をかける。入り口に向いている背中を返し、赤い光の立ちのぼる闇の中で、ユリアは極上の笑みを浮かべた。

「ユーシアが、とうとう近くへ辿り着いたの。ねえママ、じつとじていられる？」

「ここへは勝手に入ってはならないと」

「言ったでしょう？ 関係ないのよ。ユオはもうもとのユオに戻っちゃった。ユーシアも駄目になっちゃいそうだったけど、やっぱり気になっちゃった。ママ、ユーシアはもう命令には従えないわよ。あの人、セントラと一緒に消える気だもの」

扉の前に立ち尽くし、クフリラは言葉をなくしている。ユリアは呪いの光にも劣らぬ輝きを無遠慮にまき散らし、喜びのあまり早まった口調で、ママ、と繰り返した。

「言ったでしょう。好き勝手動き出したのよ。ママだって同じじゃない。彼の前ではね、だあれも自分の欲求を隠してなんかいられないの。だって、だってね」

狂ったような幸せに満ちた声が、そっと大切な秘密を告げる。

「みんな受け入れてもらえるんだもの」

「……ユリア、いけません」

「人は受け入れてもらえないから我慢しているの。受け入れてくれ

る人の前で、我慢なんかできないし、しないのよ」

「ユリア！」

ユリアが何をしようとしているか、今となっては明白だった。クフリラはとうとう手を差し出しかかったが、届くはずはない。赤い陣の中はこちらとは別の世界。ジロンにいてそこに立ち入るのは、ユリアだけだ。

「ばいばい、ママ」

ユリアが再び背を向けて、肩越しにひらひらと長い指をひらめかせる。

「生んでもらってほんとに嬉しいわ」

その言葉は、心からの感謝と喜びとに満ちている。

それを最後に、クフリラの目の前でその姿はかき消えた。

風の前11年 秋 未踏の地 朝の来ない夜へ

イルの目に最初に飛び込んだのは、金色の髪だった。目に馴染んだ懐かしい色であるはずのそれが、おかしなことに、不穏な輝きを帯びて刺々しく見えた。その向こうに焦点をずらすと、果たして、そこにはロンの幽霊でも見たような顔があった。

先導の小人たちが急に高く舞い上がって、裸の木々の枝に止まった。イルはそこで、足を止めた。やっとみんなに会えても、それ以上近づくことも、名を呼ぶことさえできない。その光景は、ただごとではなかった。

カシーとヨウが倒れている。アーテスは無事なようだが、それを必死にかばっているロンはいくらか怪我をしている。そして、ロンたちと、金髪の呪術師と、どちらからも等しい距離を取った場所にカイロを伴って養父がいた。父は、イルが自覚しているのと同じひどく驚いた顔で、こちらを見返した。

かさかさに乾いた葉を踏みしだいた音ではなく、仲間たちの表情の変化に触発されて、金髪の頭がこちらへ翻った。

黄金の前髪の下に、真っ青な瞳。顔を合わせたのは初めてだったが、それがあの日の「彼女」であることは明白だった。思わず、きれいだと思ってしまう。それはイルに太陽を想起させる色なのだ。

「……ああ」

しかしその青は、ひとつきりしかない。

「よかった。無事会えた」

よかったと言っているのに、その顔はちっとも嬉しそうにはならない。イルは眉を顰めた。

「ぼく？」

「そうだ」

彼女には先日初めて会ったくらいで、探される謂れはない。もっとも、ひと目も会ったことのない誰かに探されていることが、同じ

日に明らかになったばかりだが。

「なんなんだよ、あんたたち」

イルの声は激しい感情のあまりかえって極小に縮こまって、ぎりぎり相手に届くかどうかというほどだった。次の言葉を口に乗せた時には、自分でもどこから出したのか不思議なくらいの、これまで扱ったことのない声が出る。

「なんでこんなことをする！」

「……なあ」駄々をこねる弟を見るように、女は苦笑した。「こいつらが先に邪魔をしたんだぜ。俺はそれをどかしたただけだ。あまりに脆いから、ちょっとひどいことになったけど」

彼女はいったい何を言っているのか。澄ました顔でみんなを傷つけて、言うに事欠いて。

「何言ってるんだ。攻めてくるのはいつだってそっちじゃないか。邪魔するのは当たり前じゃないか」

イルは混乱し、いやなものを吸い込んでどうしても吐き出せないみたいに、つかえつかえ呟く。

彼女もまた、ジフォイラと同じ不可解な存在だった。それも、二者に増して症状が著しい。鏡なんてありふれたものでは表現できない、まるで自分そのものに会うような感覚が、気持ちが悪い。分かんなくて、怖い。

「ぼくを探してるってどういうことだよ。いったい、何がしたいんだよ……」

「いいぜ、教えても」女が顔の向きに体を合わす。「つうか教えに来ただけだな。お前と一緒にやってくれなきゃあ、意味がないから」

さく、固い靴底が落ち葉を踏む。一步、二歩、女はイルに歩み寄る。父がイルの名を叫んだ。イルは、近付かれるに任せた。

お互いからあと三歩ずつ歩み寄れば手が届くかという距離で、女は止まった。こうして向き合くと、目の高さや体つきなどがそっくりなのが分かる。

「俺はユーシア」女の口に、ふと親しげな微笑が浮かぶ。「お前は？」

「……イルオール」

「ああ！ やっぱりだ！」

ユーシアは上機嫌だ。向こうで身動きのとれない仲間たちが、父が、気味の悪い嬉笑に体を強ばらせる。

「ほらな、ユオ、言ったとおりだ！」それはまた、新たにこの場に加わった者への警戒でもあった。「見ろよ、どう見たってセンじゃないか。おかしいったらないね。東のやつらは何も疑問に思わないのか」

自分のさらに後ろに語りかけているふうに、イルは慎重に前を気にしつつも振り返った。

深い地下からここまでの道のりを共にした男が、追いついてきていた。彼もまた眼前に広がった情景に驚き、ユーシアと名乗った女が存在に驚いている。

「……ご無事で何よりでした」

「無事？ 無事に決まってるだろう！」

男がようよう述べた口上を、ユーシアは一転不機嫌に突っぱねる。「俺が東の蛮族どもに遅れを取ることがあるもんか。ふん、お前はそれで、やっぱりユリアに忠実にこいつを連れて帰ってきたわけだな。お前はいつもそうだよ、結局そうなんだよ。だがな、俺はもう限界だ！」

そこに世界でもっとも気に食わないものが浮かんでいたかのように、ユーシアは片腕で胸の前を薙ぎ払う。

「なあ、教えてくれよ、ハーター・イルオール。お前は どうして エンドにいる？ セントラは……お前の一族はどうなった？」

「ぼくの、一族？」

「まさかエンドで生まれたわけじゃないだろう。それとも、はは、覚えてないのか？」

覚えていない、というのは本当だ。けれど、生まれた土地の名な

らば聞いている。

エリカは、滅んだ。イルはそこでひとり残っていたところを、アマルナに拾われて一命を取り留めたのだ。

「生まれた場所は、もう、ない」反応を恐れるような声音で、イルは言った。「元々の家族がいたのかどうかも覚えてないよ。ただ、少なくともぼくの周りには……同郷の人はひとりもない」

「だろう」

理由の分らない満足の内にユーシアがひとつうなづく。

「教えてやるよイルオール。お前はそっちにいたべき人間じゃない。俺たちが先祖代々百年間、探し続けた西の血筋だ！　けどな、俺はそんなことには興味がない。今さらお前を国に連れ帰ったって、ひとつもいいことなんかない。俺はただお前に消えて欲しい。十年前から消えて欲しくてしかたなかったよ。なのに、ちくしょう、今は消えられるなんて耐えられない！　お前のない世界に俺だけ残るなんて、もう考えられない！」

「ユーシアさま」背中から、男が唸るのが聞こえる。「あなた、まさか」

「だからさ」

ひとつだけの青い瞳から一筋、こぼれ落ちたものが頬を伝った。唇は笑っているのに、その目は凍てついた水の溜まりのようだ。イルはその時、いっこう分からなかった彼女の内側を感じ取った。瞬間的に、けれどひどく激しく。

なんて冷たいのだろう。

感覚の余韻にさえ、凍えそうなほどに。

「一緒に、消えてくれ……」

その要求を、思わず吞んでやりたくなるほどに。

ユーシアが、引き寄せられるみたいにして距離を詰める。他には誰も動かない。イル自身も動けない。イルは目の前の悲しみに縛り付けられていた。彼女が流したたったひと粒の悲しみのために、それを打ち消したい衝動のために、ただ彼女を受け入れることしか思

い浮かばない――。

「イルオール！」

イルは突然、名前を呼ばれた。そう、それは自分の名前だった。何か別のものを表す記号ではなく、自分を示す特別の名前。なぜそんなふうに感じたのかは、すぐに分かった。呼んだのが他でもない父だったからだ。

急に取り戻した自意識が、すぐ目の前に頼りなげに伸びてくる細長い腕を認識する。反射的に、イルは叫んでいた。

「アーテス！」

まるで呼ばれるのを待っていたみたいに、アーテスがイルの力を行使する。今にもイルの首筋に触れんとしていたユーシアは、はっと飛び退いた。彼女とイルの間を、鋭い風が吹き抜ける。アーテスはロンの背後から飛び出し、素晴らしい身のこなしで間合いを制して二三追撃を加える。最後に両者を引き離したのは、禿髪のユオだった。心ここにあらずのユーシアとアーテスの間に割り込み、アーテスの剣を長剣ではね除ける。

アーテスはそれをやっとして受け流し、後ろざまに飛び跳ねてぴたりとイルの隣に着地した。

「お前」途端、ぎょっとして叫ぶ。「なに、その血」

「服の、柄」

アーテスと同じ言葉を操るのが、不思議な感じがした。

「ごめん、アーテス」イルは初めて、イルの方から申し出る。「ちよっと手伝って」

「……は？」

「ぼくはあの人たちを止めたい。止めて話がしたいんだ」

「お前、あいつらと話せるの」

「不思議なことだね」説明しようもないので、肩を竦めてごまかす。

「アーテスがいないと彼らとは戦えない。だから、手伝って」

幼なじみはふたつ並んだ真っ青な瞳を見開いて、それから、ばーか、と囁いた。

「何を言うかと思えば。んなのわざわざ言わなくなつて分かつてる」
「ありがとう」

横目ににこりとして見せると、アーテスはふんと鼻を鳴らす。

「なんだお前」かばう男を押し退けて、ユーシアが嘲弄する。「『輪郭』が見えないばかりじゃなく、術式繰りまで不具になつてるんだな」

「悪かったね」

「いつまでも悪あがきしてるからだ」ユーシアの周囲に、剣呑な気配が渦を巻く。「何もかも、さっさと手放せばいい！」

襲いかかる姿のない猛獣を、アーテスが切り払った。澄み渡った高い音が響き渡り、生じた不本意の物理力が向こうの木々を斬りつける。きり、胸に痛みが走る。

今まで、アーテスが戦うことでイル自身が疲労を感じたことはない。けれど今、いつもと違ったあの負荷を感じることはイルの体にした以上、負担をかけた。彼らはやはり、特別の存在なのだ。彼らは、普段雑作もない『ジャッジ』という操作をひどく難解にする。何を否定し、何を受け入れるかの審判を狂わせる。自分同士で意見が別れるような葛藤をもたらず。それが、イルの精神力を削り取る。ユーシアを追うのに必死になったアーテスに、横からユオが剣を差し入れる。するとそれを、ロンの拳が遠ざける。カイロがそれに加勢する。一対一となったユーシアとアーテスの戦いに、アマルナが飛び入った。

「イル」

「先生」わずかの隙に声をかけてくれた養父に、イルは無事を伝えるため微笑んだ。「ご心配をおかけしました」

「だいじょうぶなのか」

「ぼくは……カシーたちは？」

「分かん」

アマルナはアーテスの背越しに敵を睨めつけ、首を横に振る。イルは同じ方向を見据え、低い声で心の底から呻き声を漏らす。

「許さない」

「……お前」

父が言いかけた言葉は、ユーシアの譫妄^{せんもう}じみた呪詛に遮られた。アーテス、アマルナ、イルは故意か偶然か、乱暴な爆発によってちやうど三方向に散り散りにされる。

「なんでだ」言葉となった呪術は冷たく、固く、鋭い。「なんでお前ばかり。大勢に守られて、大事にされて、あったかい場所で、なんでそうなんだ。この上ユリアを奪い取ろうって言うのか？ お前も俺じゃなくユリアを取るのか！」

また出た。ユリアという名が。

彼らにとって、相当重要な意味を持つらしい、その名前。ひょっとすると、それがあの男の言っていたもうひとりの主、つまりイルを探している張本人なのではないだろうか？

その思いつきに答えたのは、現実の女声。

「当たり前でしょう？」

ユーシアが、ふたりに分かれた。

それまでぴったり重なっていたまったく同じ形のものが、すっと横にずれたみたいだった。ユーシアと、顔かたちも、背格好も、何もかも寸分違わぬもうひとりの女性。しかし彼女は、背中にくくらしい髪を伸ばしていた。ユーシアとは違う、もっと華やかな表情をしていた。

「彼は私を選んでくれたの。もうずうっと前よ。ねえユーシア、今さら横からかつさراوحったって、そうはいかないのよ」

その登場に、一番驚いていたのは他ならぬユーシアだった。彼女は自分の呪詛に押しつぶされるようにして踞った恰好で、そっくり同じ顔立ちを呆然と見上げている。

が、女の方はそれっきりユーシアには目もくれなかった。

「やっと会えた……！」

その双眸はイルだけを見つめて、甘く蕩ける。

それはすべてを、問う前から自白した。炎使いを操る何かの力、

ずっと以前からイルを呼び、差し招き、求め続けていた者。自分こそがそうであると、雄弁に語ったのである。

「……あなたは、誰？」

「ユ・リ・ア」

その艶笑に、イルは背筋を凍らせた。

純粹な好意の笑みだった。純粹すぎるあまり、あまりにもあけすけで、攻撃的にさえ変わった、変質的な好意。もっとも本能的な恐怖にかられ、イルが何かの行動を起こそうとした途端。

「動いちゃだーめ」

「……！」

ユリアの真っ赤な唇がしつとりと動き、イルを束縛した。いや違う。体が縛られたのではない。体そのものに、自分の意志が届かない。右手の離れた場所から、アーテスが急かすようにイルを呼ぶ。ユリアとユーシアの向こうには緊迫した父の姿もある。けれど誰よりも早く、ユリアが動いた。彼女は滑るように……ユーシアのような迷いは一切なく……こちらへやってきて、そうしてそのままこちらへ入り込んできたのである。

比喩でもなんでもない。

ユリアはイルの胸元に凭れかかるようにして、上目遣いにこちらを見つめて笑っている。彼女の右腕の先は、イルの中へ消えている。そこはちょうど、開く場所だった。何かが流れ出ていく場所であり、また何かの侵蝕を受ける場所であり……父にしか知らせていない秘密のある場所。

「ずいぶん長くかかった」幸福そうな笑顔が、イルを絶望の底に叩き落とした。「でもこれでおしまいね……？」

彼女が何をしたのかは分からない。が、イルはその時直感的に理解したのだ。今までずっと分からなかったことを。何かがずれたような違和感の正体を。そのずれ幅が急速に増して、完全に外れかかったために。

ずれていたのは。

“ジブン”と“カラダ”だ……！

動かせない視界の端で、その時アーテスが動いたのが見えた。アーテスは何かを叫び、剣を振り上げている。駄目だ、イルは彼女を止めようとした。しかし、動けない。声も出ない。この状態では『ジャッジ』はいっさい効かない。今その剣を振るったら、完全な『^{スライプ}無差別』になる！　が、アーテスは呪術師であつたことがない。イルとして生きてみたことがない。だからそれらのことが分からない。きつと、ただイルを救おうとしてアルトレットを振ったのだ。剣から生まれた呪術の刃は、ユーシアもユリアも、イルも、すべてを射程に捉えている。イルは目を閉じることも叶わず、ただそれを見ていることしかできない。まさかアーテスに殺されることになるとは、それともこれは自殺の部類に入るのだろうか、そんなばかなことを考える。

イルは誰にも殺されなかった。

「ユリアっ！」

ユーシアの取り繕いもせぬ恐怖の叫びが、止まっていたイルの時間を動かした。唐突に支えを引っこ抜かれたようになり、ぐらり、体が傾いだ。寄辺を探した目に入ったのは、胸の辺りではっきり二分された女の体。切り離された腰から下が、砂になって崩れ去る。

「あーあ」

ユリアは半身だけとなっても平然として、時の流れが押しとどめられているかのようにゆっくりと落下しながら、相変わらず笑っている。

「これはちょっと厳しいわねえ……」

イルは驚愕に、かえってそれから目を離せない。自然、目が合う。「でも」その声は子どものように嬉しそうだった。「もう、遅い……！」

その言葉と前後して、ユリアの目が閉じた。勢い時間を取り戻して地に落ちかかるその体を、ユーシアが横ざまにさらい、着地するより早く、現れた時と同様忽然と、消失する。すると傾いだままだ

った自分の体が、本当に支えを失って倒れた。倒れたのに、地面とぶつかった感触がまったくなかった。かと思うと枯れ葉の折り重なった地面が目の前から消え、辺りが全体、真っ暗になる。

最後まで残っていたのは、音だった。最後に聞こえたのは、父の声であった気がした。優しく、今まで聞いたことがないくらい優しく、たったひと言名前を呼ぶ声。

それもすぐに、なくなった。

風の前11年 秋 未踏の地 〽朝の来ない夜へ〽 (後書き)

こんにちは、日野です。少年期編にお付き合いいただきありがとうございます。ございました。青年期編「風のたもと 〽風の年〽」は少々間をあけてまして2011年1月22日(土)から掲載いたします。よろしければご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251m/>

風のたもと ～エンドの剣～

2011年10月3日03時39分発行